



うとう別冊 (1回～40回の記録)



別冊目次

うとう



-
- | | |
|--|--------|
| 1. 20,30,40周年記念誌 挨拶 | 1~5 |
| 2. 20回記念座談会 その一 | 6~11 |
| 3. 20回記念座談会 その二 | 12~15 |
| 4. うとう会・20年の足跡 | 16~29 |
| 5. うとう会番組(1回~20回) | 30~60 |
| 6. うとう会のあゆみ・21回から10年 | 61~70 |
| 7. うとう会番組(21回~30回) | 71~90 |
| 8. うとう会のあゆみ・31回から10年
(31回~40回番組も含む) | 91~110 |
-



協和うとう会

二〇周年を祝して

協和醗酵工業(株)会長 加藤辨三郎

正直のところ驚いた。はやくも協和うとう会が創立二〇周年を迎えようとは。いや、早いばかりではない。任意に発想され、完全に自主運営され、しかも二〇年続き、それどころか年年歳歳人員的にも質的にも向上している同好会は、少なくとも当社にはほかにない。

それは、新井会長をはじめ、世話人諸氏の熱意と努力に負うところ最も大であるが、同時に、会員諸君の深い理解と趣味の豊かさによること、いうまでもない。私は、諸君のたゆみなき精進に対し心から敬意を表する。

たしか二年くらい前になるうか、本社でうたいの会が開かれたことがある。その時、私は家内と共に拝聴した。二人とも、諸君のうたいのすばらしさに舌を巻いてしまった。水原君その他リーダー格の人は、本職に少しも劣るところはないと思った。

また、別の機会に、私は、新井会長の仕舞を拝見したことがある。その時も、あの理論家にして、この芸あるとは、ほとほと感心したものだ。今でも眼に見えるようである。

実は、私も、若い頃、数年稽古したことがある。仕舞も

二、三番は習った。それにも拘らず、肝心の「うとう会」には、全く失礼してしまい申し訳ない。ただ、理解だけは十分持っているつもりである。だから、うとう会が二〇周年を迎えたことはもちろん嬉しいが、それとともに、その実力の充実していることを、一層喜ぶものである。

しかも、その二〇周年記念会を、清風クラブで開かれるとは、なんと有難いことか。諸君もご承知であろうがあの場所こそ、協和醗酵発祥の地なのである。さればこそ会社創立三〇周年の記念事業の一つとして、そこに清風クラブを建立したのである。そのめでたい場所で、うとう会二〇周年記念会を開いてくれるのだ。これを喜ばないでいられようか。私も、他に緊急用件の発生しない限り必ず参上して喜びを共にしたい。

そして、私は、うとう会が今後ますます盛んになることを願ってやまない。ことに、私は、友愛会々員もふるってこの会に参加せらんことをおすすすめしたい。諸君の長寿と健康を願うことでもあるが、同時に、この会は最もよい親睦機関であるからである。最後に、協和醗酵と共にこのうとう会の発展を、重ねて願って祝辞とする。



うとう会のあゆみ

協和うとう会会長 新井 純

昭和三十五年七月十七日、本社、東研、富士観宝合同誼会が熱海荘で開催されました。

観世六名、宝生十五名。

前日夕刻集合して、食事もそこに、翌日の本番にそなえ、夜半まで稽古に励みました。怪盗に、あり金を残らず持ち去られるのも知らず、大小鼓の調子合わせに夢中になっていたのは、忘れられない思い出です。

第二回は修善寺のあさば旅館の舞台を借りました。この時から「うとう会」と称することになりました。本社に磯部さん、東研に水原さん、富士に高橋さんという玄人以上の、しかも熱心この上ない方達があつてこそ、うとう会が芽を吹いたのです。

それよりほとんど毎年、熱海荘で続けられました。熱海つるや旅館での第六回には、勧誘のかいあつて、初めて、四日市工場より大勢の参加があり、また、東京よりご夫人方も来演され、四十名と賑やかでした。

第七回は四日市の皆さんのお骨折りで、四日市倉庫さんの寮をお借りしました。堺工場よりの参加も得られました。それより数回は、網代、三島、浜松と静岡県下で催されましたが、人数の増加に応ずるため、土曜日午後と、日曜日

早朝より夕方までの二日間にわたる会になったのは第十二回からです。昭和四十八年九月でしたが、私は少し調子が悪くて休みました。

第十三、十四回も続けて私は休みました。まことに相すまぬことと思つています。

実はその第十四回が大阪で開かれ、防府・門司・宇部の参加あり、八十名を超える、名実ともに全国大会となったのです。

その後、湯の山、三井寺、湯の山、竜野、袋井と十一月はじめの土、日曜のうとう会が百名になんなんとする盛大さで続いております。

安島幹事らの尽力で、会社からの御後援も得られて、参加がしやすくなりました。

幹事の皆さんのお世話は大変です。会場、宿所の手配、番組の編成、食事の心配などなど、感謝のきわみです。

本当に有難うございます。

今年は第二十回を迎えます。長かった様にもあり、また、もうそんなに！とも感じます。いつまでも「うとう会」が続き、平素遠くにいるお互いの交驩こうかんをたすけ、また、OBと現役との懐しい再会の機となることを念じております。



ごあいさつ

協和とう会会長 新井 純

協和とう会のはじまりは、昭和三十五年でしたから今年で満三十二年になります。

十数名で始まったこの会が、今や数十名の大勢になって、毎年休みなく開かれます。よくも続いてきたものと思われま

す。幹事の方々の一方ならぬご苦労と厚く御礼を申し上げます。

二十周年記念誌の発行後の十年間に、私は五回しか参加しませんでした。申訳ないことです。

特に第三十回は私にとって因縁浅からぬ、防府で催されたのに参加せず、まことに残念に思っています。

現役、OBの同好の士が全国から相集って、二日間にわたり謡い、舞い、はやす。それが三十回を越すとは…。なかなか

か大変なことです。

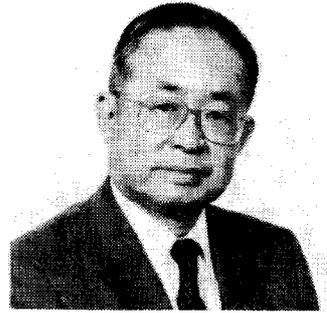
幹事のお骨折りでそれがなされているのです。

繰り返し、ご苦労に御礼を申し上げます。

ご精進の甲斐あって、師範を得られた方もおられるようで、まことにご同慶の至りです。ますます、会を引っ張ってください。

番組を見ると、存じ上げぬ方が多数おられます。若返ってきたのですね。これで会がますます長く続くと思われ、大変うれしいことです。どうぞ、もりたててください。

最後に、何かとご援助をいただいている会社に対し、まことに有難く厚く御礼申し上げます。



協和とう会 三十周年を祝して

協和発酵工業(株)社長 中村寛之助

協和とう会が三十周年を迎え、心からお祝申し上げます。

この会が三十年も続けられたことは、まずこの会を育ててこられた新井会長、観世の磯部さん、富岡さん、宝生の高橋さん、水原さんら関係者の熱意とご努力の賜で、あらためてこれらの方々に感謝と敬意を表します。

昨年八月、前社長が急逝され、私が後任の社長に就任しました。就任した日に新聞記者の新社長インタビューがありました。あらかじめ私の趣味はゴルフということになっていましたが、記者の方々から、今どきゴルフは趣味に入らない、何かほかはないか、と問い詰められました。私は「強いてあげれば謡曲ぐらいか

な」と口にしてしまいました。翌朝、私の謡曲は天下に公表されることとなりました。

私の謡の歴史は中断の歴史でした。始めたのは協和発酵に入社して間もない昭和三十年頃でした。当時、本社は日比谷の第一生命ビルにありました。第一生命に教えにいられていた宝生流の三川泉先生に入門しました。その後、稽古は中断してしまいました。その後、家内が私と同じ宝生流の謡をやっていたので、ときどき共に謡ったり、能を見たりしていました。

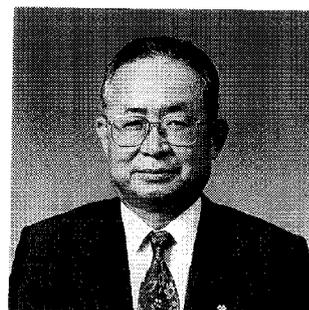
記録によると、私は協和とう会の第九、十、十一回に参加しています。昭和四十五年頃のことです。水原先生の本社宝生会に加えていただいたのです。これ

もやがて中断してしまいました。

正式に謡を再開したのは、昨年の一月初めでした。リタイア後の生活に備えて謡を始めました。昔から面識のあった関西・宝生流の広島克栄先生に入門しました。現在も時間の余裕はありませんが、今度中断せず続けようと月に一、二回の稽古を出社前にこなしています。

今年に入って、七月二十五、二十六日両日、東京水道橋の宝生能楽堂で広島先の大会有りました。私は「翁」のシテ謡い、家内は初めての能で「玉葛」を舞いました。番組を旧師の水原さんにお送りしました。さっそくに、私が宝生を再開したこと、私の家内が能を舞うことに驚き入るとともに、大変嬉しく思った旨のお便りをいただきました。そして今後継続して稽古するように、私への激励もありました。

最後に、協和とう会が今後ますます発展するようお祈りいたします。また、私自身、とう会の皆様とご一緒できる日を楽しみにしています。



うとう会四十周年を祝して

中村 寛之助

うとう会は、発足後四十年を迎えました。まことにおめでとうございます。

何ととっても謡の同好会を四十年も続けてこれたことは立派なことです。これは会員の皆様の熱意と幹事の方々のご努力の賜物です。心からお祝い申し上げます。

うとう会の名簿や、記念誌を拝見しますと会員の中には既に亡くなった方や現在、病いの床についておられる方も見受けられます。

会員は全事業場にわたり、またご家族の方も沢山いらっしゃいます。家族の方は各事業場で、社員と一緒にあって謡の稽古を続けてこられました。謡を通して

同好の志がつながり相互の交流が深まりました。うとう会は、協和の中に趣味で結ばれた新しい人の輪を作りました。

私自身の体験ですが、最近、うとう会の友人の家に招かれた時のことです。

友人は「あなたと一緒に謡をうたったテープがある。一緒にテープを聞きましょうか。」と言われました。二十数年前に友人がシテをやり、私がワキを謡った時のテープでした。当時の懐かしい思い出がよみがえり感動しました。

うとう会の会員の中には謡だけでなく、仕舞を立派に舞われる方や、笛や太鼓・小鼓をよく演じられる方もいらっしゃいます。また、先輩の中にはプロ並みの実力を持ち、能を何曲も舞われた方もおられました。

私はうとう会で、謡曲について何曲かの出演を通じていろいろなことを勉強させていただきました。

私は協和に入社してから宝生流の謡を始め、最近まで続けてきましたが、現在は、足の具合が悪く、謡は中断しています。しかしこれからは舞台で謡や仕舞いは出来なくても、専ら能楽堂に通って、能を鑑賞しようと思っています。何といたっても、能は日本の代表的な古典芸術です。

今まで謡を続けてきたお陰で、能についての知識は多少は持つことができました。能が醸し出す世界を、一般の人よりはよく理解し、堪能することができると思っています。

能を通して、日本の古典芸術を勉強したいと思っている昨今です。

うとう会の今後のご発展と会員の皆様のご精進をお祈りいたします。

(平成十四年三月)

《協和発酵工業株式会社 相談役》

協和うとう会第20回記念座談会・その一

息長く、さらに発展へ励もう

協和の謡の歴史を築いた立場から

協和うとう会——「うとう」は、「謡う」であり「打とう」であり、曲名「善知鳥」にもかかっている。年一回の会を重ねて今年第20回。社内の同好の士による全くの自主運営で二十年。今では協和醜酔はもとより、広く協和関係者の修業の成果発表の場として、また親睦・融和の集いとして大きな会合となっている。この「協和うとう会」の産婆役・育て役をつとめてこられた方々、そしてこの会を次の世代にも発展させていく方々に、それぞれの立場で大いに語っていただいた。〔第19回協和うとう会（五十五年十一月・静岡県袋井市・秋葉本殿可睡齋）で収録〕

第一回は35年、熱海荘で

司会 いつもですとあすのために地合せや、音合せでにぎやかな夕食後のひと時ですが、本日は、うとう会誕生のころのお話をうかがいたいと思ひまして、いかなればうとう会の産婆役、育ての親、そして協和醜酔の謡の歴史をつくってこられた方々にお集まりいただきました。

新井会長、さっそくですがうとう会の発足は何年でしたのでしょうか。

新井 来年は第二十回になるんですが実は二〇周年ではないんです。第一回は昭和三十五年七月十七日に熱海荘で開きましたから、満二十年は今年になるんだが、間がぬけたので第二十回が来年になるんです。最初はうとう会という名前はなく

て、観宝合同ということで、水原一瓢さんと高橋孝夫さんが企んだことだと思ひますよ。

私は、三十四年に防府工場から本社に転勤になり製造部長をしておりましたが、三十五年七月初めに日本酒類との合併問題で大阪を経て九州鹿兒島まで出張したことがあるんです。その帰りに熱海に途中下車して参加したんです。これは日記に書いてあることだからまちがいありません。（笑）

富士は宝生の天下のころ

司会 そのころの各事業場の謡の活動状況はいかがでしたか。

高橋 私は富士工場におりまして女の子のお弟子さんを十数人と男のお弟子さん一人二人をかかえて宝生の天

出席者（発言順）

新井 純（本社・観世）

磯部武夫（元大阪支社・観世）

高橋孝夫（元富士工場・宝生）

西村 淳（本社・観世）

富岡啓太郎（東京支社・観世）

水原一瓢（元本社・宝生）

司会

安島 将（本社・観世）

まとめ

浅井 勝（富士工場・観世）

下でした。観世は大坪さんお一人だっただと思ひますよ。

そんなころあの悪名高き箱根会談があつたんです。一瓢さんと磯部さんといっしょになって、夕方謡をやるうとうということになって、水原さんが太鼓、磯部さんが鼓を打って、私に鶴亀をうたえというんでうたつたんです。ところが、お前のうたいじゃあ太鼓も打てない、鼓も打てないといわれましてね。私は一念発起して……そんなことがきっかけでこのうとう会がはじまったのです。（磯部「あれは組合大会だつたと思ひます」）



「……と日記に書いてある」(新井)。左から新井会長・磯部さん・高橋さん

水原 研究所では、阿部主任研究員、板垣君、鮫ちゃんもおったかな、五人ぐらいでやっておりました。古い人はご存知だと思いますが昭和三十三年、丹沢で三十メートル落ちて三十五年ごろといったらまだ足がおかしかったころです。

司会 新井さん、本社の状況は？

新井 本社には何もありません。私も転勤早々でしたから。防府は盛んでしたよ。男女あわせて二十数人はいましたね。

「観・宝合同でやろう」

司会 宝生の盛んな富士にあつて、

富岡さん観世はどうでしたか。

富岡 西村さんと二十六年に富士工場に入社したころは、高橋門下の宝生が大勢いましたね。観世は西村さんと二人でした。私もはすぐ転勤で防府にいきました。私は二十九年に富士にもどり、三十二年に大坪さんが、西村さんも防府からもどられて、観世が三人になった。そのころ磯部さんが大阪から出張でこられて、水明荘で話したことがあるんです。大西師の会で初めてシテを舞った磯部さんが、太夫の気持だなどと話されてね。水原さんの話も出て、それじゃ観宝合同でやろうよということになって、三十三年にやったことがあるんです。ですから第一回の予備的な会合がその前にあつたんですね。

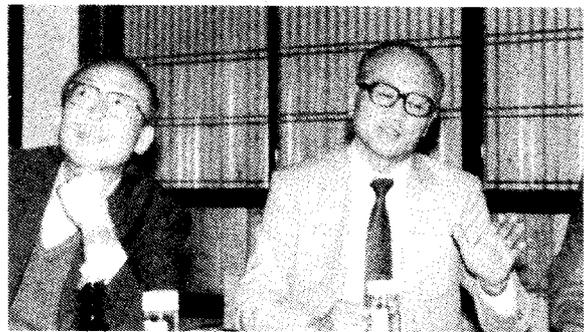
磯部 同じくらいでしょう。

新井 何年に本社にこられました。

磯部 三十四年十月でした。

新井 それなら僕の方が少し早いね。

磯部 そのころ塚はずいぶん盛んでしたんです。当時、松田さん、本山さん、星野さんなんかいて、大



「丹沢で30メートル落ちて……」(水原)。左から富岡さん・水原さん

中でということ富士の高橋さんが、宿の世話から会計の世話をされ、私が番組の作成、写真の撮影などやっておりました。

当時の写真は、たいへんいいですね。全部各事業場にまわして希望をとって、正の字を書いて、焼増しましたんです。しかし、それもくたびれちゃいましたね。その後は写っている人だけパツパツと焼いて送るようになりました。これが十二回ぐらいからだと思えます。

磯部 初回は、ちょうど熱海荘が協和醗酵のものになった年なんで、どこでやろうかといったときに、熱海荘を初めて使おうじゃないかとなったわけです。

司会 そうしますと第一回の構成は、富士、本社、東研の三事業場だったのですか。

高橋 そうです。

司会 案内状などは……。

高橋 謄写刷りでした。私はそれを十年ぐらいやりましたよ。

西村 防府がテープ参加しませんでしたか。

高橋 あれは、二回目ぐらいだったと思いますよ。

司会 何人ぐらいの参加だったのでしょうか？

阪から、長沢常務、前埜課長、亡くなった岡崎課長、私と四人でよく塚にうたいに行つたことがあります。そんな塚の雰囲気をもつ我々が西方の代表として関東の方々と、ワサワサとやって今のような話につながつたんです。

盗難のおまけつき

司会 で、いよいよ第一回のうとう会の発足となるのですが、幹事役などは？

水原 私のところは昔の番組から經理の伝票まで全部あるんですが、十五回ぐらいまでは東京と大阪の真

富岡 んー、親世が新井さん、西村さんと大坪さん磯部さんと私の五人かな。宝生が高橋さん、水原さんと……当日参加の富士の女性といった構成で……。

高橋 富士の当日参加を加えると二十人ぐらいいいたかなあ。

磯部 お茶の人も来てくれたなあ。

西村 二十人もいたかなあ。

司会 多い方がいいんで記録には二十人としておきましょう。(笑)

ところで、今のようでなく、少数でしかも謡の虫が集まったのですから、会の運営などは、そう苦労もなかったと思うのですが……。

高橋 そう、特にはありませんね。

西村 それは盗難防止ですよ(笑)

高橋 それは、あとからいわれたことで、何も最初から盗まれることなんか考えてもいませんでしたからね。

盗難事件の、一部始終

司会 第一回の時に盗難があったのですか。(一同で一回目だ、いやその前だ、と話が混乱、記録不能)

高橋 これだけ年月がたつと記憶もあやしくなるなあ。

新井 あやしくないの、「三十五年七月十六日熱海荘に泊る、カッコ盗



熱海荘での第5回うとう会で(40年)
左から命尾先生・富岡さん・高橋さん・筆者

うとう会と私の師

—命尾静子先生

望月美江

命尾先生が、きびしい能の世界宝生流六百年の伝統を破って、女性で初めて道成寺を舞われたのは昭和二十七年の春と思えました。江戸時代徳川家に仕えた名門、宝生流命尾家を継いで欲しいと申し入れられ、その襲名披露の能でございました。大変な大事業だったと思います。

当時先生は三島の自宅はもちろん、東京、藤沢、熱海とけい古をしておられたそうですが、そのころから二、三年後だったでしょうか、高橋様や、富岡様が、小鼓や大鼓のけい古にいらして協和醜酔とのご縁になり、またまたそのあとの方から私も弟子入させていただきました。

「能は精神で舞うもの、修業をしてひたすらに自分の芸をみがくだけ、舞は孤独なものです。」と先生はいつておられました。

それからあと、昭和三十何年だったでしょう、熱海荘で第一回うとう会が生れたのは。

お忙しい先生も、その会ごとに応援してくださいました。謡の地頭、舞の地謡、太鼓も打ち、一調もされ、番外で美しい舞も舞ってくださいました。

修羅物などのけい古は、背の高い立派なお姿で一本の扇が右手にあれば太刀になり、左手に構えれば強靱な弓となります。「腰に力を入れて」と口ぐせにいわれました。

「左足を少し引き、右足を一歩引き、左足を引き揃える。」この一つの型のヒラキさえ、未だに苦勞の種として勉強している私です。

当時は火曜日がけい古日でした。会社の忙しい時、残業につぐ残業でキリキリ舞をした日でも先生のお宅の門をくぐり、庭の池の端にかけられた石橋を渡る時、鼓の音や、気合のこもった先生の掛声が聞えますとパツと現実から別世界にとび込んだように思われました。新年会、温習会、うとう会、そして、忘年会と一年中、皆忙しい忙しいといひながらも公私共に励みました。

いろんな失敗も重ねながら、女性の部員も多く、語熱心な高橋先生に手をとられ、一歩一歩歩けるようにみんなで努力したあのころをほんとうに懐しく思い出します。

難さわぎ、十七日、合同うたい会二十人盛況」とこの日記に書いてあるからまちがいないの。(笑)

磯部 新井さんが出張の帰りで、大金の方はトランクの下に入れておられたので無事だったが、小銭はちやんと盗まれた。

司会 盗難事件の話は初めて聞く方もあると思いますので、その顛末を正確にお話しできる自信のある方……。

磯部 あと始末までやったので私から……。

熱海荘の一階の小部屋にみんなの荷物、洋服をいっさい置いて、夕食のあと二階で地合せをわんわんやっている間にやられたらしい。気がついていたらみんな洋服のサイフがないんだ。

西村 例外二人あり。(場外から二人はもともと持っていなかったの
声、大笑)

磯部 熱海荘は当時、熱海の酒屋さんのもので従業員も向こうの人だったんです。これは大変ということ
で警察に届けたんです。そしたら翌日、中身をぬかれたサイフがゴミ箱に捨ててあったので、これは専門家だということになったんです。が、われわれ帰る金がない。新井さんが

たまたまご出張の帰りで大金は難を免れたので、そのお金を拝借して帰ったわけです。

で、私は仕事柄、当時の人事部長幾度さんに、これこれこうだと報告したんですわ。幾度さんも笑っておられたけど、まあ熱海荘はまだ借りたばかりで規程もなく、金庫も用意していなかった、会社の管理も悪かったことやら弁償してやる、申告せいということ、あつたかなかつたか知らんけど申告して(笑)、それから熱海荘に金庫を据えつけて自主管理せいということになったんです。

(場外「総額いくらでした」「それをきいてはいけません」笑)

水原 補足、あれは寮とか保養所の専門家だったようですね。その後つかまったと聞きましたよ。

富岡 もう一つ補足、あの日は来
の宮神社の祭礼で、全国の腕ききが集まってたんだそうです。

新井会長 が誕生

司会 ところで西村さん、これまでの参加の中で印象に残っていることは？

西村 それは盗難事件のとき、なぜ私は金をとられなかったかという

そして会社も成長期にあり、その発展と共にとうとう会も、だんだん大きく成長してゆきました。

家事都合により私は退社して三島を離れ住み十年余り、その間健康を害したり、もろもろのことで七、八年けい古を休んでおりましたが、先生との縁は大切に育てて参りました。

けい古を始めて久々に、五十年の大阪のとうとう会に参加させていただき、その盛会にまず驚き、感激はひとしおでした。健康も回復し、それからは毎年先生の指示を仰ぎ、演目も決めております。

すでにOBの今、何時までも変りない皆様のお誘いに毎年参加させていただいておりますことを心より有難く光栄に思っております。昔の懐かしいお顔ぶれ、また次々と参加される大勢の若手の皆様、年ごとに立派な成果を拝聴し、拝見し、すばらしい勉強の場所となっております。このとうとう会は私にとりましては一年の大きな目標であり生きがいでもあります。

今年、はからずも、とうとう会の前に三島神社の行事、「木犀の夕」の奉納舞をお受けしお年を召した先生にいろいろ指導をいただきました。さて、その九月三日は先生のご縁故により、お笛の藤田大五郎師のご来島を得、本番前の打合せの時、藤田先生のお笛に対し拍子盤に向われた先生は八十歳とは思えず、近ごろ丸くなられた背もピシッと伸びて、例の気合のこもった掛声と共にパンパンと拍子を打たれるすさまじさは周囲の人々に息つくひまも与えず、それは見事な一騎打でした。

日ごろはさすがにお年に勝てず弱々しくなりましたが、拍子盤に向われると芸の化身になってしまふのでしょうか？

十一月二日(第十九回)のとうとう会が終ったあと先生に報告の電話を
しましたら、

「無事に済んでおめでとうございます。さあまた来年ですね、私が見
だ生きておりましたら、何かいろいろ考えましようね」とのお言葉。

先生のお年を氣遣うようになったこのごろ、何とも淋しく、ただただご健康と長寿をひたすら希っております。

(昭和五十五年十一月記)

ことですね。

あれわね、ズボンをつるす時、逆さにするでしょ、するとサイフが重いののでとびだしますね、それを見てこれは危ないと思っただんで姫鏡台の中に入れておいたんです。とられなかったのは水原さんと私だけだった。あとはみな油断があるね。(笑)

それと、四十九年から五十年にかけて病気になる五十二年の三井寺のうとう会から再開したんです。あの時は、熊野のシテをやらせていただきました。久方ぶりの再開だったので思い出深いですね。

司会 新井会長が印象に残ったことを一つ……

新井 そうね、もともととうとう会には会長ってのはなかったんですよ。私はその会長を押しつけられたのは何回日のうとう会か忘れましたが、三島の佐野別邸でやった帰り、ソバ屋の二階で飲んだことがある。その時にうとう会というからには会長ぐらい置かなけりゃいかんということで、新井が一番古いのでやらせようと、私が宝生から観世に引っぱりこんだ中川年男さんに押しつけられた。これが一番印象に残ってるね。

僕は好きな者が集まっているんで幹事は必要だが、会長なんて必要な

と思うんですが、ま、名譽会長ということになっておりますので、そのおつもりで……。

あさば旅館の思い出

司会 いえいえ、会長は名譽会長とおっしゃっておられますが、正式に会長で、名譽ではないのでつけ加えておきます。

水原さんはいかがでしょう。

水原 何回目か私の記憶は頼りないですが、修善寺のあさば旅館で富岡さんが池を隔てた能舞台で薙刀をもって勇壮な舞を舞ったことですね。

もう一つは、富士工場の近くの老人ホームで命尾先生に指導していただきながら初めて胡蝶の番囃子をやったことが二番目。

三つ目は、大阪の豊津で中学校の先生をやめられた観世の先生が自分の家に舞台をおつくりになつていてのを借りたことがありますね。あの時赤いのを被り狸々の袴能をやったことが記憶に残っています。

磯部 私もやはり修善寺のあさば旅館の思い出ですね。池の向こうに能の本舞台があるんですね。そこをね、高橋さんに借りる借りるといつて一日借りてやったことですね。

司会 その時は何人ぐらいの参加

だったのですか。

磯部 少なかったですよ。

富岡 観世では、新井、西村、磯部、大坪、私と、宝生は高橋門下と水原さんだったから十五、六人だったかな。

あのあさば旅館の思い出は、大協和への転勤の話を磯部さんから聞いていたので、富士での最後の思い出にと、修善寺の野田旅館のご主人から薙刀を借りて舞って、そして大協和へ転勤したんです。

司会 十何回かまで事務局をやられた高橋さんはいかがですか。

高橋 それは毎年毎年、中心地は私のところなんで、熱海社、三島のお寺、あさば旅館と私が富士におります間は、富士工場が設営せにゃいかんと一生懸命でした。今思うと地理的にも会場にも恵まれていたと思います。

今日のこの可睡齊も命尾先生の謡の会で昭和三十年かに一度使わしていたことがあって、岡田君に当たって見たらと持ちかけてみたんです。

奥山の半僧坊は私自身があそこはいいんじゃないかと当って見たら本当にいいところだった。ただ食いものがお粗末だった。(笑)

息長く続けよう

司会 長い間、ご苦労様でした。ところでこれからのうとう会をどう発展させていきたいか、お一人ずつお願いします。

新井 そうですね、むずかしいことですが、年一度、何人かの人が集まっていっしょに楽しむ、これがいいですよ。息長く続けてほしいですね。

若い人にお勧めして、ロートルは消えてゆくことだし、消えていってしまっただけでなくなってしまう。若い人に引きついでもらいたいと祈念します。

磯部 まったくその通りでね。私も前もって考えてきたことは、今、新井会長がおっしゃったことと結論的にはいっしょで、長く続けていたきたい。単なるお祭りではなく、謡の効用の一つである趣味を通じてのお互いの交流がこの場ではかられる。これからは老人社会になるんでOBもふえていくんだから、OBとの交流をはかる上でも、ぜひ新人を開発して下さいといたい、それにつきまます。



「私は油断しなかった」(西村)。左から磯部さん・高橋さん・西村さん

狂言なども加えて……

高橋 私はね、かつて富士は宝生の大国だったんです。ところが今はさびれましてね。これをなんとか回復したい。まあそれよりも、謡の心は、観世、宝生を問わず喜多流でも同じなのです。四日市あたりで盛んだと聞いておられます喜多流などにも声をかけてみたらどうでしょう。それとも一つ、狂言という私どもは面白いと思いますが自分でやるとなるとなかなかやりにくいも

です。ところが、案外盛んな世界があるように聞いています。狂言なんかに興味をもっていらっしゃる方々にも入っていただけたらと思います。

そして協和のうとう会は、謡、狂言、囃子、仕舞と謡だけでなく盛んにしていただきたいと思えます。

西村 世阿弥は本説を正すといった。本説とはいふなれば、平家物語、源氏物語、伊勢物語などで、こうしたバックグラウンドをもっと勉強してもいいのじゃないか。うとう会の午前中に源氏物語講釈とか、伊勢物語講釈をきくといったことがあってもいいのではなからうかと思えます。

水原 前にもいったことがありますが、謡は世阿弥が始めて以来、全部拍子にのっているということですね。ところが明治以前までは殿様や町方がスポンサーであったんですがだんだんスポンサーがアマになってから拍子のことをあまり強くいわなくなっちゃった。それで、素謡を発明した。しかしもともとは、拍子に合う音楽だったんですね。ですからどうせお遊びでやるんなら、いっちゃったるかど考えていいように思うんです。で、私は拍子のことを、うるさくいうもんですから宝生の評判が悪いんです。しかし素人は袴能

までやっていいんですから、なんとかうとう会では袴能まで出していきたい、努力したいと思えます。

一度やめても必ず戻れ

司会 最後にありますが、後に続く若い人達に望むことを一言ずつ……

水原 謡は一度やめても必ずもどる、と前に話したことがあります。前にやっていった人をどんどん引っぱり込んでください。

富岡 うとう会では、やたらと難かしい曲を出さずに、もっとポピュラーなものでいいんです。その表現の仕方をよく練習してやってみる。そうすればもっと多くの人が参加できると思えます。

もう一つ謡をはじめたからには、地拍子を習ったらしい、舞もやってみたらいいし、できれば囃子もやったらいい。そうすれば、面白さ、興味が倍増するように思います。機会があったらぜひこの分野にも目を向けてほしいと思えます。

西村 私の主張はただ一言、歴史と文学を知ろう、この一点です。

高橋 私の経験から、このうとう会をずっと続けていくためには、やはり素謡だけでなく舞も囃子も続けていきたいと思います。そうするこ

とによって謡と囃子の関係を自然と会得してくるものなんです。

天狗 になるもよし……

磯部 私は二つある。一つは、おやめになつてはいけませんよ。稽古していかないからうとう会に行かないよというのではなく、うとう会だから行くか、となつてほしい。

それからもう一つは、私は謡が下手だからと謙遜していらっしゃる方がいますが、謡が上手になりたければ謙遜してはいけません。天狗になりなさいといいたい。天狗になっているうちに天狗の鼻を押し折られる時がある。その時にもう一つ上手になる。それと、上手な人の謡を聞くこと。うたい方がわかると耳がこえてくる。そしてあの人のまね、この人のまねをしてみることです。上達するものなんです。天狗の鼻を押し折るのは我々は上手ですから、大きな声でうたってください。

新井 お互に興味を同じくする者が、どうぞ仲よく末永く、ごいっしょに。私もやれるかぎりやります。これも一つのご縁ですから、いつまでもくじけることなく、これを祈念しております。

司会 ありがとうございます。

次の二十年の発展を担って

若手世話役の立場から

初舞台の思い出など

司会 さきほどまでは、うとう会の二十年の歴史をふりかえる座談会をお聞きしていましたが、この座談

会では、日ごろ各事業場で謡のお世話をいただいている若手の方々を指名させていただきました。そしてこれからの二十年を担うみなさん方に「うとう会」や謡曲に対する忌憚のないご意見をおききしようというわけです。

まず、うとう会に最初に参加したころの思い出などからおうかがいしましょう。

田辺 私の初舞台は、四日市工場当時で五十二年の希望荘の時でした。謡は、その前年に富岡さん（現土浦工場長）から強引に勧誘されてはじめました。最初は、本の記号もなんにもわからないときに、熊沢先生の前で、とにかく俺の真似をせいとま

るっきり口うつしで、固くなって声を出したのを覚えています。ただ、希望荘での初舞台はなにをやったか覚えていません。

司会 先ほどの先輩たちの話を聞くにつけ、古い人ほど古いことをよく覚えていられるもので若い人は、ほんの数年前のことも覚えていない。

（笑）
小山 私が最初に参加したのは、四十九年の館山寺だったと思います。入部のきっかけというのは、入社したときに富士工場と東研を見学したので、その時東研の研友会の副会長をやっていたのが奈良さんでして、いろいろとクラブ紹介をしてくれたとき謡曲部の紹介がありました。その時、私も馬鹿なことを聞かなければよかったです。

「何流ですか」と聞いたのが悪かったです。それと同期入社の方がちょうど森さんの部屋でして、しばしば昼休

みに森さんの室に行くので、ちょっとついて練習を見にいったのが入部と認められてしまいました。あれよあれよというまにここまでできてしまいました。

野次馬で謡も鼓も……

長倉 私が始めたのは、小山さんより二年前です。三島の玉沢でやった時が最初です。

なんとなく野次馬で首を出して始めたのがきっかけです。玉沢では橋弁慶の子方でした。それから二、三年たつてから、鼓でもと……謡も鼓も一向に上達しなくて、ただなんとなく続けています。

司会 私も長倉さんとだいたい同じですね。四十七年に入つて、二年ぐらいで鼓を始めたんです。似たようなもんですね。
長倉 いえ、でも、そちらはずっと上達なさって……はずかしい。

出席者（発言順）

- 田辺 博章（東京支社・観世）
- 小山しづり（東京研究所・宝生）
- 長倉 久子（富士工場・宝生）
- 鍛冶 義延（東京研究所・宝生）
- 須藤 恵紀（土浦工場・観世）
- 山田 義之（堺工場・観世）
- 沢野 忠男（防府工場・観世）
- 司会
- 山家多喜男（四日市工場・観世）
- まとめ
- 浅井 勝（富士工場・観世）

司会 いえ、そんなことないですよ。（あわてて次の人を指名）

鍛冶 私の入社は四十八年です。東研で実習がありまして、それが森研でした。そのあと防府工場に配属になったわけですが、その時森研でお別れの席設けてくれました。その席でかなり強く謡に誘われたんです。でついうっかり東研に帰ってくるのがあったら謡をやりますよなんていったら、一年後に東研に転職になりました（笑）それでもまだ



「ついうっかり謡をやるって…」(鍛治)。左から田辺さん・小山さん・長倉さん・鍛治さん

覚えていて男の約束だからと四十九年に始めたわけです。うとう会は、五十一年の希望荘でして、その時は融の連吟をやりました。当時は夢中で懇親会の記憶はあるんですが、謡の方はあまり覚えていません。

当時、組合の役員をやっていた関係もありまして翌年の三井寺から懇親会の司会をやらせていただくようになりまして、あの冷えた飯をたべています。

東研の宝生も先輩たちがご栄転されまして仲間もだんだん少なくなり昨年から私が部長をやるようになりました。今後は、いろいろな人たち

のご意見をお聞きして人集めとか練習のやり方について参考にしたいと思います。

クモの糸にひっかかり

司会 その辺の話は、後ほどとして、須藤さん初舞台の思い出などを……。

須藤 さきほど田辺さんは、富岡さんに強引に、と話されましたが、僕のとときはそれほどなかったです。そうですね富岡グモの張りめぐらしたクモの糸にひっかかったという感じですね(笑)それに私も四日市のなつかしさも手伝って……。

それと、私も生活に余裕があるわけでもないんで、手っとり早く旅行ができて、しかも会社から補助が出ると聞いていましたので、そんなことで始めました。

初舞台は、赤とんぼ荘で小袖曾我でした。元来音痴で、人前でしゃべることは苦手でしたが、謡はお経みたいなもの、抑揚がなくて、大きな声さえ出していけばいいじゃないかと思っただけで始めたんですが、初舞台では、胸が詰まってしまっ……。声を長く続けようと思って、たくさん息を吸いこみますね、すると終わったとき、まだ息が残っていて

それが出てきてしまって苦しかったなあという感じがありましたね。

それと、会に出てきますと前にお世話になった人たちと旧交を暖めることができるんで謡はどうでもいんですけれど、毎年できたいなあと思います。

山田 私の最初は、あじろ荘でやったときですから古いことは古いんですが、その時は羽衣の連吟をやったと思います。うとう会に初参加したときですが、堺から参加した者は、もう寝ようかと床についたんですが、どの部屋からも鼓や太鼓の音が鳴りだしまして、とても寝てられんというので、また起き出して練習を始めたということ覚えています。

また、土浦の須藤さんもおっしゃっていました。うとう会では、堺から転勤された方々がいろいろな事業場におられますが、この会を通じてお会いできる点がいいですね。それと、外の事業場はきびしく勧誘されているようですが、堺はその点おとなしくやっております。でも今年はお若い人がふえまして……。

自分のレベルが一目でわかる

司会 今年は、堺は新人二人を連れてこられて成績がよかったですね。

おとなしく勧誘されても実績があれがいいわけ……。(笑)

沢野 私は、四、五年前からの参加です。

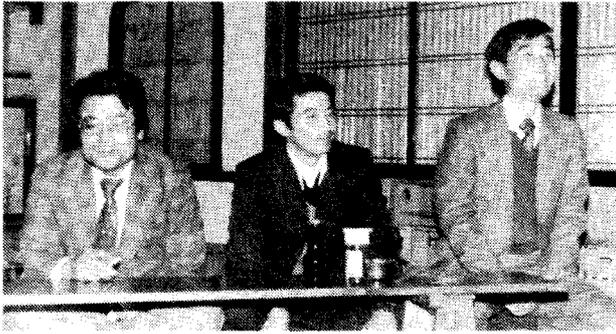
うとう会についてですが、ベテランからきのうきょう初めた新人までが参加されていて真剣に練習の成果を発表されており、自分のレベルが一目でわかる会だと思います。

一年の練習で自分がどのくらいになったのか、昨年とくらべてどうだったかなど自分なりに評価ができてひじょうにいい会だと思います。また、いろんな曲、いろんなうたい方があり参考になります。最近きびしさがちょっと足りないのではないかなという気がします……。(笑)

「秋」といったら「うとう会」

司会 さて、この座談会のメンバー選定のねらいですが、これが掲載されます二〇周年記念誌を新人の勧誘にぜひ使いたいと思ひまして、それにはベテランの話ももちろん参考になります。それより初心者の方が案外参考になるんじゃないかと思ひましてね。中にはかなりのレベルにある方もおられますが、入っていただきました。

そういう意味で、うとう会につい



「秋といったらうとう会…」(沢野)。左から
須藤さん・山田さん・沢野さん

ての現在の心境をお聞かせください。
沢野 全社の中でも会社の補助を
 いただいてやっているのは文化クラ
 ブでは、このうとう会だけではない
 かと思います。スポーツであればテ
 ニスぐらいでしょうか。他は対外試
 合がほとんどで。そういった面でこ
 れだけは続けたい。秋といったら
 「うとう会」(拍手、声援あり)と
 会社に強く印象づけるためにもずー
 と続けてほしいですね。
防府から大勢参加しますと、運賃
 もかなり苦労しますので補助は助か
 ります。

また、ベテランの方々も定年だか
 ら引退するなどといわれず、末永く
 参加してうとう会を盛りたててはし
 いと思います。

文化部で協和全体が集まるのは、
 これしかないと思いますので、これ
 を誇りにしていきたいと思っています。

謡と西洋音楽に共通点

司会 たいへん力強いご意見をい
 ただきましたが、そう力強くなくて
 も、ななめにかまえたご意見でも結
 構ですからお願いします。

小山 私が謡に関して思うことで
 すが、私たちの年代は、日本音楽と
 いいますと、とかく老人のやるもの
 だと思っている人が、ずいぶんいる
 と思うんです。でも本質的には、西
 洋音楽と謡は似たところがあるよ
 うに思えます。私は今オーケスト
 ラの方もやっていますけど(注
 ビオラ奏者)拍子のとり方はかなり
 違います、息の入れ方が似ている
 ところがあるんです。それはどこだ
 というまでにはいたっていませんが
 ……。

秋田の方に「わらび座」というオ
 ーケストラがあるんですけども、そ
 こに入団するには西洋楽器ができる
 ことと日本の楽器が一つできること

が条件なんです。日本人なら日本
 の楽器も必要だという心意気がうれ
 しいですね。(場外から声あり「日本
 の小唄、端唄、俗曲みんないいぞ。
 もっとも私の小唄は、宝生流になる
 が、日本の音楽をもっと愛しましょ
 う」といいたいね。)

司会 日本人である以上、日本音
 楽には心の上で繋がるものがたくさ
 んあるように思います。鍛冶さん
 いかがですか。

鍛冶 謡に関して僕はまだまだわ
 からない面がたくさんあるんですが
 今お話がありました日本音楽には興
 味をもっていきます。

東京のど真中のある団地の子供は
 日本語の子守歌が一番よく眠るとい
 う研究報告があったりするぐらいに
 周囲がいくら西洋的になっても、し
 ゃべり言葉の調子が心に響くものな
 んですね。

それでうとう会に関しては、そん
 なに力強いことは申し上げられませ
 んが、大いに懇親会の充実(笑)を
 はかりたいと思います。

うとう会が終わったら、また仕事を
 一生懸命にやる!

集団プレイの妙味を体得

田辺 私は謡曲に誘われる前は詩

吟をやっていました、詩吟のサーク
 ルが崩壊しまして、ちょうど渡りに
 舟のように誘われて謡に入ったんで
 すが、詩吟と謡曲のちがいを一言で
 いうと、個人プレイと合同演奏の違
 いだらうと思います。

謡のよさは、やはりみんなの合奏
 であるという点だと思います。

これが能の形になると、囃方、仕
 舞やる方との合奏になる。みんなの
 和の極限状態で表現されるものが能
 という芸術じゃないかと自分で評価
 しています。西洋音楽の中にもオペ
 ラがありますが、それ以上によさを
 秘めた芸術だと思います。

西洋のオペラは楽符があり、全体
 を指揮する指揮者が一人いますが、
 能の場合は、地頭はありますが、こ
 れも全体を指揮するわけではないし。
 聞いた話ですが、プロの能楽師さん
 の間には「仕掛ける」という台詞が
 あるといいます。これは地頭がシテ
 に仕掛ける、つまり自分のテンポに
 引き込もうとしてテンポを早めたり
 遅めたりする、これに対してシテが
 応じて微妙に反応する、あるいは囃
 方が反応するといいます。そういう
 相互の関係が実に面白くて、集団プ
 レイの妙味が、謡の中で体得できる
 んじゃないかと思っています。

こういう意味で、もっともっと多くの人が謡を見直して、西洋音楽からもどっていただきたいと思ひます。

新しい仲間を増やすために

司会 謡の心を極めたようなお話でしたが、こういう若い人がたくさんいますのでどう会も心強く安心していただいで結構かと思ひます。こうしたお話をもう少しやりたいのですが、時間の制約もありますので、次の話題に移らせていただきます。

で、今日お集まりいただいたのは、各グループのお世話で日ごろご苦労をかけている方々ですので、今後の新人の勧誘をいかにやっていけばいいのか、その辺のところをお聞きしたいと思ひます。今年実績を残されました塚の山田さんからお願ひします。

山田 今年は新人が三人入ったわけですが、一人は、お茶をやってもらった人で、お茶と謡はつきものだろうと勧めた人、もう一人は、平尾工場長が宝生流に誘った人ですが、塚はみな観世の先生に習っているんで観世に入ってもらった人で、もう一人は、なにもやっていない者でして健康にもいいのでどやと勧めました。

二人とも動機はちがいますが、塚は一時参加しなかった時もありまして、これはいかんという事で努力しました。**司会** 須藤さんはご自分の経験からいかがですか。

須藤 この間、家でうなっていましたら、小六の子供が、テレビの水戸黄門より上手だよと(笑)。家でやってみると子供にもリズムのようなものはわかるようになるんじゃないでしょうか。

私は、さきほど鍛治さんが、懇談会の充実といわれましたが、私もなかなか宝生だ観世だとやりあっているような(笑)印象をうけましたのでまず懇親会を大いに充実させて仲良く発展させるようお願いしたいですね。

観世と宝生は一体

高橋 観世と宝生とは一体なんですか。素謡はちょっとちがいますが、囃子は諸流一体なんです。明日それを実演しますからよく聞いて下さい。

田辺 うとう会でも今は、観世と宝生をわけていますが、あれはいっしょにできんのですか。シテを観世ワキが宝生といったように、地謡は合同というわけにはいかんと思ひますが……。

安島 参考に私からお話ししましょう。かつて富士工場は宝生の方がたくさんおられて、大坪さんが一人観世だったことがあります。そのころ宝生の中に入って大坪さんがうたったことがあります。さては大坪さん宝生に寝返ったか!と思つたんですが、一人観世でうたわれまして。これは高橋さんが、そうした実験を試みたんだと思ひます。いかがですか高橋さん。

高橋 そうです。その通り。ほかにいうことなし。

聴きたい人たちの参加も

司会 新人がほしいですね。特に女子の新人が。長倉さんいかがですか。**長倉** ン……私は特別動機があつてはじめたのではなく、なんとなくですから。

あのー、若い人にやってみないかと誘うんですが、いろんなものに興味を示すんだけど、日本古来のものには、どうも興味を示しませんね。しつこく誘うのもいやですし……。話しを聞いてもらうと少ししつこくてもいいのかなとも思うんですが。塚工場の様子を聞きますとあーいいなあ、ちょっとひがんでみたくありません。

前にはクラブ員でない人が二、三人うとう会を聴きにきたんですけどそれっきりです。

司会 声をかけても受けつけませんか。

長倉 脈のなさそうな人には私も声をかけませんので、まるっきりだめということではないんですが。富士には前にやっていた人が結構いますし、もっと女子が参加するといいいんですが。

小山 今はほかに遊ぶことがたくさんありますので、なかなか誘いづらいんです。

こういう機会に聴きたい人に参加してもらったらいかがでしょうか。今は謡をうたう人の会ですが、聴く人の会でもいいのではないのでしょうか。聴くことによって底辺を広げれば、謡をやる人も増える可能性はあると思ふんです。(賛成!の声多数)

司会 まだまだご意見をうかがいたいと思ひますが、時間もきましたので、この辺で終りたいと思ひます。ベテランの皆さんの期待に応えるよう、私たち若手は努力しなければなりません。今日のお話の様子では、十分応えられそうな気がしてきました。ありがとうございました。

協和うとう会 — 20年の足跡

水原一瓢

はじめに

「協和うとう会」の第20回大会を記念して小冊子を作ろう、という声が起こったのが、先年(第19回)の打上げの時。いつものことながら「安請合いの口の災い」……というものも、14回以前の関係書類は全部筆者が持ち歩いており、50年の暮に(財)クリーン・ジャパン・センターに出向してからも、そのファイル・ボックスのひとつを占領していました。

このようなわけで、時口の経過とともに第1回からのまとめという責任が次第に重くのしかかってきて、とうとう約半年。この五月の連休に手をつけないと秋の会に間に合わないということで、思い切って始めた次第です。

番組のファイル、写真集、資料な

どを3㎡ぐらゐのかなり大きな食卓の上にのせてみると、ちよつとした「山」。安島さんから受取った15回以後の資料も合わせ、これをどのよう解きほぐしていったらいいか……かなりぬけている部分もあるようで、目下やや暗然の態といったところ です。

昔の番組をめくってみると、あの時こんな曲をやったのか……など今では完全に忘れてしまっている、自分でも驚くような事が沢山みつかります。そこでまとめ方としては、「番組」はできるだけ忠実に再現し、それにエピソード(筆者の忘れた所は皆さんに聞いて)などを加えて書いてみたら……と考えました。

どのようなものができあがるか、今のところ皆目見当が付きませんが、とにかくペンを持ってみることにします。

(56・5・2記)

協和うとう会、の名称

学生時代・三島時代・盛岡時代……と、番組のファイルを一枚一枚見ているのですが、古いものは20、30年前のガリ版ですから、赤茶けてシミも沢山出ています。少し筆者の私事にも関係するので恐縮ですが、まず目についたのは、盛岡工場時代のものです。この頃、簡裁の判事で石沢さんという方(宝生流囑託)がおられ、私にとっては謡・鼓・太鼓の先生というだけでなく、人生の師でもあります。小生も未熟ながら盛岡室生会の一員として末席におりま



第19回で「実盛」を舞う筆者

したが、石沢先生とともに囃子のグループを作っておりました。そしてその会の名前について先生といろいろ考えあぐねた末、「謡う」ということと、鼓や太鼓を「打とう」というふたつの言葉をかけて「うとう会」がよいということになりました。すっかり忘れていましたが、ここに左記のようなタイトルの番組が残っています。

第一回うとう会囃子会番組
とき・昭32・4・17(水)17時半始
ところ・木伏・鉄道クラブ

この頃、盛岡工場内でも謡曲部を作り、十人ていど集って稽古をしていました。北田宗平さんもその一員であり、前記のうとう会へも加わって、彼は太鼓をしていました。

この会はその後も続いたようですが、私はこの年の五月に、東北沢にあった旧東京研究所へ転勤になりました。こたつの中で酒杯を傾けながら、ああでもないこうでもないといふ石沢先生と会の名称をひねっていた夜のことをいまでも思い出しますが、後の「協和うとう会」というのは、この時の思案がもとになっております。

(石沢先生は二年前に亡くなりました)

「観・宝合同」の胚胎

協和とう会は、観世と宝生の二流合同でずっと運営されてきました。が、まだこのかたちが作られない頃、合同開催の胚芽という意味で忘れられないことがあります。それは昭和30年の7月のことです。

筆者らが改装なった盛岡工場で、アミロ・液体黒こうじ折衷法によるアルコール発酵を始めるに当り、まず千葉・稲毛の微工研と政府の工場ついで防府工場へ一カ月ほどの見学・実習の出張をしたことがあります。このころ防府では、新井純先生（当時、技術部長）を師として観世の謡曲部が活発な活動をされており、現在の観世流中堅の人たちは、ほとんどこの教室の出身者です。

「遠くからよく来た」ということで、一夕、クラブで歓迎の意を兼ねた謡会を開いてくれました。小生大いに感激して謡ったり打ったり、た

しか番組外で鶴亀の太鼓も打ったように記憶します。「岩千鳥」が協和醗酵と合併になり、はじめて主力工場の防府に行つて、新参者一人を加えて会をしてくれたそのことがひどく喜しかったのです。その時の開催の世話を熱心していたのは、記憶違いでなければ西村淳さんだったと思います。

宝生はたまたま私一人でしたが、この一夕の会が観宝合同の嚆矢と言えます。防府の観世はその後ますます隆盛となり、盛岡の宝生は私の東研転動と共に消滅しました。記念にその時の番組を記載しておきますが、新井・小野・今井・森脇・水野・和田・西村・浅井・海野・磯部……など、とう会と縁の深い名が見えます。また女性方の多くは社内結婚によって〇〇夫人となられその意味からも懐しい番組であります。（28ページ参照）

本社・東研・富士

観宝合同謡会 35・7・17
(第1回とう会に相当)

熱海荘

前の19回の時の座談会をはじめとして、いままでとう会の初期の頃の話をする機会がありました。私

わかると思いますが。富岡啓太郎さんも「第1回の前に何かあったように思う」ということでした。

高橋孝夫さんの記憶メモと小生の資料と突き合わせて考えてみた結果、昭和35年の熱海荘でのこの会を、とう会と命名される前の、第1回に相当する会ということにしてよいと思えます。番組としては、仕舞・囃子・一調のそろったなかなか立派な内容で、現在も活躍している人の名も多く見えます。番組は一枚のガリ版に納めるため、小生の小さな字で二段組みで書いてあります。事業場別の参加人員・世話役担当・経理・写真などの資料は小生持っています。高橋さんからの番組草稿が小生あての手紙の中に残っています。さてこの会でひとつの事件がありました。二階の二部屋と一階の廊下を隔てた小部屋ふたつに服や荷物をおいて、翌日の申し合わせや宴会をどんちゃんやっている最中に泥棒に入られ、ほとんどすべての人がやら

第2回とう会

(昭36・8・20)

伊豆・修善寺温泉 あさば旅館

小生の手もとは資料がなく、番組は新井さんからいただきました。

れてしまったのです。熱海荘が健保の寮となつて日も浅く金庫も用意していなかったこともあり、当時の幾度人事部長（故人）の特別のお計いで、被害の全額を会社が負担してくれることになりましたが、その時は一同青くなるやらしゃくにさわるやら……。西村さんはどういうわけか財布を部屋の鏡台の引出しに入れておいたので被害ゼロ。筆者は、恥かしながら財布を持たず、小銭入れに札を押し込んでズボンのポケットに入れておいたので無事。一番の高額はたしか新井先生。運よくふたつに分けておられてそのひとつが助かったので、翌日皆でそれをお借りして東京まで帰りついたという次第です。この時の泥棒、会社の寮専門の空巣で、一二年後につかまったそうです。連綿と続くとう会も、実はその第1回に盗難という洗礼によって出発したわけでありませぬ。（28ページ参照）

この第2回から「うとう会」の名が見えます。おそらく第1回のあとで何か名称を考えようという声が起こり、筆者が盛岡時代につけた「うとう会」を思い起こして提案したのと思われず。

その頃でも、盛岡では石沢先生を中心という会なるものが活動しており、所を異にしました発案者のひとりとはいえ、無断で使用することにはちょっとはばかりを感じて、石沢先生に「協和うとう会」と上に協和をつけた形で了解をいただく手紙を出したことを憶えています。

このガリ版の番組は達筆で高橋さんの字のようですが、初めての使用の時から協和がぬけております。最近の番組では時折「協和」が復活している時もあります。

さて「あさばの会」ですが、筆者は前に、森永のベニシリン工場（伊豆・大場）に勤めていた関係もあり、この旅館には何回か泊ったことがあります。大池を隔てた山裾に古い舞台があり、そこで謡っていると水面を渡って見所ともいえる旅館の建物までよく声が通ります。ひなびた中に何とも幽妙な趣があります。

加賀藩の家老の分家が所有していたものをあさばの先々代が譲り受け

大正年間に修善寺に移したものとわれています。旅館代が結構高いので、一部屋に何人も重なって寝て一人当りを安くしたように思います。

この時は真夏でかなり暑く、それに松材の舞台板が固いので足が痛くなって、多少難行苦行の感がありました。長刀を振ってさっそうと熊坂を舞った富岡さんの姿が印象に残っています。

この舞台については、後に狩野川台風によってうしろの山が崩れ、鏡の間や橋掛りがこわれましたが、現在では立派に改修され、各流の先生方に利用されているようです。

この会の資料は残っていませんので、番組から参加者表を作成しておきます。（29ページ参照）



「熊坂」を舞う富岡さん（第2回）

第3回うとう会（昭37・6・17）

協和健保 熱海荘

この第3回については余り鮮明な記憶がなく、皆さんに問うても反応がありませんでした。番組によれば、

仕舞四番（富岡・西村・望月・新井）
舞囃子（望月）、居囃子三番、素謡

では新井さんの景清をはじめ六番出ています。この回も資料が残っていないので番組から参加者の名簿だけを作っておきます。（30ページ参照）

第4回うとう会（昭38・6・23）

協和健保 熱海荘

このあたり熱海荘での会が続いており、曲目・参加人員とも前回と大差ありません。今回は富士工場の女性の参加が多く、この方々は朝三島から行けるので、収容人員の少ない熱海荘でも大丈夫ということになったわけです。

この年初めて命尾静子先生の参加ご指導を得、小ちんまりした会もぐっと引きしまったように思います。命尾先生のことについては機会あるごとにお話していますが、ここでごく簡単にご紹介しておきます。

師は若くして宝生宗家・先代九郎のもとに内弟子に入り、深川の家に

通われました。従来女人禁制であった能の本舞台で、女性として初めて道成寺を披かれた第一号で、四拍子の堪能なことには驚嘆します。現在の協和醜酔の同好中堅以上で富士工場にいた人の大方は、観・宝の別なく師のもとで笛・太鼓・大鼓・小鼓の薫陶を受け転勤で各地に散っています。これらの人が一年に一回、七夕の星のようにうとう会に集まってくる、曲りなりにも囃子を演奏できるのはこのような理由によります。富岡さん、高橋さんなどセミ・プロともいえる方がたがおり、ひとつの会社の中で何とか四拍子を合わせられ

るとするのは本当に珍しいことで誠に誇らしいのですが、これも命尾師の直接、間接のおかげと中せましよう。先生の本名は蛭海静子、宝生流の地方の名門であった命尾家を受け襲われたわけです。

第5回うとう会 (昭40・10・31)

協和健保 熱海荘

この4回には、宝生の夫人方が初参加されており、どうしたわけか観世の新井・磯部両氏の顔が見えませんが、命尾先生は、番外で笹の段を舞われています。(31ページ参照)

第4回が昭和38年、第5回が40年ですから、資料の限りでは39年はうとう会を開催しなかったようです。ちょうど経営合理化のあとでもありそんなことも影響しているのかもかもしれません。筆者が、どこかで回数を間違えたように思っていたのは、39年のこの年あたりが原因のようです。これで氷解。本年の第20回は間違いありません。今回も、富士の高橋さんのお世話で命尾先生に応援・指導していただきました。この回から東研の宝生が八名加わり、土蜘蛛と紅葉狩で初舞台。現在の安島名幹事はこの年より番組に現われ、新井さんがシテを勤めた「三井寺」でワキツレを謡っています。

仕舞六番、独鼓一番(望月・駒の段)。囃子は四番、山姥と船弁慶の

(小)を牧野母堂、狸々と山姥の(太)は命尾先生が打っておられます。また師の番外仕舞は野宮。高橋さんともうひとり、たしか三人で地を謡ったと思います。舞をやらねばその地は語るはずもなく、小生この頃は舞を始めてまだ一二年の頃で、もとより野宮などという難曲はつい

最近習ったくらいのもので、さぞかし命尾先生、内心では……と思うと今でも冷汗三斗の思いです。筆者の手もには、この回からかなりしつかりした資料が残っています。事後の会計報告や写真の配布を始めたのはこの時からで、今資料を見ますと感無量のものがあります。一人当りの宿泊代・四五〇円、夜の一杯代・一五〇円、昼の弁当(すし)・一五〇円、面白いのが、アルバイ

ト一人頼んで一、〇〇〇円(一人当りの負担五〇円)という領収書があります。とにかく東京組は一泊して一日謡って全部で八三〇円。富士組は日帰りで三八〇円で済んでいます。今から十六年前のこと、今の約十分の一といった感じでしょうか。今回から始めた写真の作成・配布では、事業場ごと各人ごとに見本を回覧して注文をとっています。このあと何年かこの方式を続けるわけですが、今考えるとよく面倒なことを勤勉にやっただけです。事後全員に配布した会計報告の末尾に、来年も

第6回うとう会 (昭43・10・20)

熱海市海岸 つるやホテル

参加人員の膨張という現象をかかえて、うとう会はこの年から会場を求めての放浪が始まります。東京・富士・四日市のできれば中間点という静岡県あたりになるので、富士の高橋さんがこの後何年かの間、宿泊所・会場を求めて大奮闘することになります。その手始めに、今回はつるやホテルの夫人が熱海宝生会の会長として活躍されているとのこと、交渉の結果ここに決まりました。盛会を期したいが、会場が変わって宿泊代が高くなるかもしれないので各グループで積立てを始めたかどうか……などとアピールしています。今回は35名、今後の運営に熱海荘では小さすぎるのではないかと感じ始めている様子が見えます。また今夏ばかりだったのが、この5回から秋の開催となり、これが現在まで踏襲されているわけです。いわゆる「会」としての運営は、この第5回に概略の基礎ができ上がったように思われます。(32ページ参照)

宿泊のこと、番組の調整、囃子の組立てなどで、高橋さん・富岡さん・水野さんとの間で飛び交った手紙は今数えてみると二〇通を超えています。番組調整の下書もかなりの枚数に上ります。高橋さんの動きを物語るものに、後に会場となった袋井の「可睡斎」の情報もこの頃すでに見えています。水野さんの手紙には四日市(湯の山)の提案があり、次の伏線となっています。

この時の番組は高橋さんの字によるガリ版です。不参加の方々も実際の進行も臨機に行うので、実際の結果は予定の番組と多少違った形になります。そこで修正版を資料として残そうということも考えたのですが、会の進行の世話が多忙なので、なかなか完全にはできません。この6回の会では、たしか安島さんと思いますが現実通りの修正番組を残してくれたので、ここにはそれを記載することにします。

今回は服部・丸田・森山・西村・河野・守弘さんから東京の夫人方の参加が特徴的です。命尾師のご息女、

蛭海雅子さんが初参加で、仕舞。先生は番外仕舞として江口。囃子は四番。(大)富岡・(小)水原・(太)命尾師・(笛)蛭海・(地)高橋ほかによる早笛・働入りの居囃子(船弁慶)がはじめて演奏されました。大広間の舞台は、旅館によくある間口は広いが奥行の狭いものなので、蛭海(殺生石)、富岡(春日竜神)、師の番外(江口)の仕舞。望月さんの舞囃子(松虫)など、ちよつとひしゃげた横広の動きになりましたが、そこはベテラン、狭い板を上手に使って見事に舞い納めました。(33ページ参照)

第7回うとう会 (昭43・10・20)

四日市倉庫 湯の山保養所

理由は忘れましたが、昭和42年は開催せず、とんで43年に第7回ということになりました。この時は水野さん、富岡さんをはじめとする四日市(大協和)の面々が八面六臂の大活躍でした。四日市倉庫(株)の堀木専務が藤波涛洗会員で、水野さんが小波会員、地元の態沢師範との関係も深く、大協石油の方々も加わり四日市倉庫の保養所をお借りすること

になったわけで、「湯の山拡大大会」といった様相を呈しました。また今回から、川崎工場長を先頭に堺の面々が総勢6名、山を越えて参加されたのがエポックメイキングな出来事でした。今回初めてうとう会が富士川を渡って近畿圏へ出るというので、水野・富岡・高橋さんとの連絡も密で、手紙や葉書が束になって残っていま

す。とくに四日市の皆さんが精魂をこめて運営の準備をされたことの表われとして、番組が今回初めて機械印刷によって作成されたことがありますが、やはり下手な手書きのガリ版より立派です。またこの時の宿泊・会場の雰囲気もよく、その印象を喜んでか51年、53年に再度湯の山(希望荘)で開催されています。

番組には載っていますが、東研組は何かの理由で参加できなかったようです。手もとに修正版がないので水野さんの経費の明細書から参加人員表を作っておきました。宿泊費・九〇〇円、会費・三五〇円、昼食代・一四〇円、打上費・一六〇円……とあり、泊った東京・堺組が合計

第8回うとう会 (昭44・11・16)

協和網代荘

8月6日、筆者から各方面に出した手紙の中に、「場所・熱海市下多賀杉山洞阪本家・栄阪別荘(一泊二食付一、八〇〇円ぐらい)近々に協和の保養所になるらしく、そうなればぐつと安くなると思う。大小部屋数十分……」とあります。19日の通信では、九月より当社の寮「網代荘」

になることが決定。一泊二食で一、〇〇〇円ぐらい。24人宿泊可能。11月15日(前夜)は熱海荘・網代荘に分かれて泊ること。四日市油化・大協和・堺・富士・本社など30名ぐらいの予定。東研は参加できないらしい。囃子関係の人は申合わせをするので必ず泊ること。朝定刻に始め

ないと遠くへ帰る人、名所見学のこ
となどあるため、泊まった人も早起
きのこと……などあります。

前回湯の山で裏方を勤めた水野さ
んからの便りには、川崎（塚）工場
長の意見として、連休を利用して
一日ゆっくり遊山がしたい。来年は
そのように考えてくれ、11月から堺
では積立を始めた……などのこと
が記載されています。土・日の連休

を利用して二日間にわたって開催す
るのは第12回（奥山・半増坊）以後
のことですが、これは川崎さんの言
われた遊山のためではなく、うとう
会が膨張して一日の番組では納まり
きれなくなったためです。しかし、
古寺・旧刹を会場に選定する幹事の
努力により、深山・美庭を楽しむこ
とができるようになったことも事実
です。

網代荘は山の上のかなり高いところ
にあり見晴しはすばらしいのです

が、会場の広間はプラスチックで手
狭ま、次第に拡大するうとう会にと
っては間尺に合わず、以後利用され
ることはありませんでした。

経理の総括表によれば、宿泊組は
一、六〇〇円ぐらいですんでいます。
今回の番組は高橋さんのガリ版にも
どっています。ここには安島さんの
修正による実際に行われたものを載
せておきます。

今回初めて浅原さんが参加（阿漕
のシテ）、品のある正確な謡をされ
る鈴木元監査役は二回目。これも二
回目の堺は「井筒」と「通小町」の
難曲。大協石油も婦人方が3名参加
され「紅葉狩」を無本で謡ったのに
は一同驚嘆。囃子は五番出しましたが
「朝長」などという大変なものも見
えます（太なし）。私事ですが、亡
妻が「放卜僧」の小歌（小）を打っ
ています。（35ページ参照）

第9回うとう会（昭45・10・18）

三島 佐野別邸

この佐野別邸の会は、参加者が50
名に達したことで、うとう会として
はひとつの節目になるものです。番

組はこの年に初めて手書きのゼロツ
クスとなり、会場案内図の入った高
橋さんのものと参加者名簿をのせた

筆者のものと二通りが残っています。
どちらが現実に近いかを決めるため
に、写真の注文表なども突き合わ
せた結果、筆者のものを実際版とい
うことにしました。

この年の特記事項は次の通りです。
①大協石油の方々の参加は今年で三
回目、「うちの会社にはこんな和
やかな集りがない」ということで
皆さん大変喜んでおり、来年もお
願いしたいと言っていること（水
野さんからの便り）。

②男女の別、申合わせのための囃子
関係者の同宿などややこしい宿泊
条件に苦労したが、ついに同一事
業場の人で「泣き別れ」が出てし
まったこと（筆者から出した謝り
状）。

③網代荘・熱海荘・水明荘の3カ所
に分宿し、朝佐野邸へ出勤という
手順なので、朝寝坊ができないか
ら注意のこと（事前の配布文書）。
④当日は富士工場の茶道部の協賛を
得たこと。

⑤油化には緑さんという笛をやる人
がいるので参加を勧誘するのとこ
と（水野さんの手紙）かくて緑さ
ん初参加、囃子・紅葉狩、小袖曾
我に出演し明調をひろうしたこと。
⑥磯部（武）さんが久しぶりに参加

し、地頭で活躍。

⑦鈴木（正）さんのシテ、新井さん
のワキ、緑さんのワキツレによる
素謡、小鍛冶、本社（宝）山県・羽
衣（クセ・キリ）など……。

⑧本社（宝）が13人にふくまれて初参
加の人が多かったこと。

⑨本社（観）が謡曲部として初参加
したこと。
……などでしょうか。

参加人員が50人になったことで、
この会のあとでうとう会運営の基本
的な考え方について検討されている
ので、これを要約しておきます。

（磯部・高橋さん・筆者の間で交
わされた書簡より）

(1)素謡（有本）は一グループ一曲と
し (2)連吟・独吟・仕舞・囃子など
の地は原則として無本 (3)仕舞・舞
囃子を増強する (4)ゆくゆくは袴能
までもってゆく……などといういさ
さかきびしい案に対し、(1)素謡一番
の時間を短くしてもよいから（一部
抜いて演奏）、できるだけ番数を増
加し、全員何らかの役をもてるよう
努力する。

(2)無本の原則はいいが強要せず、自
発にまかせる。(3)2〜3年後に袴能
を目指し、ポツポツ能舞台の会場探

索を始める……何れにしても、仕舞・囃子をやらない素謡党が圧倒的に多いので、これらの人びとが抵抗なくのびのび語る雰囲気作りを基本としよう……というのが結論です。これらの意見が後の二日続きの開催につながっていったわけです。

佐野別邸の庭も美しく、お茶もよく、すばらしい会であったことを申し添えます。

佐野邸では打上げの会ができないので、終了後田中屋という店の二階に移動しました。この時中山年男さ

第10回うとう会

(昭46・10・24)

浜松佐鳴湖畔 西 遠 荘

参加者が徐々に増え続けてきたうとう会は、先の第9回で50名となり好きな者同志が集まって適宜に楽しむという安易なやり方では運営できない……という実感が、私も幹事連の気持ちのなかにも迫ってきていました。50人以上を一度に、カ所に、しかも安くという条件はなかなか難しく、熱海荘・網代荘をはじめ、いかげんな民宿などでは当然不可能ということでした。どうしても山寺の僧坊や大きな国民宿舎などを対象と

んが、「うとう会」という会があるのに会長がいけないのはおかしい。大先輩である新井さんに会長になってもらったらどうか」と提案され一同パチパチ。かくて第9回のおわりに「新井うとう会会長」が誕生したのであります。このことは、「日本合アル」に新井会長をお尋ねした時、電話で中川さんにも確認しました。因縁？の田中屋が、そば屋だったかうなぎ屋だったか、新井さんも小生もとんと失念しております。

(36ページ参照)

するほかはありません。関東と関西のちょうど中間に位置する富士・高橋さんの宿舎探策も急を告げてきました。今回は6事業場、観・宝別のグループ数ではり。参加と宿泊の有無、部屋割り、演奏曲目と役、囃子の調整など……水野・高橋・富岡・磯部・筆者の間に飛び交った連絡の手紙はまさに束をなしています。中には出張中で何とも決められない。当日臨機にやるからかんべんしろ、など

という悲鳴もグループ責任者の文面にあつたりします。(今こうして読み返していると、時間ばかりたつて少しも筆が進みません。)

今回は案の定曲目も多くなり、まさに分単位の進行をやらないと、遠いグループは帰りの列車に間に合わなくなる恐れがあります。そこで番組の最下欄には、曲の分数を計算して細い予定時刻を記入しました。番組は数回書直しの後、筆者細かな字でB4版2枚続きのものができ上り各グループに配送しましたが、どうしても直前になっての不参加などで変更が出ます。今回は、安島さんの労作による実演奏の修正版があり、ご丁寧にもこれを清書して事後に発送したものです。ここにはこの表を載せておきます。(37ページ)

この年のトピックスとしては、東研の観世が初参加(八倉巻・木村・岡地3氏)。東研(宝)も久しぶりで参加。今回初めての試みとして、観世ベテラン組が起請文入りで大曲正尊を出しています。(シテ・磯部(武)ワキ・西村、地頭・新井)。囃子は山姥はともかくとして、中舞入りの胡蝶、その太鼓を筆者が打っていますが全く記憶がなく、今打てといわれても自信がありません。

詳しい会計表は資料ファイルの中に見当りませんが、西遠荘の23、24両日の領収証(宿泊・宴会・打上含み)から計算してみますと、宿泊で多少つめ込まれたとはいうものの一入当り一、九〇〇円以下ですんでいます。まさに今昔の感があります。この西遠荘は佐鳴湖畔の畔のちょっと高いところにあり誠に風光明媚、会場は二階の60畳近い大広間、ちょうど天気もよく実に爽快な一日の清遊でした。

会のあとで磯部さんと意見交換しましたが、参考までにその内容を簡記しておきます。

- (1) 今までベテランは役をもたず主に地頭を勤めてきた。今回初めて試してみたら、今後ベテランの役にやる大曲を、観・宝一曲ずつ出すようにしたらどうか。
- (2) 舞囃子・居囃子は毎回数番出ているが、次回から番囃子を一番導入して味の濃いものにしてはどうか。役・地方・囃子方は夫々遠く隔っているので、テープの交流によって稽古すればいい。
- (3) 人数が多くなってきたので、大広間(または別室)の二つの隅を使い、観・宝別々に謡いまくる歌仙会風の時間を作ってはどうか。当

然本持参の関係から曲目だけは予告し、役はその場で抽選で決める。ユカタなどでやると楽しいから、夏のうちとう会も再考してみたら：

(注)この考え方は実行したことがなく、埋もれていたのを今再発見した次第。今後に生かしたいと思うが如何でしょうか。

(4)工場の定修と夏休みをかみ合わせ
(金)到着のみで会合はやらせず
(土)到着のみで会合はやらせず
(日)朝早くからとう会。夕食は宴会と翌日の申合わせ。

第11回とう会 (昭47・9・17)

三島市玉沢 本山妙法華寺

この回が寺の僧坊を利用した初めです。この寺は日蓮聖人を初祖とし、日昭尊者を開山とする七〇〇年の歴史をもつ名刹。三島駅から箱根の方角へバスで三〇分ほど入った山深いところ(当時バス代六〇円)。信者慰安ということで聴古園の一角に浴室(鉱泉)を設け、法筵・会合・保養・お籠りなどのために大書院を開放しています。ちょうど台風が来ていて天候が悪く、大協石油の人たち

(日)午前中とう会継続。昼食と打上げとを兼ね、そのあと解散(観光など)

(注)現在定着しているのは、この案とよく似ています。

高橋さんも大いに気合いが入っているらしく、会あとの手紙に、浜松在・奥山半僧坊、本興寺、岩水寺、豊川在・鳳来寺山など次回の会場を研究中……とありました。(37ページ参照)

(六人)が急いで帰るなど多少条件が悪かったのですが、今回も地元ということで設営一切、富士・高橋さんの綿密なお世話により盛会のうちには終了しました。新井会長は今回から日本合成アルコールとして参加。一五、〇〇〇坪の庭園、老杉古松、朝霧の中の散策など、皆さん初めての古寺における開催を楽しまれたようです。久しぶりに命尾師の後見をいただ

き、とう会としては初めて宝生「胡蝶」の番囃子を演奏しました。役、地ともに無本だったように思います。番組は高橋さんにより青地の紙にオフセット刷りのものが作成されましたが、安島・長その他の人の努力によって演奏通りの修正版があり、これに収支報告を加えて参加者に配布しました。ここにはその現実版を掲載しておきます。写真は従来の注文

第12回とう会 (昭48・9・15・16)

浜松北 奥山・半僧坊

前回の玉沢・妙法華寺の印象が大変よかったです。今度もということで、前から懸案の浜松より少し北に入った奥山・半僧坊が選定されました。いよいよこの回から、(土)(日)を利用した二日間わたる大会に成長します。もとより中間地点、富士・高橋さんの設営です。簡単に宿泊の世話といっても、事前に必ず足を運んで下見を行い、皆に相談の上決定し、再び出掛けるか電話で正式に申し込み、刻々に変化する人員を連絡訂正しながら当日を待ち、その間に交通や部屋割りの案内をする……というわけですから、大変な手間が

かかりました。さてこの寺は、後醍醐天皇の皇子・円明大師の開創ということで歴史は約六〇〇年。臨濟・方広寺派の大本山で、老杉古杉に包まれた60余棟の諸堂、とくに奇岩怪石が印象的です。浜松駅前からバス約1時間。かなり北に入るわけですが、それはその名も「奥山」。この度のトピックスは、防府工場(小山・岸田両氏)と大阪の斉藤(弘)さんの初参加。今回は小生家庭の事情あり、番組の事前調整についてはすっかり四日市グループ(水野さん)にお願いしました。

浅井（昇）さんのシテによる正尊、居囃子・熊坂、舞囃子・玉葱（望月）、高橋さんのシテによる二回目の番囃子・羽衣が出ています。

今回は修正版がありませんので、事前配布の番組をそのまま掲載しておきます。参加者名簿は、高橋さんの宿泊部屋割表と小生の写真配布表などから割り出して作ってみました。翌日参加の作村、滝さんを含み総勢64名。総経費約16万円でしたから、一人当たり二、五〇〇円程度ですんだこととなります。

第13回うとう会（昭49・10・19〜20）

浜松市 館山寺荘

前回終了後、湯の山や大阪市内での開催計画が徐々に練られていまして、本年はとりあえず高橋さんの世話によって、浜松市・館山寺荘が選定されました。浜松駅からバスで40分（当時一六〇円）、内浦湾をロープウエーで渡った対岸にあり、県立公園に指定されている風光明媚な所。うなぎ・スッポン・のり・かきなど海の幸を期待しながら、19日（土）昼までには皆さんいそいそと到着。定刻の13時にはもう初番の声が開始

環境としては申し分なかったのですが、サービスマスなし、食い物（精進料理）少し、寝巻なし……これも禅寺のこととて当たり前。腹を空かせながら皆さん立派に誦い納めました。しかし深山旧刹の思い出、忘れられません。寺好きの新井会長が参加されなかったのは残念です。安島さんによると、「蔵酒」を積んだ紅野さんの車が遅れ、自宅へ電話を入れるやら、世話人やきもきの懇親会だったようです。（41ページ参照）

めていました。うとう会は時間の正確さを誇ります。番組が盛り沢山というより前回で味をしめ、本年も土・日2日間にわたる開催でした。日新しいこととしては、安島さんのご苦勞により、この回から初めて会社の補助をいただくことになりました。

- (1) 片道の普通運賃+会場費等
- (2) 飲食関係へは使用しない
- (3) 対象は社員（出向社員を含む）
- (4) 一括の形で支給する

という基本的な考え方で運用されます。この時点から、安島さんの方へややこしい経理計算の役が移っていきました。運賃計算や宿泊、飲食費の一人あたりの負担分を算出して各グループごとにまとめてバックするというわけですから、何時間かは会に背を向けて電卓と格闘することになります。その間に自分も誦い、夜の宴会、打上げの司会、全体の時間スケジュールの伝達……と仕事は山ほどあります。私の記憶では、この回あたりから安島さんの総合司会の本格的な活躍が始まったように思います。安島さんによると、筆者と当時の厚生課長・森山清孝さん（本社・観世）の間で下打合せが行われて会社からの補助が実現したのであって、安島はそれを受けて当時の平田主任と事務的な詰めを行った程度……とありますが、筆者は全く忘れてしまっています。何れにしろこの援助については安島幹事の業績であって、私も会員は随分助かっております。重ねて会社に対しお礼申し上げる次第です。

本年初めて宇部工場の観世が藤沢佐都子さんを中心として4名参加され、いよいようとう会の版図も広がってきました。磯部（武）さんが大

阪として参加（4名）。東研（観）に元気な野口・志村2名が加わり計6名。東研（宝）も12名に増加。転勤により岡田さんが富士組として出席。初めて山家さん（油化）の顔が見えます。

演奏面では、山家さんの独鼓（小）百万、高橋さんの独吟（勸進帳）。小鼓をする人総勢八名による連調（羽衣キリ）が大、太、笛入りで圧巻。本年は東研（宝）の正尊。磯部（シテ）水原（ワキ）による、名実ともに観宝合同の道成寺。居囃子は二番。舞囃子三番という盛况。それに今回初めて観世方の番囃子・班女（シテ・浅井、ワキ・大坪）が最終を飾りました。

参加人員は、どれが変更後の確定版がよくわかりませんので、番組・地割表・宿泊部屋割り表などから何とか作ってみました。合計74人、史上最高であります。なお前回のあとでアピールした会員の名簿作りは、グループ責任者を委嘱するなどして一応の完成をみましたが、転勤などによる変更が激しく、機能を発揮しないまま資料袋の中に残っています。（42ページ参照）

第14回うとう会 (昭50・10・18〜19)

大阪・吹田 山手会館

今まで各グループへ流す正式な文書は筆者のところから出ていたのですが、今回から安島さんがこの事務を引き受け、「うとう会・事務局」の名でいよいよ本格的になりました。

まして今度の大阪の会は、磯部さんをはじめ斎藤さん、浅原さんなど大阪組の肝入りで、板の本格舞台を借りるといふ画期的なもので、しかも防府・宇部はもとより初めて門司も参加する名実ともに全国大会であります。費用については事務局から、五、五〇〇円+自前の交通費という事で、財布の中身の準備をよろしく……。

と注意をしています。何せ初めて大都会の真中でやろうというのですから無理ありません。その上、うとう会の草分けとして会をここまで築いてくれた富士・高橋さんの現役最後の記念の会ということもあり幹事一同手綱をしっかりと準備にかかったわけです。

まず大阪市内で80人以上が安く泊れる宿を探すことから磯部さんの苦

労が始まります。あそこもだめこもだめ……と筆者あての通信が何通も残っています。80個以上の昼食を請負ってくれる店の探索も大変です。会社に入っている給食会社ではどうだろうか(二七〇円)、これでは少し貧弱で文句が出るかもしれないから少し質を向上して三五〇円ぐらいにしようか……などとあります。

結局宿泊はニューナニワ・ホテル(南区大和町)二泊一食付で三、五〇〇円と決まりました。まさに当時としても折衝努力の成果です。

さて盛り沢山の番組をこなすためには、朝の起床から分刻みの戦争となります。

次に出る人は、前の曲をやっているうちに控室に集まって待機していること。そうすれば、見所がギュウ詰めということもない……などという注意書きもあります。宿所と会場の間を電車や車で往復するという少し落付かない条件も初めてのことで、極端に言えば起床から就寝までが進行係の責任範囲。従って各担

当世話係の役割りも細分化され綿密に決められました。

会場についての磯部さんの手紙には「千里の近くで持主は松井さんという高校の校長をひかれた人。立派な稽古舞台(本舞台よりタテヨコ3尺狭い)。鏡には松あり。正面の見所は25畳、ワキ正面は16畳、使用料平日は八、〇〇〇円、日・祭は一〇、〇〇〇円。何とかうとう会でも借りれそう……」などとありました。

写真は今まで小生か水野さんが撮影し、作成・注文とり、配布・代金回収などは筆者がやってきたのですが、今回は袴能などで大変なので、誰かに頼めないだろうか……などと頼んでいます。安島さんの会社補助に対する申請も、文字通り全国大会につき……と力が入っています。

緑色の横長の紙の表裏に、史上最多の曲目を盛った立派な番組が大阪方の手によって作られました。今数え直してみると素謡19、独・連吟8、仕舞12、独・連調3、居囃子3、舞囃子1、袴能1ということ、ひとつの会社の中でこれほどの会が開けること自体稀有のことと思います。

前日は宇部(女性)の雲雀山ほか。キリに高橋さんが番外ということ

薪之段(鉢木)の独吟。心情を盛った選曲でした。翌日は山家さんのシテの嵐山。久し振りの堺組による正尊。防府(女性)による葵上。門司の船弁慶。観世のベテランによる大曲「大原御幸」。とくに初参加の防府・森脇亮さんの仕舞、謡の立派なこと、および柳柳子さんの仕舞・野守、その入魂の舞は印象的でした。そしてキリは、うとう会始まって以来初めての袴能「狸々」をもってめでたく終演しました。

今回は本格的な板で少し足が痛いようでしたが、本当にすばらしい二日間でした。忘れられないのは、笠原利雄さんが謡そっちのけで、終始写真撮影に全力を傾けてくれたことです。おかげで皆楽しいアルバムを持つことができました。

ここに修正版と思われる番組を掲げておきますので、当時の思い出のよすがとしてください。会が終わったあとの磯部さんの手紙には、今後の運営などについて綿々と述べたあとに、「……うとう会も終り、何かはりあいがぬけた感じ……」とありました。(44ページ参照)

第15回うとう会 (昭51・11・6・7)

湯の山 希望荘

うとう会20年の歴史を回想してみ
るのに、この回以前まではその基礎
固めの時代であり、14回の大坂舞
台の会はその前期総仕上げという感
があります。15回からは筋立てにも
運営にも皆がなれて、一応の定常期
に入ったように思われ、参加数も80
名台に安定しています。

安島さんから厚生課長へ提出した
申請書にも、

・例年通りOBを含めた同好者の全
社的な集いとして……経費節減のき
びしい折ではありますが、格別のご
理解とご配慮を……

といった表現があり、初めて補助
を願った時のような気負いは見られ
ません。

今回は四日市組の肝入りで、湯の
山の希望荘が選定されました。一階
の大広間(90畳)を会場とし、それ
に中広間(60畳)もあるので練習・
申合わせにはこの上なく、風景も雰
囲気も最高でした。皆さん満足の余
りか、一回おいて第17回も再度ここ
を会場にしています。

四日市の方々の力の入れ方も格別
なものがあり、鏡板(衝立風)と舞
台位置設定用の青竹(支柱付き)が
製作されました。鏡板には立派な松
の絵が書かれ、分解・運搬が可能で
あります。会場に入ってまずこの設
備に度肝を抜かれたのですが、これ
らが皆四日市の方々の手作りと聞い
てまた然。この鏡の前青竹の区画
の中で、すべての謡、舞が演奏され
たわけです。

防府の藤戸、門司の和布刈、宇部
の加茂、合アルとしては新井会長の
シテによる玄象。それに筆者が盛岡
時代に南部公の蔵の中から発見し手
を加えてまとめた「若手山」という
稀曲。また観世(合同)の太曲・景
清。居囃子一番、舞囃子三番。……
何れにしる90畳の大広間なので演ず
る方も見所もゆっくりたっぷり。誠
に豊かな二日間でした。

九月一日付で富岡さんの土浦転勤
のこともあり、また私事ですが、筆
者が前年の11月末に(財)クリーン
・ジャパン・センターへ出向したこ

ともあり、この会あたりから世話役
の新旧交替が次第になされ、四日市
・山家さんの活躍も始まります。
なお資料を見ていましたら、「打
上会で新人賞、努力賞などを出すよ
うにしたらはげみにもなっていないが
……」という意見が出ております。
これに対し、磯部さんや筆者は「上
手下手は別として、皆が楽しく……

第16回うとう会 (昭52・11・5・6)

三井寺 法泉院

天台寺門宗の総本山、園城寺とし
て能・謡に縁の深い名刹・三井寺。
番組・山家さん、会場・斉藤、磯部
さんのお骨折りによります。各事業
場の返事を集めると、予定として103
人になりそうだというので、大阪方
の幹事はかなり腰を入れたようで、
宿泊や交通の案内は詳細をきわめた
ものでした。「寺のことゆえセルフ
サービスはある程度覚悟のこと。三
井寺の夜はかなり冷えるかもしれな
いから、セーターなどの用意が必要
……」などと注意を流しています。

観世合同の隅田川。宝生合同の藤
戸。今回は土浦から、富岡さんが大
人数を率いて参加し、大仏供養。舞

という初回からの趣旨と、謡本来の
精神からこの件一寸気が進まない……
……」などという返事が出されています。
会のあとに安島さん出の配布文書
に、会場よし、参加者多し、中身
よし……とありました。

(注) 部屋割り、地割り、修正番
組の三つから参加者一覧を
作成 (46ページ参照)

囃子二番、居囃子・朝長。キリには
観世合同の番囃子で土地柄に因んで
「三井寺」全曲を謡い納めてめでた
く終了しました。

筆者の記憶では、たしか当口は雨
だったように思います。境内を散策
できなかったのか一心に謡ってばか
りいたのか、余り寺の風景を覚えて
いません。それに今まで書き忘れて
いましたが、僧坊の会には必ず朝の
勤行や説教には有志が参加していま
す。

寺が会場の時にはいかにも「手作
りのうとう会」といった感じですが。
今回は斉藤さんの飲物確保の努力も
あって、一泊三食付で四、〇〇〇円

也。有難いお寺でした。会社補助38万、徴収33万円、結局87名の参加ですから一人当たり四、五〇〇円なにしの出費でできたことになりました(足代負担分除き)。またこの会の設営に関しては大変な苦勞があったようで、予約後にお寺の奥様から断りの報が入り、あわてて磯部、斉藤二氏が伺い、加藤会長のお話をしたりして、それでは……ということになったのだそうです(磯部さんの話)

第17回うとう会 (昭53・11・4・5)

湯の山 希望荘

前回のあと筆者のほうから、「本舞台への憧憬絶ちがたし。奈良には金春さんの舞台あるはず。堺さんひとつ折衝たのむ……」という注文を出しました。しばらくして、福井さんから「宿泊に難あり」ということで奈良を断念。前々回と同じ湯の山に決定。油化・山家さんたちに再度の世話を願うことになりました。

また会場の広さの不足もさることながら、きびしい住職夫人の「追及」に世話役一同汗だくの苦勞もあつたようです(安島談)。寝所が狭く史上最高の重なり具合で、いびきどこのさわぎでなかつたように記憶します。

秋深い三井寺でのうとう会、……月には乱るる心あり。ましてやつたなき幹事なれば、許し給えや人びとよ……と安島さんの配布文書にありました。(47ページ参照)

さんが堺から(観)浅原さんが九州から参加しています。今度も番組は盛り沢山で数えてみますと、素謡・19、独、連吟・11、独、連調・3、仕舞・7、舞囃子・2、でした。素謡では、観世合同で大曲・正尊と松風、宝生合同で道成寺を出しています。

参加人員81名、会社補助約三十五万円。徴収四三四、〇〇〇円なので一人当りの出費は片道の足代+五、四〇〇円ぐらいということになりました。うとうか。

この会に、四日市研究所・上森茂さんの自作の面(小面)が掲覧され

皆を感じさせました。(49ページ参照)

第18回うとう会 (昭54・10・20・21)

竜野市 赤とんぼ荘

播磨の小京都といわれる竜野市の高台、播磨平野を一望に、遠く瀬戸の島々を望む風光絶佳の地。第18回はここが選定されました。国民宿舎「赤とんぼ」の名は、郷土の詩人・三木露風の代表作「赤とんぼ」に因んでつけられたとのこと。

「……ひとつの曲を事業場の枠を越えて皆で謡うことよって、協和の連帯感を一段と深め……今回初めて、日本列島の中央より少し西寄りになったため、例年より多少交通費が増えることになりましたが、よろしく……」。安島さんの申請書の中の一節です。

今回の選定は磯部さんの努力によるもので、詳細な下見の報告が残っています。この時は、20号台風が関西に上陸し、日本を駆けぬけた直後で、交通機関が大混乱し、竜野までたどりつくのに皆さん苦勞したようです。私事で恐縮ですが、筆者の場合は、まず小田急で何とか小田原ま

で出たのはいいのですが、新幹線も東海道も全面ストップ。仕方なく帰ろうとしていたところ、時刻表を見上げている高橋さんとばったり。いろいろ足を探した末、わずかに動いている各停しか方法がなく、一駅でも竜野へ近づこう、という悲壮な決意で、通勤・通学用の電車に乗り継ぎ乗り換え。名古屋までたしか六、七時間。まさに終戦直後以来のことでした。私どもは同行2人、話し相手があつたからまだいいのですが高野嬢など東研の人たちは似たような苦勞をしたようです。途中で竜野へ電話を入れ、前日の曲を翌口へずらすことを頼んだりしながら宿舎へ着いたのはたしか夜の10時過ぎでした。日本の東西から、タツノヘタツノへ、とそれこそ涙ぐましい努力をしながら三々五々。執念というか気狂いといおうか、芸の道で自分の役に穴をあけるのは大変なことなのにその責任感というか、夜中まで苦勞

話に花が咲いたことでした。

観世合同の景清、宝生合同の隅田川。舞囃子・熊野(望月)、拍子をあしらった船弁慶。いつものことから防府・柳さんの舞、キリの全観世の番囃子・小督は庄巻でした。

宿舎の予約については、会社の得意先「ひがしまる醤油(株)」の専務などの口添えにより、実に六カ月以上も前に仮予約ができた。そうです。(磯部さんの便り)。

社内報への投稿については、7回あたりから一度も欠かしたことがなく、打上会の席上で安島幹事から一事業場へご下命があり、「承り畏つて候」と神妙に決まります。余り辞退することも無いのは、連帯感溢れたうとう会ならではの現象であります。

しょう。

かかりについては、会社補助四八〇、〇〇〇円、会場予約料などを含め徴収分三七六、七〇〇円、計八五六、七〇〇円。従って一人当り自己負担の足代(片道) プラス四、九〇〇円程度かと思えます。全経費の約半分を補助された会社(厚生課)に感謝する次第です。

今回は台風というアクシデントにもめげず、一過快晴の播磨平野に謡声を響かせ、皆さん満足して引上げたことでした。

故中島義昭さんを追善し、全観世で「江口」を謡ったことを思い出します。(52ページ参照)

第19回うとう会 (昭55・11・1〜2)

静岡・袋井 可睡齊

今回の開催地は再び静岡へ帰、高橋さんのおられない富士としては岡田さんの出番となつて事が運ばれました。可睡齊という寺は東海道屈指の禅(曹洞宗)の大道場で六〇〇年の古刹。かつて幼ない家康とその父を戦乱の巷から救ったことがあり

その恩儀に対し家康は一〇万石の待遇を与えました。一〇万坪の境内、林間の諸堂など、その偉構と美庭に感じ、謡そつちのけで堪能している人もありました。寝所に当てられた各部屋の襖や天井の絵の立派なこと、会場となった瑞竜閣の一七〇畳の大

広間、とくにうすさま安置の東司(お手洗)など、記憶も新しいことと思えます。もちろん有志は、朝の勤行に参加しました。

演奏では、富士(玉)の大曲・朝長、全観の昭君。半尾さんの一管・楽、近藤さんの独鼓(太)。居囃子一番。それに、命尾先生を中心として例年三島大社で催されている師作の舞囃子・木犀(望月)。筆者の舞囃子・実盛をキリに全曲目をめでたく謡い納めました。

宴会のあとで、幹部と若手のふたつの座談会を行い、20回記念出版への準備をしたことも印象に残ります。この数年、うとう会の会計の幅も八〇万円を超え、いよいよ、大会の様相を続けております。本年は、

八一一、七〇〇円のうち会社補助三九〇、〇〇〇円、徴収分四二一、七〇〇円、84名ですから足代以外各人約五、〇〇〇円ということになります。

婦路の新幹線の乱れ、日本シリーズ「近鉄」の敗戦など面白くない向きもあつたかと思えますが、宿泊・会場係の富士組、番組係の山家さん(四日市)、司会の安島・鍛冶さんなどの活動に支えられ、何よりも会場のすばらしさによって、すべてよし、の第19回でした。

(注) 記念の第20回を前にして、会計幹事の安島さん、実に十二万円という繰越しを作つて準備しています。(54ページ参照)

おわりに

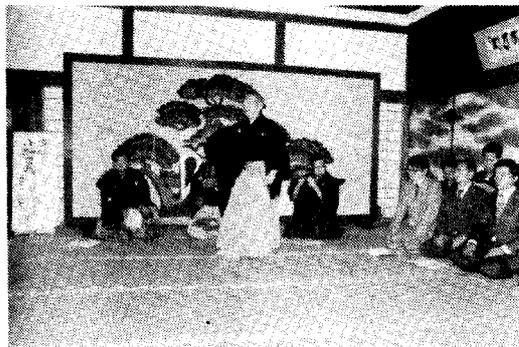
「協和うとう会・20年の足跡」もようやくのことで、了に漕ぎつけました。なるべく短くと思つて努力したつもりですが、かなりの枚数になつてしまいました。鬼の安島、に半分ぐらいいは切られるのではないかと恐れています。

「失礼な、俺のことが書いてない

……」とお叱りも沢山受けそうですが、紙面の関係でお許しをほどを……。このあと、今まで衝に当つてこられた新旧の幹部に、筆者の忘れていたトピックスや記憶違いなどを教えていただき補筆するつもりです。20回の記念大会を迎えるに当たり、東京の本舞台を借りて本格的に祝い



△第13回 (49年・浜松館山寺荘)



▽第16回 (52年・三井寺法泉院)

たいという案もありましたが、たとえ演奏には不便であっても、当社の発祥地・東北沢に新築成った研修所でも、加藤会長はじめ会社幹部の方々にも臨席願って開催するのがふさわしい、という結論になりました。記念会誌の発行も、すでに多数の会員の寄稿を得て準備が進んでいるので、拙稿が律速因子になっているのではないかと危惧しています。このほか、うとう会に関連の家族にも参加を呼びかけ、記念植樹もしよう……など、幹事の方でいろいろ趣向が練られているようです。それでは皆様、20回の記念大会でお会いしましょう。

終りに、怪しげな筆者の記憶を補完していただいた新井会長はじめ皆様、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。
「協和うとう会」は、ベテランのOBより昨日入門したような現役の若い人にわたり、日本列島の各地に散る事業場を結び、協和醜酔の縦横に広がる、謡を通じて大きな連帯の場であります。20年をかけて皆が築いてきたこの会が、今後ますます発展するよう心から祈念して筆をおきます。

(56・5・31)

い や さ か
弥 栄

〔 付 表 〕 協和うとう会の足跡

(参加人員)

(本・東・富) 観宝合同誦会	(第1回に相当) 35・7・17	健保・熱海荘	21人
同上合同誦会	(第2回に相当) 36・8・20	修善寺・あさば旅館	17
第3回うとう会	37・6・17	健保・熱海荘	25
第4回 "	38・6・23	健保・熱海荘	25
第5回 "	40・10・31	健保・熱海荘	35
第6回 "	41・11・20	熱海つるやホテル	39
第7回 "	43・10・20	四日市倉庫湯の山保養所	28
第8回 "	44・11・16	協和・網代荘	35
第9回 "	45・10・18	三島・佐野別邸	50
第10回 "	46・10・24	浜松・西遠荘	60
第11回 "	47・9・17	三島玉沢・妙法華寺	72
第12回 "	48・9・15~16	浜松在・奥山半僧坊	64
第13回 "	49・10・19~20	浜松市・館山寺荘	74
第14回 "	50・10・18~19	大阪吹田・山子会館	84
第15回 "	51・11・6~7	湯の山・希望荘	90
第16回 "	52・11・5~6	三井寺・法泉院	87
第17回 "	53・11・4~5	湯の山・希望荘	81
第18回 "	54・10・20~21	竜野市・赤とんぼ荘	77
第19回 "	55・11・1~2	静岡・袋井・可睡斎	84

〔資料〕協和うとう会の番組（第十九回まで）

夏季謡曲大会

日時 昭和三十年七月二十日 十六時半始
場所 俱楽部

賀 茂 西山梅雄 健治

種物之段 (独吟) 佐峰 美美子
吉未 伸子

紅業 (仕舞) 小内 野田
山内 野田 龜重 松光浩

班 女 古谷 菊枝 石光 寿恵子
清水 登喜子

田屋村 (独吟) 今井 政亮
森野 亮司

之之段 今井 政亮
森野 亮司

天花 (仕舞) 浅井 淳昇
西村 井

鶴 飼 岡崎 順治 (歳弘昇)
海野 尚幸
磯部 昌彦

羽 衣 (舞囃子) 繩田 美智子
新井 國三

俊進 (独寛吟) 水原 国純
新井 国純

附 祝 言

協和醱酵社友会謡曲部

協和醱酵・本社東研富士観宝合同謡会

日時 昭和三十五年七月十七日 九時 始
場所 熱海荘

宝鶴 (素謡) 亀 水原 孝一 高橋 孝夫

観加 茂 久保 一重 西村 淳夫

宝高 (仕舞) 富士太鼓 望月 美江 井本 泰

宝土 (素謡) 蜘蛛 額光渡辺 和糖 胡蝶増月 美英江子

観藤 戸 新井 武夫 磯部 武夫

観天 (仕舞) 鞍馬天狗 富岡啓太郎

宝小 (素謡) 宝小袖 曾我 五郎山本 敬夫 十郎井本 初江 母上杉 美初江

(一) 放下僧 水原 一瓢

(囃子) 羽衣 望月 美江

キリ新井 純

地 高橋 孝夫

地 安板井 道裕 高水一 孝夫 加藤原 孝夫 深沢 孝夫 加藤 孝夫 加藤 孝夫

地 西新井 淳純

地 高橋 孝夫

地 西新井 淳純

地 高橋 孝夫

宝 生	高橋・水原・井本・板垣 加藤(穂)・山本(敏) M・6
	渡辺・増田・望月・金田 木戸・深沢・安井・小川 上杉 W・9
計 15	
観 世	久保・大坪・西村・富岡 新井・磯部(武) 計 6
合計 21名	
担 当	番組調整・作成……水原・高橋 宿泊・経理……高橋

附 祝 言	鶴 亀	薪 之 段	田 村	玉 之 段	
	望 月 美 江		カ ケ リ 西 村 淳		
	太 小 人	小 人	小 大	小 大	
(終演予定 三時)	地 井 本 高 橋 藤 一 穂 孝 夫 泰 夫 作	水 原 村 一 飄 淳 郎	富 岡 啓 太 郎	地 久 保 新 井 磯 部 重 武 夫 純 夫	西 磯 部 重 武 夫 淳 夫
	地 井 本 高 橋 藤 一 穂 孝 夫 泰 夫 作	水 原 村 一 飄 淳 郎	富 岡 啓 太 郎	地 久 保 新 井 磯 部 重 武 夫 純 夫	西 磯 部 重 武 夫 淳 夫

第二回 うとう会 番組										
日時 昭和三十六年八月二十日 午前九時半 場所 修善寺温泉あさば旅館舞台										
(連 理 吟)	櫻	玉	(籬 子)	(独 鼓)	(仕 舞)	玄	雲	蟬	(素 謡)	卓 紙 沅
々	川	葛	八清玉 之 島経段	未熊天八 定坂鼓島	師 シ ン テ 長 西 村 村 武 信 淳 郎	子 方 渡 辺 和 美 江	子 方 渡 辺 和 美 江	ツ シ テ レ 西 村 一 淳 弥	王 實 之 渡 辺 杉 恵 和 美 子	シ テ 増 田 恵 英 子
水 原 一 飄		望 月 美 江	水 原 村 一 飄 淳 郎	富 岡 啓 太 郎 美 江	高 橋 啓 太 郎	高 橋 啓 太 郎	高 橋 啓 太 郎	高 橋 啓 太 郎	立 葉 山 本 敏 夫	ワ キ 板 垣 裕 夫
高 橋 孝 夫	小 大 西 村 啓 太 淳 郎	小 大 高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎
	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地
	久 中 磯 部 保 村 重 信 大 郎	新 井 部 武 夫	大 坪 一 純 夫	加 水 藤 原 穂 一 裕 夫	久 中 磯 部 保 村 重 信 大 郎	富 岡 啓 太 淳 郎	高 橋 啓 太 淳 郎	久 中 磯 部 保 村 重 信 大 郎	望 月 美 江	高 橋 啓 太 淳 郎
終演予定 午後三時										

宝生	板垣・井本・山本・加藤(穂)・水原・高橋 M・6
	望月・上杉・増田・渡辺 W・4
計 10	
観世	大坪・西村・宮岡・中村(信)・磯部(武) 新井・久保 M・7
	計 7
合計 17名	

		第三回 うとう会 番組																																																		
		日時 昭和三十一年六月十七日 午前九時																																																		
		於 協和院 齋健保熱海 荘																																																		
祝言	高砂	羽衣	クセ・キリ	草紙洗	望月美江	田村	新井純	藤戸	高岡啓太郎	磯子	新玉屋	春日龍段	舞	観世景	清	ツレ水野	学純	宝生土	蜘蛛	シテ板垣登裕夫 シテ望月志和子 小磯松井洋子 ツレ川上	ワキ加藤 穂作	地 安近	金田利高 木戸高枝 初江	山本一信 水原一信 河北一信	観世小	督	シテ沢村重磨 ツレ松本幸子 トモ海野	ワキ大坪 一弥	地 井本	加藤敏作 山本敏夫 河北信二	望月美江 高橋水原 板垣高橋	宝生俊	寛	シテ水原一美 成経渡辺和子	ワキ高橋 孝夫	地 山本	加藤敏夫 板垣高橋	高橋水原 板垣高橋	観世班	女	シテ大坪一弥	ワキ海野 尚幸 ワキ沢村 重磨	地 山本	加藤敏夫 板垣高橋	高橋水原 板垣高橋	宝生鶴	亀	シテ安近	ワキ河北 信二	地 山本	加藤敏夫 板垣高橋	高橋水原 板垣高橋
終了予定	午後二時半																																																			

觀世	松本	W・1
	大坪・海野・沢村・新井・水野 西村・富岡	M・7
	計	8
宝生	金田・加藤（初）・望月・木戸 井本・増田・渡辺・松井・川上	W・9
	安近・河北・井本・加藤（穂） 高橋・水原・板垣・山本（敏）	M・8
	計	17
合計 25 名		
担当	番組調整・作成……高橋・水原 宿泊・経理……高橋	

第四回 うとう会 番組

日時 昭和三十八年六月二十三日 午前九時半
於 熟海莊

〔業 謡〕	宝 鶴	シテ山本 敏夫	ワキ井本 泰	地 小上 高橋 塚谷 夫人 夫人 夫人 夫人
〔独 吟〕	宝 竹 生 島	シテ有馬三重子 ツレ小林 治子	ワキ中村 豊子	地 塚谷 高橋 小上 夫人 夫人 夫人
〔番外仕舞〕	宝 田	付 後シテ松井 和子 前シテ望月 登志子 (クセヌキ)	ワキ川上 洋子	地 金田 高橋 木戸 利子 加藤 美初江
〔仕 舞〕	觀 葵	シテ西村 淳	ワキ大坪 一弥	地 海野 今井 政司 重磨 尚幸
〔独 鼓〕	宝 紅 葉 狩	シテ望月 美江 ツレ加藤 初江	ワキ今井 政司 ツレ大坪 一弥	地 西村 淳 外
〔独 吟〕	松 玉 薪 之 虫	シテ望月 美江 ツレ高橋 孝夫 水原村 一瓢	ワキ加藤 穂作 ツレ板垣 裕夫	地 川上 望月 登志子 松井 和子 有馬三重子
〔番外仕舞〕	〔番外仕舞〕	大坪 一弥 沢村 重磨 海野 尚幸 今井 政司	ワキ加藤 穂作 ツレ板垣 裕夫	地 望月 登志子 松井 和子 有馬三重子
付 祝 言 高 砂	命 尾 静 子 師			地 板垣 高橋 水原 加藤 裕夫 孝夫 一瓢 穂作

宝 生	山本(敏)・井本・高橋・水原 河北・加藤(徳)・板垣 M・7
	小上夫人・塚谷夫人・高橋夫人 中村(豊)・有馬・小林(治) 松井(和)・望月(美)・望月 (登)・川上(洋)・金田・ 木戸・加藤(初) W・13
	計 20
観 世	西村・大坪・海野・沢村(重) 今井(政)
	M・5
	計 5
合計 25 名	
担 当	番組調整・作成……高橋・水原
	宿泊・経理……高橋

森命尾静子師

第五回 うとう会 番組											
日時 昭和四十年十月三十一日(日)											
於 協和齋 健康保熟海 莊											
午前九時半始											
素	観	宝	連	観	宝	素	仕	宝	観	宝	素
三井寺	謡	松虫	竹生	蝉丸	加茂	謡	舞	土蜘蛛	班女	経政	鶴亀
子方	シテ新野	中水	滝今	ンテ小野	ンテ松谷	々風鳥定	猫松屋未	トモ奈良	シテ牧野八百子	シテ中村	ンテ勝又すみ子
進純	野井	村原	井	野野	塚谷井	浅望小海	浅望小海	高健一	子	豊子	
		信一	明大	重光	則和子	美重安	昇江光子	高郎	作也	子	
	ワキ海野			ワキ浅井	ワキ望月			ワキ小室	ワキ富岡啓太郎	ワキ有馬三重子	ワキ木元
	安島			昇	登志子			敏雄	作也		京子
	尚幸										
	地			地	地			地	地	地	地
中村	浅水			中海	板望命高			古川	浅小新水梅	松井命板望	井高板
野野	野井野			野野	垣月尾橋本			川島	井野井野野	井本尾垣登	本橋垣
啓	啓			作尚	裕美 孝			秀広一和信	重 尚	和 裕志	李 裕
作重	作重			也幸	夫江師夫泰			之年	昇光純学幸	子泰師夫子	泰 夫

観	新井・富岡・水野・森(博)・作村・山口・浅井・磯部(昌)・中村(作)・安島・海野 M・11
	牧野(母)・丸田(千鶴)・丸田(千枝)・森山(美)・西村(道)・河野(伸)・服部(幸)・守弘(肇) W・8
世	計 19
宝	高橋・板垣・中村(信)・安近・水原・鮫島 三沢(正)・高山・石田(賢吾)・奈良・峯浦・田立(和) M・12
	蛭海・望月(美)・塚谷・田代(洪)・芥藤(孝)・木元・勝又(す)・高橋(純) W・8
生	計 20
合計 39 名	
担当	番組調整・作成………高橋・水原・富岡 宿泊 その他………高橋・水野・水原 経理・写真・進行その他………水原

注) 命尾静子師参加

祝	番外仕舞	羽衣	舟弁慶	草紙洗小町	松子	嘘	仕	連
言	江口	キリ					舞半	吟
高	口						春殺生石	都
砂	キリ命尾						富岡啓太郎	中水原
	静子師	小大	小大	小大	小大		蛭海雅子	信一郎
		牧野八重子	富岡啓太郎	高橋孝夫	富岡啓太郎			
		太	太	太	太			
		命尾雅子師	命尾雅子師	命尾雅子師	命尾雅子師			
地		地	地	地	地			
高水	小浅新	望高中	小浅高	水野富	水野富			
橋原	野井野	月橋村	野井野	野富	野富			
孝一	重光昇純	美江信郎	重光昇純	重光昇純	重光昇純			
夫								

第七回 うとう会謡曲大会

昭和四十三年十月二十日、午前八時始
於四日市倉庫湯の山保養所

(観) 藤戸	嘘 子	(観) 紅葉狩	(観) 通小町	嘘 子	(宝) 俊寛	独 吟	(宝) 熊野	仕 舞	(観) 小督	連 吟	(観) 大仏供養
シテ西村 淳	実井 盛筒	ツレ高阪 和子	ツレ水野 和隆	紅海鉢 狩士木	シテ高山 健一	(観) 未定	ツレ高山 健一	(観) 松石 盛	ツレ川崎 資定	ツレ野口 栄男	ツレ小泉 伸一
ワキ海野 尚幸	浅井 一鳳	ワキ伊藤 美代治	ワキ磯部 昌彦	高橋 孝夫	ワキ斎藤 祐一	高橋 孝夫	ワキ西 正行	内村 昇	ワキ中川 庄次郎	ツレ新居 栄治	ワキ中島 義照
浅野 尚幸	太鼓富岡啓太郎	竹山 作村	富岡 伊藤	太鼓新井 啓太郎	望月 寺西	岡地 諒	奈原 望月	水原 一鳳	矢野 福井	野口 栄夫	磯部 浅野
岡地 矢野	小鼓高橋 孝夫	熊沢 長谷川	堀木 川口	小鼓水原 一鳳	望月 寺西	岡地 諒	奈原 望月	水原 一鳳	矢野 福井	野口 栄夫	磯部 浅野
新井 純	大脇石油	大脇石油	大脇石油	小鼓西村 八百子	富東 士研	岡地 諒	奈原 望月	水原 一鳳	矢野 福井	野口 栄夫	磯部 浅野
大本協和社	大脇石油	大脇石油	大脇石油	小鼓水原 一鳳	富東 士研	岡地 諒	奈原 望月	水原 一鳳	矢野 福井	野口 栄夫	磯部 浅野
12.38	12.13	11.50	11.25	11.00	10.20	10.05	9.25	9.05	8.35	8.25	8.00
											時刻始

親世	新井・西村・安島・川崎・保利・新居・野口(栄) 阪梨・福井・水野・富岡・作村・中島(義)・ 山口・小泉・磯部(昌)・欠野・小野・浅井(昇) 竹島・伊藤(美)・鈴木(正)・池内 M・23
世	高阪(和)・小谷(綾)・牧野(八) W・3
	計 26
宝	水原・高橋 M・2
生	計 2
	(協和) 合計 28名
親世	済洗会など (社外) 合計 6名
	総計 34名
担当	番組調整・作成……水野・富岡(水原・高橋) 宿泊・経理……水野・富岡 進行・総括(含写真)……水野・富岡

附 祝 言

子方富岡 正典
シテ熊沢 章
ワキ堀木 博
ワキツレ長谷川 定章

(終了時刻 一四三〇)

藤波済洗会
13.18

業		囃		素		連		仕		囃	
加 謠	茂	班 子	阿 漕	富 太 鼓	井 筒	紅 葉 狩	葵 上	三 井 寺	通 小 町	通 小 町	班 子
シテ中島 義照	シテ磯部 昌彦	シテ川崎 資定	シテ浅原 方平	シテ島森登美代	シテ川崎 資定	シテ水谷由美子	シテ磯部 昌彦	シテ牧野八百子	シテ野口 栄男	シテ福井 清史	シテ新居 栄治
シテ堀木 武夫直	シテ鈴木 正直	シテ坂梨 滋	シテ大坪 一弥	シテ勝又 菊枝	シテ塚谷 則子	シテ水野 富岡啓太郎	シテ富岡 啓太郎	シテ森山 夫人	シテ新居 栄治	シテ福井 清史	シテ新居 栄治
油 化	油 化	堺	京 京	富 士	富 士	大 協	油 化	油 化	堺	堺	堺
山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥	山 姥
小大 水原啓一 太飄郎	小大 富岡啓太 郎	小大 新井八百子 純	小大 水原啓太 郎	小大 富岡啓太 郎	小大 富岡啓太 郎	小大 富岡啓太 郎	小大 富岡啓太 郎	小大 富岡啓太 郎	小大 富岡啓太 郎	小大 富岡啓太 郎	小大 富岡啓太 郎
地 宝 生	地 宝 生	地 觀 世	地 寶 生	地 寶 生	地 寶 生	地 寶 生	地 寶 生	地 寶 生	地 寶 生	地 寶 生	地 寶 生

第八回 うとう会 番組

昭和四十四年十一月十六日(日) 午前九時始
協和 網代 荘

付祝言 高砂

終了予定 午後三時半

観世	西村・浅原・安島・新井・鈴木(正) 大坪・新居(栄)・福井・阪梨・ 野口(栄)・中川(清)・川崎・ 山田(義)・水野・富岡・磯部(昌) 中島(義)・作村 M・18
	服部(夫人)・丸田(母堂)・加藤 (夫人)・森山(夫人)・天野(夫人) 水谷(綾)・鷹阪(和)・光野(由) 牧野(母堂) W・9
計 27	
宝生	水原・高橋 M・2
	島森・勝又(菊)・金田・塚谷・ 高橋(夫人)・水原(夫人) W・6
計 8	
合計 35名	
担当	番組調整・作成……高橋・水原・富岡 宿泊・経理ほか……水原・安島

第九回 うとう会 番組

昭和四十五年十月十八日(日) 午前九時半始
於三島市中田町 野別邸

(素謡)	本社 小 袖 曾 我	五郎 鈴木 康夫 十郎 野口 利雄 母 野口 隆夫 トモ 久永 信夫	立業 大草 進	(地)	小 中川 北村 山泉 中 中川 北村 山泉
(観世)	胡 蝶	シテ 福井 清史 康頼 板梨 清史 成経 中川 清淳	ワキ 島森 登美代		高橋 水原 磯部 新井
(観世)	天 鼓	シテ 池内 悦夫	ワキ 野口 栄男		伊藤 水野 磯部 高橋
(観世)	紅 葉 狩	(舞) 笠 之 段	ワキ 服部 豊次		竹島 磯部 高橋
(観世)	成 隔 宮	シテ 北田 宗平 ツレ 山泉 浩徳 大臣 久代 浩徳	ワキ 小田 文一 ワキ ツレ 中村 寛之助		富岡 磯部 高橋
(観世)	油 化 班 女	シテ 作村 武夫	シテ 山田 義之 中川 清淳 中川 清淳 辻村 邦彦 中川 清淳 辻村 邦彦		長 中川 磯部 高橋
(観世)	求 吟 塚	磯部 武夫	ワキ 中島 義照 ワキ ツレ 山口 豊		水野 新井 富岡
(観世)	高 野 物 狂	水原 一 颯			高橋

祝 言	(運 吟)	桜 川	シテ作村 武夫 ワキ山口 昇豊	水野 富岡啓太郎 学	
	(油化・観)				
	(素 講)	草紙洗	シテ塚谷 則子 貫之勝又 菊枝 干島森登 美代	ワキ高橋 純子	大望 月海
	(富士・宝)				
	(探・観)	蟬丸	シテ木谷 清史 ツレ福井	ワキ野口 栄夫	八倉 巻
	(本社・宝1)	花 筐	ツレ長 利雄 ツレ小田	ワキ大草 進	中久 永
	(東研・観)	千手	ツレ岡地 諒 ツレ八倉巻 忠二	ワキ木村 一男	山岡 村
	(富士・宝)	望月	シテ馬場 治次 ツレ金田 高枝 子方勝又 すみ子	ワキ峯浦 和幸	塚谷 又
	(本社・観)	正 起請文	シテ磯部 武夫 義経竹嶋 和隆 静川崎 資定 姉和安島 将	ワキ西村 淳	大坪 又
	(在 舞)	熊野 クセ	清水 玲子		長岡 永
(二 調)	八島	水原 一颯	小高橋 孝夫	小岡 田	
(囃 子)	山姥	小高橋 孝太郎 大高橋 孝夫	太水原 一颯 静男	竹島 又	
(舞囃子)	笠之段	小大北村 啓子	笛緑 静男	小高 井	
					余山清藤較 良本水田島
					菊高森小高 地山橋室井
					磯新水 部井野
					水高橋 原
					奈水森 良原
					鈴新富 木井岡
					望高橋 月橋
					水新磯 野井部
					中水北 川原村
					安磯西大 島部村坪
					馬高峯 場橋浦

観 世	<ul style="list-style-type: none"> 政木・竹村・山口・中島(義)・水野・富岡・緑 浅井(昇) 磯部(武)・安島・西村・鈴木(正)・川崎・新井 八倉巻・木村(一)・岡地 木谷・福井(清)・野口(栄) 大坪 	M・21
	計 21	
宝 生	<ul style="list-style-type: none"> 小田・大草・長・久永・中村(寛)・中川(年)・ 岡田・水原 森本・高井・寺西(正)・小室・森(泰)・較島・ 高山・奈良 大橋・馬場・高橋・峯浦・近藤(明) 	M・21
	<ul style="list-style-type: none"> 山県・北村 藤田(恵)・清水(玲)・菊地(恵) 高橋(純)・塚谷(勝又)(菊)・島森・勝又(す) 望月(美)・蛭海 	W・12
	計 33	
大協石油6名含み		合計 60名
担 当	番組調整・作成……………水原・高橋 修正版……………安島・水原 宿泊・設営・会計……………高橋・大坪(ほか富士グループ) 着付・会場係……………女性方 番組・ピラ作成……………東研グループ 進 行……………水原・竹嶋・安島 写真撮影・作成配布……………水野・水原	
	② 8:05開始, 14:17終了 直ちに打上げ, 約1時間にて解散	

第十一回 うとう会 番組

昭和四十七年九月十七日(日) 午前八時始
 本山妙法華文(山)三島市玉沢(番地)五九九(五二七六)

本社観世 安達	本社宝生 三井	本社観世 鞍馬	東研宝生 通小	大協観世 下放	大協観世 小(素謡)	9.45 (連合アル観世吟) 東北	塚観世 玄	本社宝生 葵	富士宝生 橋弁	本社観世 草子	8.05 (素市観世謡) 鶴
原	寺	天狗	町	僧	管	北	象	上	慶	小町	亀
安島	久小 永田	子 秋吉 山田	清水 森本	伊藤 竹嶋	屋合 池内	松崎 小野	師レ 福井	ツレ 岡田	子ト 平尾	王森 紅野	佐藤 恒治
将	文一 隆	紀安子	玲子 真	和隆 巳代治	悦雄 治一	大八郎 正道	義之 清史	英明 明進	久子 良学	武昭 孝天	
古服川 賀部崎 源太浩 太郎二	中川 年男	松井 信行	鮫島 広年	水野 学	百合 本正治		宮本 邦彦	ワソレ 小田		渡辺 薫	山家 多喜男
福大池 坪井田	中大長 草村	池山古 田家賀	高粕寺 山川野	山口浅 井中島	中緑辻 島村	木岡八 村倉巻	池川池 田崎田	中久中 川永	池服松 田井山	山残緑 口井	
磯鈴 部木	岡水 田原	森川磯 山崎島	奈水森 原良	佐藤富 藤岡	鈴木高 野岡	水野福 井	安磯水 島新部	水原長 原	近高 藤橋	安磯川 島部崎	富水 岡野

本社宝生 小	15.35 (独)富士 宝生	本社(連 合)鞍馬 天狗	東研観世 紅葉	四日市観世 二人	東研宝生 安宅	本社観世 俊寛	富士宝生 小袖	13.23 (案)獨 生	觀世(離 了)清	富士宝生 小	12.15 (連合)本 社宝生
歌	衣	天狗	狩	静	宅	寛	我	ワキ語	經	督	木
水原	大橋	長小 草田	八岡 倉地	山口中 島	山奈 口良	康新 成井	五十十 母勝	水原 一	小大 高橋	勝島 又森	岡中 村寬
一飄	良作	文一 利雄	忠二 諒	義照 豊	元恵 高一	正純 直勝	和幸 明子	飄	孝夫 純	菊美 枝子	英助 之助
			木村 一男	作村 武夫	寺西 正行	川崎 資定			静男		
小中久 田川永			小滝池 野崎田	木緑佐 村藤家	鮫森清 島本水	作安福 村島井	高塚勝 橋谷又				
中岡長 村田	勝高塚 又橋谷	島森	安磯水 島部野	岡水富 地野岡	森水高 原山	磯富岡	島高 森橋	浅水磯 井野岡			

担	番組調整・作成……高橋（水原）
当	宿泊設営・会計……高橋 写真撮影・配布……水原・岡田・吉田

附	祝	言	蝶	衣	衣	盛	16.00 塙観世舞	本社観世	15.48 富士観世 松
			ワシテ水原一城	キリ	クセ				
			森	清水	菊地	山田		磯部	大坪
			泰城	玲子	恵子	義之		武夫	一弥
			小大						
			高富						
			橋岡						
			孝太郎						
			笛太						
			緑近						
			藤立						
			静男						
			粕菊						
			清森						
			川地						
			水本						
			高較						
			寺奈						
			山島						
			良西						
			寺高						
			西山						
			島良						
			粕奈						
			川森						
			良本						
			辻福						
			宮村						
			井本						

第11回 うとう会参加者名簿

グループ名	宿 泊	当 日 参 加
大協一観世		竹嶋 和隆・伊藤己代治・星合 治一 服部 豊治・池内 悦雄・白台本正治 6
油化一観世	富岡啓太郎・中島 義照・浅井 昇 山家多喜男・山口 豊・水野 学 緑 静男・佐藤 恒治・作村 武夫 9	
東研一観世	八倉巻忠二・木村 一男・岡地 諒 3	
堺一観世	福井 清史・宮本 邦彦・山口 義之 辻村 秀員 4	
合アル一観世	新井 純・松崎大八郎・滝 明夫 小野 正道 4	
本社一観世	磯部 武夫・川崎 資定・秋山 安 池田 勝・紅野 昭・古賀源太郎 鈴木 正直・服部 浩三・藤井 武夫 松井 信行・森山 清孝・安島 将 渡辺 薫・吉田 紀子 14	
富士一観世	大坪 一弥 1	
富士一宝生	高橋 孝夫・平尾 学・近藤 明 大橋 良作・峯浦 和幸 (招待：近藤立子) 6	勝又すみ子・長倉 久子・金田 高枝 高橋 純子・勝又 菊枝・塚谷 則子 島森登美代 (指呼：命尾師) 8
本社一宝生	小田 文一・大草 進・長 利雄 久永 隆・中川 年男・中村寛之助 岡田 英明・水原 一颯 8	
東研一宝生	鮫島 広年・森 泰城・奈良 高 森本 真・高山健一郎・寺西 正行 粕川 元一・菊地 恵子・清水 玲子 9	

宿泊者：54M, 4W 計58名 当日参加：6M, 8W 計14名
参加者：60M, 12W 計72名

第十二回 うとう会 番組

昭和四十八年九月十六日(土) 十三時開演
於静岡引佐町奥山半坊
増八十三時開演

船 弁 慶	清 殺 生 經 石	蝉 九	鳥 追	鶉 飼	經 正	橋 弁 慶	三 井 寺	成 陽 宮	大 佛 供 養	紅 葉 狩	船 介 慶	
勝又すみ子 馬場治次	星合豊次 服部治一	森泰城	古賀源太郎 中島義照	北村啓子 山泉頌子	大坪一弥	松崎大八郎 小野正道 浅原弘之 斉藤方平	塚谷則子 高橋純子 勝又菊枝 島森登美代	菊池恵子 篠島広年	立子 ツレ 政木英夫 山家多喜男 滝明夫	飯島みよ子 鈴木正美	吉田紀子 前シテ服部 後シテ池田勝三	
近藤和幸 峯浦	伊藤仁代治	高井春樹	安島将	岡田英明 中村信郎	平尾久子 長倉久子	松野大八郎 小野正道 浅原弘之 斉藤方平	塚谷則子 高橋純子 勝又菊枝 島森登美代	高山健一郎 高井春樹 森本真	佐藤恒治	大橋良作 金田高枝	秋山清孝 森山	
(富士)	(大協)	(東研)	(本社)	(本社)	(富士)	(大阪)	(合アル)	(本社)	(富士)	(油化)	(富士)	(本社)

羽 衣	五 番	鶴 唯	狸 北	羽 北	東 舞	橋 子	弁 子	慶 子	羽 衣	葵 上	熊 坂	正 尊	松 風	班 弱	山 三	阿 三	小 管	通 盛
森本真 鈴木孝夫 高橋一 水原一	望月美江	望月美江	富岡啓太郎 大橋良作	山泉頌子 北村啓子 北村啓子	山泉喜男 山口豊	新井一純 水原一	山泉喜男 山口豊	新井一純 山泉喜男	大橋良作 勝又すみ子 長倉久子	岡田英明	新井一純 山泉喜男	水野学	鈴木正直 磯部武夫	浅井昇 富岡啓太郎 山口武夫	山三井 野野仕 法野	小山武彦	菊地恵子 清水玲子 松尾英毅	岡木一雄 木村一雄
近藤和幸 静雄	緑静雄	緑静雄	緑静雄	山泉喜男 山口豊	新井一純 水原一	新井一純 山泉喜男	新井一純 山泉喜男	大橋良作 勝又すみ子 長倉久子	岡田英明	新井一純 山泉喜男	水野学	鈴木正直 磯部武夫	浅井昇 富岡啓太郎 山口武夫	山三井 野野仕 法野	小山武彦	菊地恵子 清水玲子 松尾英毅	岡木一雄 木村一雄	八倉卷忠一
(富士)	(大協)	(東研)	(本社)	(本社)	(富士)	(大阪)	(合アル)	(本社)	(富士)	(油化)	(本社)	(富士)	(油化)	(本社)	(防府)	(東研)	(東研)	(東研)

(終了予定 十五時)

観 世	木村(一)・岡地・八倉巻・齊藤(弘)・松尾川崎・鈴木(正)・牟田(義)・磯部(武)・松崎・小野(正)・安島・秋山・池口・加藤(博)・紅野・古賀(源)・中島(義)・次本・藤井(武)・松井(信)・服部(浩)・緑・富岡・水野・坂口・山口・山家・佐藤(恒)・浅井(昇)・大坪・小山・岸田・作村・滝 M・35
	吉田 W・1
計 36	
宝 生	高橋・水原・高山・高井・鮫島・森本・松尾・森(泰)・鈴木(正)・平尾・峯浦・近藤・岡田・大橋・馬場 M・15
	北村・山泉・菊地(恵)・清水・塚谷・高橋(純)・勝又(菊)・鳥森・望月(美)・勝又(す)・飯島・長倉・若杉 W・13
計 28	
合計 64 名	
担 当	宿泊・設営・会計……高橋 番組・作成……水野(四日市グループ) 写真撮影・配布……水原・水野

第十三回 うとう会 番組

昭和四十九年十月二十九日
於 静岡県浜松市呉松町

(日土) 八十三時間開演
追山寺荘

勅 進 帖	井 百東 (独北万北 吟)	筒 シテ山泉 頌子	織 熊野 キリ	東 北 舞	大原 (連運幸 吟)	土 蜘蛛 シテ古賀源太郎 頼光松井 胡蝶吉田 紀子 昭	阿 漕 後シテ高山健一郎 前シテ柏川元一	高 放 下 砂僧 舞	紅 葉 狩 舞	吉野 天 (独連人 吟)	上 ツレ山口 豊	通 小 町 シテ中島 ツレ木村一雄 義照	猩 紅 葉 々 舞	紅 葉 正 舞	経 正 舞	巴 (連運 吟)	野 (独 吟)	熊 野 シテ若杉 敦子 ツレ飯島みよ子	屋 島 シテ川崎 池田 勝	第一日
	高橋 孝夫	ワキ北村 啓子	富岡啓太郎	山泉 頌子	八倉巻忠二 勝又すみ子 長倉 久子	ワキ藤井 武夫	ワキ高井 春樹	北村 啓子 岡村 英明	鈴木 正美 近藤 明学	志村 元	ワキ作村 武夫 ワキツレ佐藤 恒治	ワキ岡地 諒	菊地 恵子 吉田 紀子	秋山 安	服部 浩三	野口 貞夫	ワキ馬場 治次	ワキ安島 将		
		(本社)			(富士)	(本社)	(東研)				(新大)	(東研)							(本社)	

道成寺	阿世	羽衣	桜川	正尊	小智	竹生島	通小町	鞠飼	舟弁慶	丸	紅葉狩	羽衣	(連調)
経政 (葉子) 若杉敦子	シテ磯部 武夫												
ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢	ワキ水原一瓢
水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢	水原一瓢
緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男	緑 静男
(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)	(東研)

観世	<ul style="list-style-type: none"> 堂尾・若月・大坪・立林 藤田・但見・秋山・池田・川崎・紅野・鈴木(正)・古賀・服部・藤井・松井・安島 岡地・木村・八倉巻・中島(義)・野口(貞)・志村 浅原・斎藤(弘)・小野(博)・磯部(武) 浅井・富岡・政木・水野・緑・山家・坂口・佐藤(恒)作村・滝・山口 	M・37
	<ul style="list-style-type: none"> 藤井(美)・吉田(紀) 藤沢(佐)・師井・藤永・笠井 	W・6
計		43
宝生	<ul style="list-style-type: none"> 近藤・鈴木(正)・平尾・馬場・大橋・高橋・岡田 粕川・岐島・高井・高山・寺西(正)・奈良・森・森本・川合・奥水 水原・滝沢 	M・19
	<ul style="list-style-type: none"> 菊地(恵)・小山 塚谷・高橋(純)・勝又(菊)・島森・勝又(す)・長倉・飯島・若杉 山泉・北村 	W・12
計		31
合計		74名
担当	宿泊・経理……………高橋・大坪・中嶋 番組・進行……………水原・安島・岡地 囃子関係……………富岡・緑・高橋・水原 ビラ作成・進行……………山口・水野 写真作成・配布……………安島・水原・吉田 着付け・会場世話……………(富・研・本)女性方	

班	山姥	水原一瓢	富岡啓太郎	近藤	平尾	学	明
女	春	望月美江	富岡啓太郎	緑	静男	学	明
附祝言	番舞	望月美江	富岡啓太郎	緑	静男	学	明
	シテ浅井昇	望月美江	富岡啓太郎	緑	静男	学	明
	ワキ大坪一弥	望月美江	富岡啓太郎	緑	静男	学	明
	ワキ水原一瓢	望月美江	富岡啓太郎	緑	静男	学	明
	ワキ高橋孝夫	望月美江	富岡啓太郎	緑	静男	学	明
出発	二時・打上会	高橋孝夫	富岡啓太郎	緑	静男	学	明
終演	四時五十一分	高橋孝夫	富岡啓太郎	緑	静男	学	明

第十四回 協和とう会

全国大会

昭和五十年十月十八日・十九日
大阪・吹田市山手町・山手会館

協和とう会は、関係者諸氏のご協力により、はじめて大阪の地において催すことになりました。このたびは、防府・門司高工場の器友の初参加もあり、総勢八十名を超え、まさに全国大会とあがりなりました。左記番組により演奏いたしますので、心ゆくまで秋だけなわの旧都のひと時をお楽しみいただければ幸いです。とう会幹事一同

番 組

○・三〇

〔第一日〕 素 謡

開演 十二時三十分

舞

シテ 富岡啓太郎
ツレ 水野 学

ワキ坂口進一郎

地 浅井 昇他

32

(一・〇〇)

〔四日市〕 後ツレ 湖東まゆみ

ワキ立林 鉄也
ツレ 浅井 勝

地 大坪 一弥他

22

紅 葉

シテ 大坪 栄子
〔富士〕

ワキ高井 春樹
ツレ 奥水 洋一

地 水原 一颯他

32

(一・二四)

三 井

シテ 落合 恵子
〔東研〕 子方 小山しづり

地 水原 一颯他

32

独

素 謡

シテ 服部 浩三
〔本社〕 貴之 藤田 良輔
ツレ 宮尾 行男
但見 靖啓

地 森脇 亮他

25

(二・〇八)

草子洗小町

ワキ松井 信行

地 森脇 亮他

25

(二・三三)

枕 慈

シテ 近藤 明

地 高橋 孝夫他

18

(二・五五)

小

シテ 野口 貞夫
〔東研〕 ツレ 木村 一雄
安島 村 吟

地 岡地 諒他

25

(三・二九)

鞍馬天狗

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(三・五二)

小 鍛

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(四・二二)

雲 雀

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

雲 雀

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(四・四〇)

鶴

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(八・四〇)

卷

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(九・〇五)

清

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(九・五一)

経

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一〇・〇九)

風

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一〇・三三)

望

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(一一・二二)

正

シテ 素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

地 磯部 武夫他

22

(四・三二)

素 謡
〔富士〕 子方 浅原 方平
〔入販〕 平尾 学

ワキ加藤 七弥
ツレ 藤永 静子

(一・二)	船弁 慶	シテ 島田 信次	素 島田 活志	ワキ江頭 博	地 森脇 亮他	35
(二・四七)	葵	シテ 藤井美代子	素 代志子	ワキ今出 義信	地 森脇 亮他	25
(三・〇三)	船弁 慶	シテ水原 一 飄	能	ワキ岡田 英明	大岡田 良作	35
(一・五二)	草子洗小町	小大 富岡啓太郎	山家多喜男	笛 緑 静男	地 浅井 昇他	12
(二・三三)	加	大 鈴木 正美	小 長倉 久子	笛 平尾 学	地 高橋 孝夫他	8
(三・〇三)	熊	野 小勝又すみ子	大 鈴木 正美	笛 平尾 学	地 高橋 孝夫他	8
(三・〇三)	船弁 慶	シテ望月 美江	舞 能	大岡田 英明	大岡田 良作	14
(三・〇三)	船弁 慶	シテ水原 一 飄	能	ワキ岡田 英明	小 高橋 孝夫	35

運 營 分 担
 連絡・文書配布その他
 宿泊・移動・交通案内
 経理・出納
 番組作成・配布
 当日の進行
 椅子関係
 番組制作
 写真撮影・作成・配布
 着付け
 湯茶接待

水原・安島
 磯部・笠原・岩橋
 齊藤・浅原・安島
 水原・安島
 磯部・森・安島
 宮岡・高橋・岡田
 山口・水野
 高橋・浅原
 笠原・島森
 落合・小山・勝又・久保・飯島・久米ほか女性

本社 (宝生)	東研 (観世)	協和油化	防府
1. 水原 一 飄	1. 木村 貞 雄	1. 緑 静 男	1. 嵐 代志子
本社 (観世)	2. 野村 貞 夫	2. 山家 多喜男	2. 田 義信
1. 鈴木 正尚	3. 志村 地 次	3. 山 佐藤 恒	3. 藤井 美代子
2. 海野 尚 幸	4. 岡 地 次	4. 水 野 啓太郎	4. 古 古 勇
3. 川崎 野 昭	富十 (宝生)	5. 水 富 岡 井 昇	5. 森 脚 部
4. 紅 野 靖	1. 高 橋 孝 夫	6. 坂 浅 井 東 まゆみ	6. 宇 加 藤 七 伴
5. 但 見 部 浩	2. 近 藤 治 次	7. 湖 大 協 和 明 夫	7. 師 藤 永 沢 静 佐 都 子
6. 服 井 武 良 信 行 男 将 子	3. 馬 平 尾 正 良 英 久 子	8. 新 大 協 和 明 夫	8. 藤 井 永 沢 静 佐 都 子
7. 藤 井 武 良 信 行 男 将 子	4. 平 尾 学 美 作 明 子	9. 阪 大 協 和 明 夫	9. 藤 井 永 沢 静 佐 都 子
8. 藤 井 武 良 信 行 男 将 子	5. 鈴 木 正 良 英 久 子	1. 滝 作 村 口 武 豊	1. 吉 江 信 次 博 武 志
9. 松 宮 尾 島 田 紀	6. 岡 倉 久 子	2. 山 阪 武 方 大 平 厚 之 雄	2. 江 江 信 次 博 武 志
10. 川 合 正 允 年 樹 一郎 行 高 城 貞 真 延 子	7. 長 倉 久 子	3. 大 阪 武 方 大 平 厚 之 雄	3. 江 江 信 次 博 武 志
1. 川 合 正 允 年 樹 一郎 行 高 城 貞 真 延 子	8. 飯 島 又 田 米 高 保 菊 登 美 江	4. 浅 岩 齊 笠 鈴 塚	4. 島 島
2. 川 合 正 允 年 樹 一郎 行 高 城 貞 真 延 子	9. 勝 又 田 米 高 保 菊 登 美 江	5. 笠 鈴 塚	(計 84 名)
3. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	10. 金 久 米 高 保 菊 登 美 江	6. 望 月 塚	
4. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	11. 勝 又 田 米 高 保 菊 登 美 江	7. 望 月 塚	
5. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	12. 久 米 高 保 菊 登 美 江	8. 望 月 塚	
6. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	13. 勝 又 田 米 高 保 菊 登 美 江	9. 望 月 塚	
7. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	14. 鳥 望 月 塚	10. 望 月 塚	
8. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	15. 望 月 塚	11. 望 月 塚	
9. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	富士 (観世)	12. 望 月 塚	
10. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	1. 大 坪 林 一 弥 也 勝 子	13. 望 月 塚	
11. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	2. 立 林 一 弥 也 勝 子	14. 望 月 塚	
12. 高 井 山 西 正 行 高 城 貞 真 延 子	3. 浅 井 井 坪 栄	15. 望 月 塚	
	4. 大 坪 林 一 弥 也 勝 子		

進行上のお願
 ① 番組下部の小英数字は、出入りも含めた許容の分数です。
 ② 当日は、進行を円滑に行なうため、次の出演者は控室に待機し、出入りの間際を最少限にするようご協力ください。

第十五回 協和とう会

昭和五十一年十一月六日(土)・七日(日)
於湯の山温泉 希望荘

組

開演 十一時三十分

○・三〇(第一番) 素謡

加茂 (富士・宝)
ツレ平尾 美江
シテ望月 美江

ワキ長倉 久子

地頭高橋 孝夫

○・四五(第二番) 上 (四日市)

ツレ佐藤 恒治
シテ山家多喜男

ワキ富岡啓太郎
ワキレ政木 英夫

地頭浅井 昇

(一・三五)

子方鈴木 正直
義実藤井 武夫
頼朝川崎 義照
シテ中島 義照

ワキ安島 将

地頭磯部 武夫

○・二〇(第三番) 連吟 (東研・宝)

獨吟 二井寺 (本社)
獨吟 小申之督

鐵高井 春樹
磯大坪 武一

地頭水原 一瓢

獨吟 獨吟

鐵高井 春樹
磯大坪 武一

地頭水原 一瓢

○・一五(第四番) 紅葉狩 (東研・宝)

ツレ奥定 範子
シテ小出しづり

ワキ高井 春樹
ワキレ鐵治 義延

地頭水原 一瓢

○・一〇(第五番) 和布 (門司)

ツレ島田 活博
シテ江頭 博

ワキ山本 貞次
ワキレ吉村 信次

地頭森脇 亮

○・〇五(第六番) 舟弁 (慶)

シテ高橋 泰也
シテ稲葉 泰也

ワキ板村 政雄
ワキレ渡辺 富和

地頭加藤 七弥

○・〇〇(第七番) 仕舞 (宇部)

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

○・〇五(第八番) 一等調之虫

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

○・〇〇(第九番) 水原一瓢

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

(四・五五) 素謡

輝丸 (新太)
ツレ滝村 武夫

ワキ山口 豊

地頭富岡啓太郎

(五・二〇) 戸防

シテ今井 孝一

ワキ堂尾 秀友
ワキレ今田 義信

地頭森脇 亮

(八・〇〇) 第二日 素謡

賀茂 (防府)
ツレ藤井美代子
シテ藤沢佐都子

開演 八時
ワキ沢野 忠男

地頭森脇 亮

(八・三〇) 竹生 (四日市)

ツレ佐藤 博章

ワキ緑 静男

地頭水野 学

(八・五〇) 小 (督)

天鼓 (防府)
ツレ藤井 浩二
シテ服部 浩二

ワキ藤田 良輔

地頭磯部 武夫

(九・二〇) 連吟 (本社)

獨吟 獨吟

今田 義信
沢野 忠男

地頭磯部 武夫

(一〇・〇〇) 素謡

俊成忠度 (富士)
ツレ立林 鉄也

長倉 久子
高橋 孝夫

地頭岡田 英明

(一〇・二五) 連吟 (富士)

立架大橋 正良
子方鈴木 英作
岡崎岡田 治次

ワキ近藤 明

地頭高橋 孝夫

(一一・〇〇) 七騎落 (富士)

師長浅井 昇
シテ新井 純学

ワキ富岡啓太郎

地頭磯部 武夫

(一一・四〇) 家舞 (合アル)

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

(一一・四〇) 融鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

(一一・四〇) 融鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

獨能野 龜鶴
獨能野 龜鶴

親世	<ul style="list-style-type: none"> 八倉巻・鈴木・川崎・紅野・中島・安島・服部・藤田 池田・藤井・但見・宮尾・上條 岡地・木村・野口・志村 大坪・岩瀬・立林・浅井 水野・富岡・浅井・佐藤(恒)・山家・坂口・緑 政木・佐藤(護)・田辺・天野 新井・作村・瀧・山口・竹島・伊藤 磯部・浅原・斉藤・中村・鈴木 森脇・今井・堂尾・沢野・松井・今田 加藤・松崎・渡辺・松本・石井・稲葉・高橋・板村 吉村・島田・山本・藤田 	M・65
	<ul style="list-style-type: none"> 吉田・柳・藤沢・藤井 	W・4
計 69		
宝生	<ul style="list-style-type: none"> 水原・川合・蛟島・高井・高山・寺西・森・鍛冶 高橋・近藤・馬場・平尾・鈴木・大橋・岡田 	M・10
	<ul style="list-style-type: none"> 小山・奥定・長倉・蛟島・勝又(菊)・金田・島森 望月・長沢・高橋(純) 	W・15
計 25		
合計 90名		
担当	番組(地割)作成・印刷・配布……………山家・水野 ビラ作成……………山口・水野 飲食料手配運搬……………水野・佐藤(護) 宿泊・交通案内……………佐藤(恒)・浅井・坂口 会場・準備・進行……………山家・緑・田辺・政木 写真関係……………水野・田辺 連絡・本部窓口……………山家	

高砂	七落	田村	舞子	玉之段	稀曲(一・一五)	岩手山(一・五〇)	景清(大坂)	善知(東研)	(一・一五)素謡
水原 瓢	望月 美江	岡田 英明			天女奥定	ツレ浅井	ツレ磯部	ツレ志村	ツレ木村
					正広 範行	正 武夫	正 昇直	一 元雄	
大橋 良作	岡田 英明	富岡 啓太郎	高橋 孝夫	新井 純	山家 多喜男	ワキ 鍛冶	ワキ 浅原	ワキ 野口	ワキ 貞夫
平尾 近藤	緑 静男	平尾 字	緑 静男	義延	方平	地頭 水原	地頭 新井	地頭 岡地	地頭 諒
終演 十四時三十分	字明 地頭 森	孝夫	一 瓢	太郎	一 瓢	純			

第十六回 協和とう会

昭和五十二年十一月五日(土)・六日(日)
 於 大津市 三井寺法泉院

(一・四五) 素謡	(一・三〇) 連吟	(一・一〇) 春・米	(一・四五) 橋(舟)慶	(一・〇五) 千(富士)手	(一・〇五) 連竹(四日市)	(一・〇〇) 鶴(四日市)	(一・〇〇) 通(堺)小町	(一・〇五) 千(富士)手	(一・〇五) 連竹(四日市)	(一・〇〇) 鶴(四日市)	(一・〇〇) 通(堺)小町
立衆 飯島みよ子	八倉巻忠二	柳 飯子	藤井美代子	ワキ 平尾 良作	ワキ 立林 鉄也	ワキ 水谷 利明	ワキ 中村 真一	ワキ 立林 鉄也	ワキ 立林 鉄也	ワキ 水谷 利明	ワキ 中村 真一
子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子
子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子	子方長倉 久子

会場との折衝・交通案内	齊藤
番組編成	山家
番組編成顧問	磯部 水原・高橋・富田
本社・厚生課との折衝その他	安島
舞台設営	油化・塚
めぐり	山口(豊)
会の進行	水野・森・岡田
撮影(含配布)	油化
会計・宿泊・食事などの世話	安島・塚

(本社・宝生)	小西 正春 水原 一颯 計 1 名	(東研・宝生)	近藤 明 長倉 久子 望月 美江 勝又 菊枝 島森登美代 飯島みよ子 沢田恵美子 計 13 名 (富士・観世)	(探)	福井 清史 山田 義之 中村 真一 野口 栄男 計 4 名
(本社・観世)	新井 純 上條 佑蔵 川崎 寛定 久代 浩徳 鈴木 正直 高橋 栄一 但見 靖啓 鶴来 伸一 西村 淳 塚本 毅 藤井 武夫 藤田 良輔 八倉巻忠二 安島 将 吉田 紀子 計 15 名 (土浦)	(東研・宝生)	森 泰城 川合 正允 鮫島 広年 高山 一郎 高井 春樹 寺西 正行 奈良 高 織治 義延 小山しづり 奥定 範子 計 10 名 (東研・観世)	(四日市)	森脇 亮 沢野 忠男 野口 貞夫 松井 信行 藤井 祥孝 村井 俊夫 若月 静人 岸田 軍二 竹林 実 板村 政雄 柳 俊子 藤井美代子 坪郷 恵子 計 13 名 (字部)
(土浦)	富岡啓太郎 百瀬 三雄 巽 俊一 馬場 国男 木暮 正祐 上村 清治 小原 嘉人	(富士・宝生)	高橋 孝夫 岡田 英明 大橋 良作 平尾 学 馬場 治次 鈴木 正美	(大版)	加藤 七弥 稲葉 泰也 松崎 充 計 3 名
					総計 87 名

附 祝 言

(二・一五) 番 藤子
(三・井五) 子方浅井
(観・合同) シテ新井
純昇

ワキ師池 大富岡啓太郎 笛 静男
ワキシ人坪 一 諒 小山家多喜男 森脇 地頭 西村(本
終 油 十五時一〇分

第十七回 協和とう会番組

昭和五十三年十一月四日(土)・五日(日)
於 湯の山温泉 希望 荘

開演 十二時半

(一・四〇) 羽衣 (土浦)	シテ 馬場 国男 ワキ 大森 大陸	(二・一〇) 夜討曾我 (本社・観世)	シテ 十国 五郎丸 河本 鬼太郎 王 渡辺 本 久川 鶴来 来 浩徳 実 一子 太	素 羽 勝 長 又 倉 菊 枝 子	(一・五五) 草子洗小町 (東研・観世)	シテ 實之 中 志 村 一 博 明 元	(一・二〇) 連 吟 (富士・宝生)	シテ 貴之 木 村 一 博 明 元	(一・五五) 島 (富士・宝生)	ツレ 平尾 正 美 学	(一・三〇) 小治 (四日市)	シテ 水谷 利 明	(一・一五) 融 (防府)	シテ 望月 美 江 島森登美代	ワキ 佐藤 恒 治 一 石塚 謙 一	(三・四〇) 花 (全・宝)	シテ 立 衆 勝 又 菊 枝	ワキ 小 山 し づ り 長 倉 久 子	(四・一〇) 吉野 天 人 (土浦)	シテ 渡 辺 昇	ワキ 田 中 久
久小上 保原村 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山良 山 西 (研研研)	△ 高 大 橋 橋 馬岡 場 橋 橋 (土土土)		
△ 高 大 橋 橋 面岡 場 森 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 面岡 井 (土土土)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)	△ 高 大 橋 橋 山岡 大 佐 家地 坪 藤 (四四四)		

宿泊・交通・会場準備……山家・佐藤（他四日市）
 経 理・渉 外……安島・山家
 ビラ作成……山口・山家
 写 真 撮 影……浅井・田辺・沢野
 番 組 進 行……大坪・森脇・岡地・森・岡田
 囃 子 関 係……高橋・富岡
 着 付 け・接 待……女性一同
 懇 親 公 司 会……安島・鍛冶

独 吟 丸 八倉巻忠二
 素 謡
 (一・二〇) 松 風 シツレ 新井 浅井 純昇
 (全観) (全観) (全観)
 (一・〇〇) 道成寺 シテ 高橋 孝夫
 (全宝)
 ワキ水原一 飄
 ワキツシ岡田 英明
 終 演
 大近平小 鈴岡浅川安
 橋藤尾山 木地原崎鳥
 (高) (高) (研) (本) (本) (本)
 △ 馬水森 大森磯西 八倉巻
 場原 坪脇部村 八倉巻
 (高) (本) (本) (防) (大) (本) (本)

グループ	氏 名	グループ	氏 名	グループ	氏 名
土浦(観)	富岡 啓太郎	東研(観)	藤井 武夫	本社(宝)	竹林 政雄
	百瀬 三雄		吉田 紀将		柳 柳 俣子
	上面 清治		安島 栄一		藤井 井美代
	久保 祐二		岡地 村諒	東研(宝)	水原 義一
	野保 俊一		志村 元康		森奈 良高
	馬場 久夫		川川 忠峰		高山 健一郎
	大森 大正	富士(観)	原博 一明		高川 井春
	木春 嘉人		坪井 勝厚		川治 西正
	小渡 中久	四日市(観)	浅井 鉄也	富士(宝)	河盛 山しづり
本社(観)	田辺 尚子		岩立 林野		寺河 高橋
	渡新 忠二		水野 恒治		小高 岡田
	川崎 資定		佐藤 多男		大平 尾治
	久代 村伸		山家 谷利		馬近 藤木
	河本 重司	大阪(観)	水石 塚部		近鈴 望月
	松西 見啓	防府(観)	森沢 野信		望倉 又森
	但田 見啓		松井 田静		長勝 島
	上條 木直				島 了
					計 81名

第十八回 協和とう会

昭和五十四年十月二十日(土)・二十一日(日)
於 高野市 赤とんぼ荘

(第一日)

組 (当初の予定のもの)
開演 午後一時

(一・〇〇) 橋井慶 (防府)	子方三戸美津江 シテ松崎勝正 シテ笹井義晴	竹村林 村井俊夫 藤井祥孝	若月村月 松板井村 竹井林村	岩瀬 林瀬 岩瀬	田井林 田井林 田井林	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾
(二・〇〇) 鮎丸 (塚・宝)	シテ平尾 ツレ岡田 シテ岡田	竹村林 村井俊夫 藤井祥孝	若月村月 松板井村 竹井林村	岩瀬 林瀬 岩瀬	田井林 田井林 田井林	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾
(三・〇〇) 素 (本社)	シテ菅谷 シテ菅谷	竹村林 村井俊夫 藤井祥孝	若月村月 松板井村 竹井林村	岩瀬 林瀬 岩瀬	田井林 田井林 田井林	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾
(四・〇〇) 連 (富士・宝)	シテ菅谷 シテ菅谷	竹村林 村井俊夫 藤井祥孝	若月村月 松板井村 竹井林村	岩瀬 林瀬 岩瀬	田井林 田井林 田井林	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾

(第二日)

開演 午前八時
終演 午後六時

(一・〇〇) 船井慶 (土浦)	子方本橋 前シテ本橋 後シテ本橋	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾
(二・〇〇) 素 (本社)	シテ菅谷 シテ菅谷	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾
(三・〇〇) 連 (富士・宝)	シテ菅谷 シテ菅谷	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾
(四・〇〇) 素 (本社)	シテ菅谷 シテ菅谷	岩瀬 林瀬 岩瀬	若月村月 松板井村 竹井林村	岸堂 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾	多賀谷 池田尾 池田尾	柳森 池田尾 池田尾

(一・四〇) 連 調	(一・五〇) 仕 舞	(一・二〇) 舞 囃子	(一・三〇) 素 謡	(一・一〇) 番 囃子	附 祝 言
鐘之段 (富士・宝)	狸 舞 高 砂 玉之段 難 波 籠 太鼓	望月 美江 大岡田 芙明 小高橋 孝夫 笹平尾 学	望月 美江 大岡田 芙明 小高橋 孝夫 笹平尾 学	望月 美江 大岡田 芙明 小高橋 孝夫 笹平尾 学	トモ彦 弘之 ツレ八倉 忠二 シテ大坪 一弥
長倉 孝夫 高橋 孝夫	板村 政雄 岸田 軍二 若月 静人 柳 俊子 森脇 亮	高川 高井合 小野山 治 高野山 治 馬場 高	高川 高井合 小野山 治 高野山 治 馬場 高	高川 高井合 小野山 治 高野山 治 馬場 高	大岡岡啓太郎 小山家多喜男 菅 緑 静 男 地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本
馬場 孝夫 森脇 亮 水原 一 岡田 英明	馬場 孝夫 森脇 亮 水原 一 岡田 英明	馬場 孝夫 森脇 亮 水原 一 岡田 英明	馬場 孝夫 森脇 亮 水原 一 岡田 英明	馬場 孝夫 森脇 亮 水原 一 岡田 英明	地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本
地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本	地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本	地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本	地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本	地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本	地頭 磯部 浅井 西村 大 新井 本

交通・宿泊・会場準備……磯部・四日市
 経理・渉外……安島
 ビラ作成……四口市
 写真撮影……田辺
 番組進行……森脇・岡地・森・岡田
 着付け・接待……女性一同
 懇親会司会……安島・鍛治

本社(観)	久保 純 新井 謙二 石塚 資定 川崎 実徳 久代 浩直 鈴木 正俊 巽 博伸 田 来一 西村 淳亮 野村 忠二 藤井 武夫 八倉 卷忠 安島 将子 吉田 綾子	東 研(宝)	高山 健一郎 川合 正允 高井 春樹 河盛 幹雄 鍛治 義延 小山 しづり 高野 正子	東 研(観)	岡地 諒 志 村 元	篤夫 昇久 仲久 祐治 保野 清人 久野 嘉大 野 陸登 平 惠紀 渡 真知子	古川 忠康 川 峰之 林 孝夫 宮 英明 高橋 明次 岡田 治久 近藤 倉子 馬場 美子 望月 久子 長倉 みよ子 飯 島	富士(観)	大坪 一弥 立林 鉄也 岩 瀬 厚勝 浅井 井勝	四日市	浅井 昇 山家 多喜男 緑 静男 菅谷 亨 飯島 仁 司	大阪 武夫 磯部 弘之 磯部 亮友 防 附 秀二 森脇 岸田 祥夫 堂尾 井 俊夫 村 井 実人 竹 林 静 若月 進 池田 政雄 板村 井 晴夫 笹 多賀 和勝 松崎 信行 中原 博明 柳 戸 俊江 三 計 77名
-------	---	--------	---	--------	---------------	---	---	-------	-----------------------------------	-----	--	---

第十九回 協和とう会

昭和十五年十一月一日(上)・二日(日)
於 静岡県袋井市久能秋葉本殿 可睡斎

(第一日) 番組 開演 午後一時

(一・〇〇) 素 謡

杜(富士・観) 若シテ 浅井 勝

ワキ 川村 実

古川(研) 佐藤(研) 林(研) 古川(研)

山家(研) 岡坪(研) 大岡(研) 岡坪(研)

仕(吉・観) 侍源氏 惟光 鶴来 伸一

シテ 吉久野 田代村 忠一

ワキ 川村 実

大森(本) 大森(本) 大森(本)

安島(本) 西川(本) 八倉(本) 西川(本)

(一・〇〇) 朝(富士・宝) 長 後シテ 馬場 治次

シテ 鈴木 正美

後シテ 近藤 明学

水沼(本) 水沼(本) 水沼(本)

高岡(本) 高岡(本) 高岡(本)

巴(富士・観) 小袖 曾我

水沼 彰一 佐藤 義一

山田 一郎 矢木 宏

大坪 公恵 大坪 栄子

女(東研・観) 郎花

古川 忠康 岡地 諒

林 忠康 岡地 諒

富野(本) 富野(本) 富野(本)

(三・〇〇) 雲雀山(四日市) 素 謡

シテ 飯島 恒仁

ワキ 作村 武夫

大坪(本) 大坪(本) 大坪(本)

富野(本) 富野(本) 富野(本)

(三・三〇) 田村(東研・宝) 前シテ 高山 健一郎

後シテ 鍛冶 義延

ワキ 寺西 正行

高野(研) 高野(研) 高野(研)

原島(本) 原島(本) 原島(本)

(四・〇〇) 鶴(土浦) シテ 須藤 恵紀

ワキ 渡辺 登昇

小原(本) 小原(本) 小原(本)

面谷(本) 面谷(本) 面谷(本)

中野(本) 中野(本) 中野(本)

(四・三〇) 連 吟

菅原 義正 松崎 義晴

岸野 忠二 沢野 忠二

舟 慶 高橋 孝夫

(五・〇〇) 素 謡

小(督) シテ 山田 清史

ワキ 斎藤 弘之

(五・二〇) 通(防府) 小町 シテ 古賀 勇治

ワキ 池田 進

(八・〇〇) 素 謡

芦(土浦) シテ 木暮 正祐

ワキ 面谷 祐二

(八・二〇) 花(富士・宝) 前シテ 島森 登美代

後シテ 長倉 久子

ワキ 勝又 菊江

(九・〇〇) 鞍馬天狗(防府) 子方 坂村 政雄

シテ 若月 静人

ワキ 多賀谷 和夫

(九・二〇) 連 吟

天(四日市) 鼓

緑藤 静男 山家 喜男

海(本社・観) 大原 御幸

大森 大章 大森 大章

大原 御幸(富士・宝)

勝又 菊枝 勝又 菊枝

終演 午後六時

板若 沢野 川藤 鶴久水 矢

村月 野田 口 村井 来代 滝木

防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防)

△ 木今 森柳 多賀谷 川新 磯西 藤

防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防)

△ 高近 平鈴 須渡 埜田 山佐

防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防)

△ 高森 池田 橋 原 井岡 坪 井

防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防)

△ 古齊 磯 森 堂 池 馬岡 高森

防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防)

△ 賀藤 部 脇 田 場 田 橋

防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防) 防(防)

第二十回

協和とうとう会

昭和五十六年十一月七日(土) 八日(日)

於清風クラブ

電話(〇三)四六五二四二五

番組

【第一日】

— 開演 十二時半 —

(〇・三〇)

素 謡

小

督

(本社・總)

大久代 浩敏
大森 大陸
川村 実

野村 忠亮

鶴藤田吉
米田辺田
(本本本)

△ 安鈴川新
島木崎井
(本本本)

女

郎花

(主通)

木暮 正祐
面谷 祐二

巽 俊一

林古小堂佐
川原口藤
研(主(四)

△ 阿高西山
池岡村彥
研(主(四)

船

弁慶

(倉主・總)

菅谷 亨
岩瀬 厚

立林 鉄也
浅井 勝

川野大久藤
村料藤代
本本本(四)

△ 松浅大木木
井井野野
(天(四)(四)

(一・五〇)

連 吟

針

(倉研) 多木

寺高山 健春
西山井 正行
郎樹

独 吟

富士太鼓

松井 信行

(三・一〇)

素 謡

清

經

(總)

山田 義之
水滝 彰一

矢木 宏一郎

緒江吉藤島
松頭利田田
(西(研(研)

△ 鶴野福徳本藤
米口井源山田
本(野(大(本)

葵

上

(倉主・忠)

馬場 治次
近藤 明

平尾 学
鈴木 正美

寺高河川
西井盛合
研(研(研)

△ 阪高森
田藤
本(本)

(三・〇〇)

連 吟

賀

(防府) 茂

笠多賀 義和
井谷 晴夫

巴

(防府)

若板 静政
月村 人雄

(三・二〇)

鉄

素 謡
輪 (四日市)

木谷 正敦

水野 学
佐藤 恒治

菅田緑古林立
谷忍 川 林
奮太 (四研防)

岩山浅富阿浅
瀬家井岡地井
奮太 (四研防)

(四・一〇)

鶉

運 吟
飼 (防府)

松崎 勝正

木野 邦器
中原 博明

若板笹野柳
月村井口
奮太 (四研防)

池岸森多沢
田田脇古野
奮太 (四研防)

(四・五〇)

安

素 謡
宅 (全慶)
観 進 頼

吉田 綾子
大坪 一弥
磯部 武夫

西村 淳

安岡森福水池
奥地脚井野田
奮太 (四研防)

浅富本新崎川
井岡山井木崎
奮太 (四研防)

綾

素 謡
鼓 (全慶)

高橋 孝夫
小山しづり

森 泰城

高嵩川磯河近寺
野井合治盛藤西
研研 (奮太)

高馬岡水平鈴
山崎山原尾木
研研 (奮太)

— 終 演 六 時 半 —

【第二日】

— 開 演 八 時 —

(八・〇〇)

雲

素 謡
雀 山 (開)

植松 武
江頭 博

吉村 信次
藤田 善次郎

佐藤山矢水
藤 田木滝
奮太 (四研防)

山島浅福野
栗田井井口
奮太 (四研防)

楊

素 謡
貴 妃 (東研)

鍛治 義延

川合 正允

森高小河高殿
奥井野山盛山島
奮太 (四研防)

寺岡水森平
西田原 居
奮太 (四研防)

花

運 吟
筐 (防府)

沢野 忠男
岩田 軍二

池田 進
多賀谷和夫

若野板柳
月口村
奮太 (四研防)

本和磯松
山形部井
奮太 (四研防)

(九・三〇)

野 半

運 吟
野 宮 (富士)

加藤 弥生子

坂三 井池 満里子

加藤 弥生子
坂三 井池 満里子

九・五〇

千

茶 謡

手

（翁士・志）

勝又 菊枝
島森 登美代

望月 美江

△ 錦馬 高近
木場 勝彦
（翁士）

威

陽

宮

（本社・惣）

鈴木 正直
川崎 寛定

藤田 良輔
田辺 博章
徳来 伸一

大川野 久吉
森村 村代田
（本社）

△ 水新 安西木
西井 隆村谷
（西本）

紅

葉

狩

（兼研・惣）

古川 忠康

林 峰之
岡地 諒

浅立 哲木小登
井村 谷藤原口
（道）

△ 岩大 富野面
瀬野 岡右
（富士）

（二・一〇）

独 鼓

笠 之 段

山 泉 頌 子

△ 森 岡 田
（本）

八 島

水 原 一 瓢 高 野 正 子

居 唯 子

清

經

（金總）

（節） 富岡 啓太郎
磯部 武夫

（節） 平 尾 学

△ 浅西 森松
井村 脇井
（西本）

（二・五〇）

仕 舞

小 歌

小 山 しづり

小 袖 曾 我

若 月 静 人

井 筒

柳 俣 子

竹 生 島

森 脇 亮

船 弁 慶

富 岡 啓 太 郎

△ 高 浅 藤 西 森
岡 井 部 村 脇
（土）

△ 山 高 岡 水 森 殿
原 山 田 原 治
（本）

（〇・三〇）

舞 唯 子

松

（金總）

風

碧 月 美 江

（節） 岡 田 英 明
高 橋 孝 夫

（節） 平 尾 学

錦 川 小 高 寺 河
本 合 山 野 西 原
（富）

△ 馬 森 水 殿 江
豊 原 尚 博
（富）

独 吟

求 塚

本 山 清 泉

（二・〇〇）

茶 謡

班

（婦人部）

女

河 盛 廻 子

天 野 美 智 子
加 藤 包 子

面 四 浅
谷 村 野

△ 守 服 流
弘 部

独 吟

勧 進 帳

高 橋 孝 夫

（二・四〇）

番 唯 子

養

（金總）

老

浅 井 昇
新 井 純

岡 地 諒

（節） 岡 田 英 明
山 家 多 喜 男

（節） 近 藤 静 男
緑 静 男

安 福 大 川
島 井 評 崎
（本）

△ 森 本 儀 吉 西
脇 山 部 岡 村
（所）

— 終 演 二 時 半 —

協和とうとう会のあゆみ 第二十一回から十年の足跡

磯部 武 士 夫

第二十回（正確には第十九回）までの「協和とうとう会の足跡」を水原さんが書かれたが、同じようにその後を書くと安島幹事から指示がありました。水原さんの読み返してみますと、いろいろの資料をもとに書かれてあります。私はそんな資料を保存していません。

なるほど、第二十回くらいから、番組編成のお手伝いはしていますが、そのために囁子の打合せなどの連絡や相談の手紙のやりとりをしています。しかし、本番組が出来上がるとそれらは焼却してしまっていて、残っているのは、印刷された本番組だけです。とても水原さんのような詳しいも

のは書けません。まあ、日記にいろいろ書いていますのでそれをみながら、その時々のおい出でも書くことにしましょう。

さて、第一回から三十回までの開催場所をみますと、一・三・四・五回の健保・熱海荘と十五・十七・二十七回の湯の山・希望荘以外は、すべて違った場所です。これは会場をお世話された事業場の担当者のおたいへんなご配慮によるものだと思います。たとえば、第二十回の記念大会は、清風クラブで開催されましたが、あの会議場に畳が敷かれました。また平成二年の奈良・葉師寺では、お寺にいろいろお願いして一つの御堂を借

り切りにするなど、そのほかにもそれぞれの配慮、工夫されたことがよく拝察できました。このようなことがあって皆さんそれぞれの会場に、いろいろな思い出を残されていることと思います。

私の先生や謡仲間にも「二十年記念誌」を見せますと、皆、啞然として感心します。

もっと少人数ならよくありますが、これだけ多くの人数で一社の行事としてはまずないと思います。これは何人かの指導者とそれを助ける世話役の努力があつてこそできたものです。

さて、第三十回までにどんな曲が謡われたか、素謡のみについて調べてみたら別表のとおりです。二百曲の半分を謡っています。

以下に日記から思い出を振り返りながら、足跡を追ってみましょう。

第二十一回 昭和五十七年十月十六・十七日

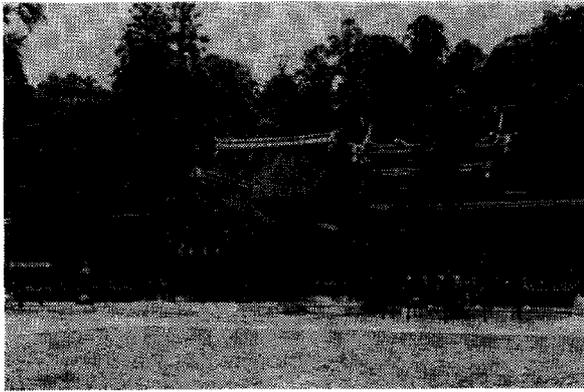
滋賀県 多賀大社 参集殿

当時の堺工場長の平尾さんから、多賀大社に謡に最適な大広間があつて、泊まるころもきれいで、野外だが能舞台もある。という情報が入った。さっそく平尾さん、福井

さんらと下見に行く。舞台は野外で相当傷んでいた。ので諦めたが、参集殿はなかなか立派であった。全館借り切りを申し入れたが、十七日は大安だから無理

ということであった。大広間は確保した。多賀大社は、伊弉諾尊、伊弉冉尊をお祭りしたお宮である。

この会の初参加の人は九人で、その中に、学生時代に山本順之師に習ったという木野君がいた。(安島注：平尾さんからの連絡に、七時から早朝参拝、代表玉串奉奠、神社由縁説明とあった)



第二十一回が多賀大社

第二十回記念大会のスナップ

昭和五十六年十一月
七・八日／清風クラブ



右・舞台の鏡づくりに絵筆を振るう本社絵画部の方々。
中段右・金木犀の記念植樹。
中段左・在京の社員夫人方も「班女」で盛り上げ。
下段右・本社山縣頌子さんの独鼓「笠の段」。
下段左・記念撮影。前列左端はお祝に来られた山本幹三人事部次長(当時。現常務)

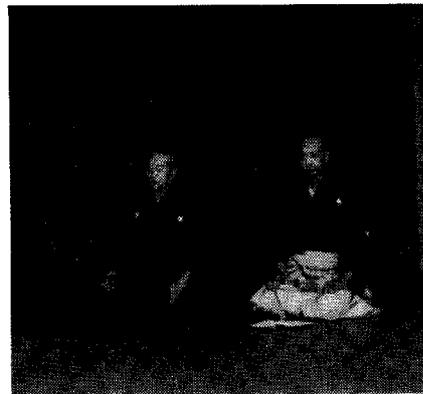


第二十二回 昭和五十八年十一月五・六日

静岡県袋井・醍醐荘

会場は富士工場グループのお世話だった。庭園に舞台があつて、低い植え込みと鯉が跳ねる池を隔てた広い縁側が見所になる。ちょっと修善寺の「あさば旅館」に似た感じである。

二日目は小雨となり、舞台の一部が濡れた。小雨を通して



故加藤辨三郎会長（五十八年八月十五日逝去）追善。上・観世流の「江口」左から西村・磯部・新井・富岡さん。下・宝生流の「融」左から水原・高橋さん。

て見る舞台の謡の声に、目の前の池で鯉の跳ねる音が時折入る。大広間の中の舞台では味わえない、自然の中のように会となつた。私事で恐縮だが、第一日の夕食後の中合せをしているとき、家から電話がかかり、義弟か危篤と知らせてきた。もう

う帰る列車もないので、後の知らせを待つことにした。翌日の朝食のとき死亡の連絡があつた。大阪の出し物「源氏供養」が、二番目であつたのでそれを謡い大急ぎで帰阪する。（安島注：前夜懇親会に使つた大広間が婚禮のために使用できず、打上げはちよつと窮屈な部屋でそくさと行つた。この会場はどのような

経緯であつたか、四日市の山家さんが事前の交渉にあつた。当時の連絡に「三月二十日、家族旅行を兼ねて、醍醐荘に下見に行ってきました」とある。なお、後日、醍醐荘から領収書か何かを郵送して来た封筒には「昭和五十八年 国立能楽堂開場記念」の記念切手が貼つてあつた。）

第二十三回 昭和五十九年十一月三・四日

静岡県熱海・山石間荘

会場は、富士工場グループにお世話いただいた。

大阪グループは堺グループと一緒に新大阪八時三十分発の「こだま」に乗つた。車中はまるでピクニックにでも出かけるような気分であつた。四日市グループは乗用車であつたが、連休のため道路が渋滞し約四時間遅れる。そのた

め番組の順序を次々と変更した。

それに加えて持ち時間をオーバーするグループが続出したため、進行がかなり遅れた。それを気にした世話役の富士グループ（観世）は、自分たちの素謡を一番抜きたいといひだしたが、何とか抜かないでやりくりした。

夜、部屋で酒を飲みながら安島君と会の進行について議論した、と日記にある。

二日目、母と女房が来て、

初めてとうとう会を聞く。実は三人でとうとう会終了後、熱海荘に泊まり、その翌日靖国神社へ参拝するためであった。

第二十四回 昭和六十年十一月二・三日

兵庫県神戸市・須磨荘

今回の会場は、大阪グループがお世話することになり、四月十八日、菊守・八尾君と下見に行く。神戸市営の国民宿舎である。神戸市はなかなか商売があり、国民宿舎は普通六ヵ月前の受付けであるが、それ以前に受付けてくれた。

参加者は五十名を割ってしまったが、天気は素晴らしく会場から須磨浦や大阪湾が一望できた。

大阪支社の「大佛供養」はそれなりに謡えたが、佐藤武平君がアガッタのは意外。夜の懇親会で新井会長が、

初めてとうとう会を聞く。実は三人でとうとう会終了後、熱海荘に泊まり、その翌日靖国神社へ参拝するためであった。

なるべく多く参加してほしいと、と繰り返して要望された。何人かは朝須磨寺へ行かれた。せっかく来られたのであるから、謡にも縁のある有名な所を見物して帰ってほしい。もっとも、こちらが用意すべきなのかな？

全員による記念写真は、砂浜に出て撮影した。

(安島注：この回の会計報告の冒頭に「謡うも舞うも須磨の海」と、望月美江さんの祝電を引用している。欠席となった望月さんは「はるかに盛会を祝します」とメッセージを送ってくださった。)

第二十五回 昭和六十年十一月二・三日

滋賀県長浜市・曲豆八ム荘

今回の会場は、民宮の国民宿舎でやや小さかった。それだけに、ほとんど貸切りのようであった。東京、宇部、防府からの足の便を考えると、新幹線を降りて一時間以内の所を探すことになる。どうしても数は制約される。

琵琶湖の岸辺で白砂青松の面影のある場所であった。二日目の朝早く散歩に出かけた。平尾さんが白砂に座り笛を吹いておられた。この夏、ここから約三十分ほど北の木之本へ、私の謡仲間と行

き、そして賤ヶ岳へ登った。

賤ヶ岳の上からの琵琶湖の眺めより、この豊公荘の庭からの眺めの方が、白砂と青い松林が続き、前は広い湖、その向こうに比良・比叡の山並みが望め、ずっと琵琶湖らしい風情があったように思う。

大阪の「安宅」を齊藤・瀬島、同山に菊守・上條・佐藤・神田・八尾・私、そして子方に衣輪というメンバーで謡ったが、それから二、三年の間に、謡曲部の五人が東京へ転動した。

第二十六回 昭和六十二年十一月七・八日

兵庫県相生市・あいおい荘

この会場の国民宿舎は、すばらしい眺めの所にある。左に屋島群島、正面に小豆島、

右に赤穂岬と東瀬戸内海の眺めが一望できる。しかし、参加者は当初の申

込み七十五人に対し、実際はなぜか五十八人になってしまった。お世話する事業場として一番ガツカリすることだ。私たちは、下見も当日も大阪から乗用車で行ったものだから、相生駅からそれほど遠いとは思っていなかった。案外

距離があったようで、タクシー代が高かったといわれた。これは全くの不覚。すばらしい景色に免じて許していただきたい。

夜の懇親会には、大阪支社からたくさんさんの「蕪村」を差し入れていただいた。

第二十七回 昭和三十三年十一月五・六日

二重県湯の山・希望荘荘

第二十四回から三回続けて会場のお世話をしたので、ちょっと息切れがするし、グループから転勤者がバタバタと出たので、今回は四日市グループにお願した。

希望荘は三回目であるが、会場設営する立場から考えると、やむを得ない。伊勢神宮の中に舞台があり、借りるところができるらしいという情報も伝えたが、宿泊に問題があるという。やはり実績のある

希望荘の方がよいのではないかとということになった。

会の直前になって、欠席の連絡が何人かからあった。地謡をやりくりしなければならぬ。仕事の関係など、やむを得ない事情によるものと思うが、そんな苦勞もあることを知っておいてほしい。

毎年のように一日目の懇親会のあとは申合せに入る。舞囃子「紅葉狩」の舞アトがコイ合止メか、謡カケかで問題

わが謡曲部の稽古風景

四日市工場謡曲部

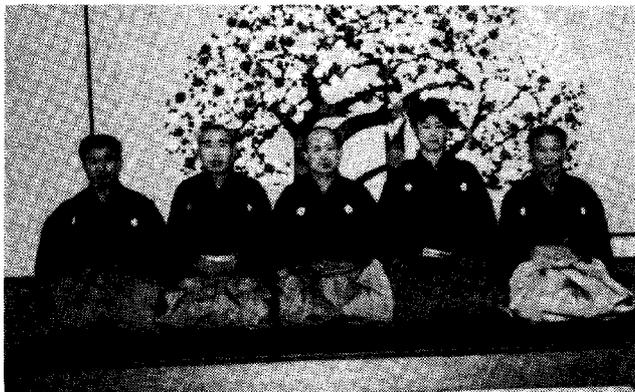
当グループは、四日市地区と名古屋地区に分かれて活動しており春の中謡会、秋の協

和うとう会の折には、合同して参加している。

四日市では、工場の山家・上森およびOBの浅井氏が藤波涛光会のメンバーとして、^月一回藤波重和師の指導を受けている。

工場内の活動は、年二回の会に向け、山野をはじめとする若手の育成に努めている。また名古屋ではOBの木谷氏が地域の謡愛好会の世話役をされ、木谷夫人は坂井門下の名誉師範として、名古屋支社の西野氏をはじめ、後進の指導にあたっておられる。

一方、宝生流の寺西氏、OB平尾氏、高山氏らは、それぞれ独自の練習をされ、会に



左から上森・山家さん・藤波先生とご子息・浅井さん

になる。後日、鼓の先生に聞いたら、観世はコイ合止メ、宝生は謡カケだということだった。やはり、私たちは素人の集まりだと感じた。

同じ観世流でも職分家によって多少謡い方が違うことがある。家元系と分家系で、大ノリのハシリが違う。囃子が入ると7拍のモチが違ってくることもあるので、素謡も申合せをした方がよい。しかし時間的なこともあり、そこまでは普通しないが、それだけに地頭の謡によく合わせるように謡う必要がある。うとう会では、地頭は相当経験のある人をお願いしている。前記のように職分家の所属によって少しは違ふところがあっても、その地頭の謡に合わせるように謡うべきである。ちなみに、うとう会での囃子方の流儀は、笛は森田流・

一噌流、小鼓は大倉流・幸流・幸清流、大鼓は葛野流、太鼓は金春流である。

今回は久しぶりに門司工場グループが参加した。そして工場のご好意で清酒雪の花を五本も下げてこられた。

第二十八回 平成元年十一月四・五日

神奈川県大和・

大和十八瓢能舞舞台

水原さんの舞台が完成したという情報が入る。「ぜひ、うとう会を」と安島さんに話したら、もちろんそのつもりだということを楽しみになった。

東京に延べ十年ほど住んだが、水原さん宅のある中央林間というところへ行ったことがなかったと思っていたら、相模カントリークラブのすぐ近くだった。

六瓢能舞台は、コリ屋の水

参加されている。

ほかに、以前活躍されていた四日市の緑氏、水野氏、佐藤氏および木村氏らは、現在休会中であるが、近い将来復帰の予定。

写真は平成三年の藤波涛光会の大会の折、藤波師に協和うとう会三十周年記念誌のお話をして、入っていたいたもの。

いるが、この舞台よりもっともっと本式だった。

ただ、宿泊はどこだろうと思っていたら、「貸切バスで移動しますので、早く乗ってください」ということで、約一時間二十分ばかり大和市から隣の相模原市にある国民年金健康保養センター「さがみの」へ移動。

東京に近いということで、二日目は在京のOB社員のご夫人方の参加もあり盛会であった。

打ち上げでは、帰りの新幹線の都合があり途中で席を立たざるを得ないグループもあったが、水原ご夫妻に秘蔵の

日本酒などを振舞っていただ
き、「内輪の会場ならでは」

のうとう会になった。

第二十九回 平成三年十一月十一日

奈良県奈良市・

相宗大本山 薬師寺

第二十八回は東であったか
ら今年は関西でと思い、彦根
の国民宿舎の下見を予定して
いたら、西野君（現名古屋支
社）が、薬師寺が借りられる
という話を持ち出した。佐藤
君（現東京支社）が「ぜひと
も薬師寺でやりましょう」と
いう。安島君に一応電話をす
る。急遽四月二日薬師寺に、
西野・菊守君と三人で行く。
ちょうど法要の能があったが、
当の僧侶と話せなかったが、
事務所の人にいろいろうかが
った。この方は大阪支社酒精
部長の大隅さんの奥さんと親
友で、協和発酵のことをよく
知っておられた。

開催日の打合せをする。も
お寺ですべて手配してもらえ
る。お寺としての絶対の条件
は、朝五時からの勤行に出た
後写経をすることであった。
会場になるお堂の借り料はお
心任せ、これには弱った。大
きなお堂が一軒借り切りであ
る。

二日日朝五時、全員そろっ
て金堂へ行く。東の空が少し
明るくなっていた。金堂での
お勤めをして東塔、西塔その
他のお堂を礼拝して本坊でお
粥の朝食をいただき、写経道
場で写経をする。これに近い
経験が、第十六回の三井寺だ
った。

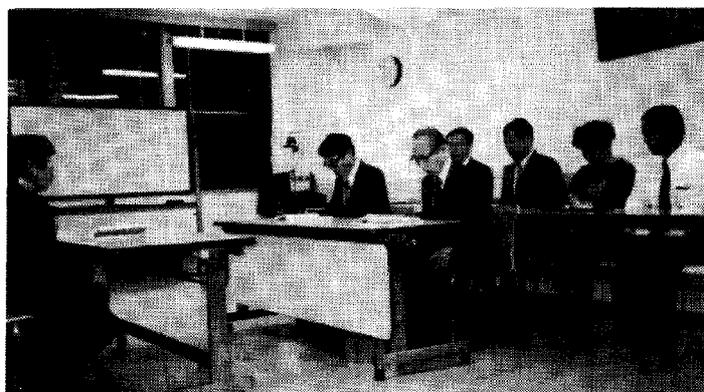
わが謡曲部の稽古風景

本社観世流謡曲部

我々謡曲部で現在活動を続
けているのは十四名、そのう
ち協和発酵OBは三名、女性
が一名です。そのほか宴会要
員は枚挙に暇がありません。

先生は小野葉満子先生。い
ただいた名刺には、能楽協会
会員、坂井同門会同人、坂井
職分家室長、観世流能楽師と
四つも肩書がついています。
平たくいえば坂井音重先生率
いる坂井同門会の女流能楽師
で、真正正銘のプロです。小
野先生には、磯部先生からの
引継ぎで昭和四十八年からご
指導いただいていますので、
もうかれこれ二十年近くにな
ります。

稽古は毎月二回。主に水曜



この日は新年会で、いつもの
スタイルで「鶴亀」を謡った
後、懇親会に入った。

二日目の打ち上げでは、参加者の数がかなり少なくなっていた。翌十二日が「天皇即位の日」で、会社は休みだからこのを利用してゆっくりすれば、と考えていたが、それぞれに予定の立て方があった

らしい。次回は第三十回の記念大会なので、初めて防府で開催すること、記念行事として二十回記念と同程度のものを考えること、などを確認して散会した。

第三十回記念大会 平成三年十一月九・十日

山口県防府市・渡辺舞台

第二十回記念大会が、協和発酵発祥の地である「清風クラブ」であったから、第三十回はぜひとも「防府」でとあったが、会場探しにはいろいろ苦労があった。

当初、安芸の宮島「厳島神社」の能舞台が借りられるかも知れないということと、防府工場の木野君に現地調査を依頼したところ、舞台は奉納する形で一日は借りることは可能だが、二日間の連続使用は困難などの問題があ

って断念した。工場内の「有鄰館」も候補に上がったが、市内の「渡辺舞台」に落ち着いた。第二十八回の六瓢能舞台の時と同様、宿舎の条件が大宴会ができて、音合わせなど前夜の申合せができ、舞台から近い所とあって、防府の原田幹事を悩ました。結局、送迎バスで二十分の「玉泉湖温泉」に決まった。何しろ防府はもとより、山口・中国地区で初めてのとうとう会開催ということで、たく

日の十八時頃から二十時頃まで、写真にもあるとおり、会議室のテーブルを前に椅子に坐り学校の教室スタイルで行います。この写真は、平成四年の新年会前に「鶴亀」を謡っているところです。通常出席する人は、平均五〜六人程度。三つのコースに分かれており、初級コースから始め中級、上級コースとなります。

員が観世流家元入門させていただきました。今年の新年会では、さらにその上の習いものに進みたい人が名乗りを上げ、頼もしい限りです。坂井同門会では、年に4回の同門会を観世能楽堂で開催しますので、プロの芸に直接触れる機会に恵まれており、非常に幸せなことです。

一曲を普通三〜四回で仕上げるので、年間六曲程度習うことになりませんが、交誼会（関東地区大会）やとう会の前にはおさらいを数回しますの

また、平成元年六月には、小野先生がプロとして立たれたから二十年を記念して「観葉会」を国立能楽堂の本舞台で開催され、出演の機会が与えられました。非常に名誉なことでした。

で、実際は年間の曲数はもっと少ないかもしれません。とにかく、焦らず着実に、をモットーで教えていただいています。

小野先生を師と仰いで、今後とも謡の道に精進していければ、と願っています。
(平成四年二月 野村記)

会社の謡曲部とはいえ、観世一門としての自覚を持ったため、昭和五十九年に九名の部

記念大会のお祝にお越しいただいた元防府工場謡曲部の左から坂本・関・柳さんと渡辺舞台の渡辺さん



さんおられる防府工場謡曲部OBへのお誘いもしっかりお願いした。そして懐かしい方々に多数お越しいただいた。舞台の上では、宇部工場から宝生グループが初参加、とう会の新人といわれる若い人の仕舞や舞囃子への挑戦などがあり、協和とう会の次の発展を示唆しているようだ。

一日目夜の申合せで内田さんにアドバイスする磯部さん



あった。

一日目の夜の舞台、つまり懇親会は、三十周年記念誌の取材を兼ねた「わたしの謡一徳」を出席者全員にお話していただいた。宴会の後は、例年にならない熱のこもった申合せと「部屋別懇親会」が遅くまで続いた。

宇部グループに同行して、面打ちの松田重久さん（千代田開発）に、その作品数点とともに二日間お付き合いただいた。

第二日の最終は、追加番組として、故加藤幹夫社長追善の「融」を全員で謡った。

（この回は安島担当）

おわりに

こうして綴ってきたものを読み返してみると、謡のことを何も書いてありません。

私は「協和とう会」は、協和の社員、OBそして家族で謡を趣味とする人々が年一回集まり「やーやー」といって、この一年勉強してきた成果を発表しあい、共に謡を楽しむものだと思えます。

そして、新しい仲間を温かく歓迎して、その人が謡を趣味として長く楽しめるように励ますことだと思えます。ですから、とう会の当日、会場から抜け出して他の部屋で自分たちの稽古しておきたい気持ちもわかりますが、出演者の謡をできるだけ聞いて

あげることでも大切ではないか思います。

その日の出来不出来は本人が一番わかります。自分なりに良く出来た時は、何となく満足感を覚えるものです。

最後に、私の師匠であった故大西信久師の残された「謡十五徳」をご紹介します。

謡十五徳

不行而知名處

在旅而得知者

不習而識歌道

不詠而望花月

無友而慰閑居

無樂而散鬱氣

不思而昇座上

不望而交高位

不老而知古事

不恋而懷美人

不馴而近武芸

不軍而識戰場

不祈而得神徳

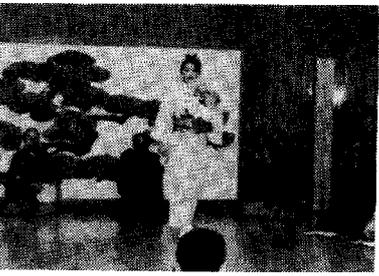
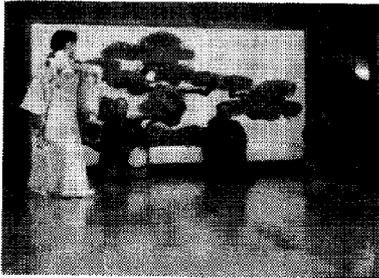
不觸而知佛道

不嚴而嗜形美

第三回観劇大会メダillon

一日目の懇親会の後は恒例の申合せ。左二列の四段は、二日目の本番と前夜の申合せ風景。上から「班女」望月・「玉鬘」木谷・「船弁慶」内田・「草子洗小町」松岡さん
 四段目右は四日市「浮舟」

役は右から木谷・浅井さん。五段目右から「高砂」浅原・「松風」花田・「船弁慶」若月さん。最下段の右は初参加宇部宝生の右から村上・昼田さんと平尾さんの「小督」。同左はこの年の八月二日に逝去された故加藤幹夫社長追善の「融」を全員で謡った。



資料

協和うとう会第二十一回(三十回の番組)

第二十一回

協和うとう会

昭和五十七年十月十六日(土) 十七日(日)
於多賀大社 参集殿

番組

【第一日】

開演 十二時半

(〇・三〇) 連吟

鶴亀

岡家藤 整重 茂次夫弘

(〇・四〇) 素謡

土蜘蛛

葛下尚夫 衣輪恵子 菊守悦三 松井信行 斉藤弘之

放下僧

福井清史 野口栄男 山田義之

(一・三〇) 連吟

鉢の木

平尾久明子 長倉久明子

(一・四〇) 素謡

安達原

佐藤恒治 山家多喜男 緑静男

鶉飼

川合正允 鍛冶義延 寺西正行 河盛幹雄

(東研・宝)

高森真島井山本研本研

高水原田本本

田矢山佐水野 辺木出藤磯口本本本本本本

鈴本浅安福 木山井島井本本本本本本

緑佐島藤江 藤田田頭西四門門門

山斉磯浅吉植 栗藤部井村松四大大門門門

吉岡山上坊三 家藤口森井池本本本本本本

水本斉磯佐浅 藤山藤部藤井本本本本本本

【第二日】

開演 八時

(八・〇〇) 素謡

嵐山

松崎勝正 若月静人 多賀谷和夫

(防府)

鞍馬天狗

河盛幹雄 高山健一郎 高井春樹

(東研・宝)

鶉飼

江頭博 植松武 吉村信次

(九・三〇) 連吟

小督

佐藤義一 水山滝田

独吟

竹生島

岸田軍二 磯部武夫

卒都婆小町

(一〇・〇〇) 素謡

班女

田辺博章 鈴木正直 安島将

(本社・観)

熊野

渡辺昇 面谷祐二 木暮正祐 須藤恵紀

(一・一〇〇) 仕舞

東北

岡田英明

緑佐川岩矢野 藤村瀬木村本本本本

山池木今岸中 家田野田原本本本本

数菊松浅坂三 下守井井井池天天天富富富

藤本斉島 田山藤田門大大門

植島藤吉江 松田田村頭門門門門門

野八西川岩 倉村善村崎瀬本本本本本本

緑小大翼佐水 原森藤滝西土本上本本

佐山浅福野山 藤家井井口田本本本本本本

高水森山橋原研富本本

鳥帽子折

(三・一〇)

連吟 矢野村辺 田博章 木宏 一忠 亮章 大森 一郎 大陸 川村 実厚 岩瀬

独吟

小原 嘉人 翼 俊一

素謡

高橋 孝夫

(三・三〇)

卷

(富士)

三池 公忠 坂井 満里子 浅井 勝

松

(四・三〇)

独吟

鈴木 正美 望月 美江 馬場 治次

鞍馬天狗

多賀谷 和夫

俊成忠度

八倉巻 志二

三井

(四・五〇)

素謡

中原 博明 木野 邦器 池田 進 今田 義信

景

(五・三〇)

素謡

望月 美江 森 泰城 高橋 孝夫 鍛冶 義延

松門之会釋

平尾 学

終演 六時

屋島

(二・三〇)

木野 邦器 西村 淳 水原 一瓢

素謡

松井 信行 齋藤 弘之 本山 清泉

江

(二・三〇)

素謡

岡田 英明 森 泰城 高山 健一郎

鉄輪

(三・三〇)

素謡

高河 寺川 井 西 研 研 研 井 西 研 研 研 井 西 研 研 研

隅田川

(三・三〇)

素謡

新井 純

桜

(三・三〇)

素謡

西村 淳 磯部 武夫 緑 静男

籠

(三・三〇)

素謡

望月 美江 岡田 英明 高橋 孝夫 平尾 学

藤

(二・〇〇)

素謡

浅井 昇 川崎 資定 福井 清史

附祝言

終演 一時四十分

第二十二回

協和とう会

昭和五十八年十一月五日(土)・六日(日)

於 静岡県磐田市 醍醐荘

【第一日】

番組

開演 十二時半

(一〇・二〇) 高砂 (全縣)

木野 邦器
磯部 武夫
浅井 昇

(一〇・〇〇) 烏帽子折 (東研・生)

藤代 欣也
寺西 正行

(一一・二五) 鶴龜 (土浦)

鈴木 正三
大枝 武平
鍛冶 義延
山元 一弘

(一一・五〇) 春栄 (富士懸)

菊 慈童 (防府)
重田 卓雄
三油 卓雄
菅谷 亨
立林 鉄也
浅井 勝

(一一・二五) 土蜘蛛 (富士守)

馬長倉 治次
鈴木 正久
山本 治美

(一一・四〇) 橋弁慶 (防地)

川上 純江
伊藤 佳子
重村 節子

村中古 坂上 奈田 廣實 村森 木田 防防防防

藤河 殿高 村山 代盛 島井 形元 研研本研研研

坂渡 須賀 江島 井辺 磯田 富土土土門門

河岐 川高 盛島 合井 研本研本

若山 岡安 山佐 月田 地島 家藤 防禦本本四四

八富 西新 水福 谷 磯村 井野 井本本本本四研

竹多 木浅 若柳 林谷 野井 月防防防防防

高橋 隆憲

面富 岡磯 吉谷 岡地 藤村 土土土大門

森水 高風 山本 本本研

【第二日】

開演 八時

(八・〇〇) 和布刈 (同司)

江頭 博
島田 浩志
藤田 善次郎

(八・二五) 源氏供養 (大坂)

衣輪 恵子
藪下 尚夫
八尾 和広

(八・五〇) 草紙洗 (東研・生)

高山 一弘
河盛 幹雄
藤代 欣也
村形 力

(九・一五) 善知鳥 (富士懸)

菅立 重卓
谷林 田也
藤 恒治
家多 齋男

(九・四〇) 雲林院 (土浦)

山上 佐藤
若月 邦人
多野 静夫

(一〇・〇五) 放下僧 (本社・懸)

岩瀬 厚
鈴木 正直
坂井 満里子

(一〇・三〇) 富士太鼓 (防府)

板村 政雄
古賀 勇治
若月 静人

大鈴川 伊重 重立 菅川 矢渡 渡 須藤 高江 植田 田田 藤松 土土土門門門

柳中 竹大 野渡 山岡 水佐 菅重 原林 森村 辺 山口 藤隆 藤谷 田防防防防防

面富 水小 多柳 浅岡 安八 大坂 山水 高新 佐吉 谷岡 野野 谷 井地 島 森 井 富富本本本意

板若 磯木 多古 山福 弘岡 浅立 村月 部野 合賀 田井 井地 井林 防防防防防防

(三・〇五)

二人静
(富士・宝)

花筐
(東研・宝)

(三・二〇)

素
經

渡辺 尚子
大森 大陸
野村 忠亮

浅井 公惠
三池 義延
高井 春健
高松 正允
水原 健一郎
高水 允郎
川合 正太郎

(三・四五)

(四・一〇)

女
(舞)

福井 清史
岡藤 弘護
佐藤 弘護

衣八 藤木
下尾 木村
輪藤 田松
天大 門大
天大 門大
天大 門大

衣八 藤木
下尾 木村
輪藤 田松
天大 門大
天大 門大
天大 門大

(四・二五)

(四・二五)

養

井田 天鼓
筒村 鼓

斎木 一枝
坂井 満里子
西村 淳

(1) 近藤 明

馬高 鈴木
嶋橋 木富
富 富

(四・四五)

杜

融
(全五)

新井 純
岡地 諒

西村 武夫
磯部 純夫
新井 啓太郎
岡井 啓太郎
高橋 孝夫
水原 一瓢

(1) 富岡 啓太郎
(2) 山家 多喜男

(1) 水原 一瓢
(2) 静男

八木 磯部
磯部 木富
木富 木富

終演 五時三〇分

(二〇・五五)

求
(本社・宝)

玉
葛

森 英明
岡田 一瓢
水原 健一郎
高橋 孝夫

(二・二〇)

花

素
筐

水瀧 彰一
山田 義之
山口 整次
佐藤 護

(二・四五)

小

督
(四日也)

山家 多喜男
奈木 一枝
水野 学
佐藤 恒治

衣八 須上
輪下 尾藤
天大 天大
天大 天大

衣八 須上
輪下 尾藤
天大 天大
天大 天大

野
守

柳 椒子
富岡 啓太郎
水原 一瓢

浅磯 木若
井部 野月
西 四防

(〇・三〇)

巴

独
葵

安島 将章
田辺 博章
岡田 英明
磯部 武夫

(〇・四五)

狸

香
々

馬場 治次
鈴木 正美
近藤 明

山崎 長橋
本橋 倉富

藤岡 富家
下地 岡井
大富 大富

終演 一時一〇分

第二十三回

協和とうとう会

昭和五十九年十一月三日(土) 四日(日)
於 熱海市伊豆山 熱海岩間荘

【第一日】

番組組

開演 十二時半

(〇・二〇)

素 福

賀 茂

藤田 良輔
大森 大陸
川村 賢

敷下 尚夫

(木・観)

野 止

三池 公恵

菅谷 亨

(富・観)

野 宮

馬場 国男

須藤 恵紀

(土・湖)

連 鞍馬

天狗

重田 卓雄
林田 欽也
皆谷 亨

(富・観)

百 萬

坂井 満里子

独 葵

上

衣輪 恵子

素 福

蟬 丸

山口 整次
水滝 彰一

佐藤 護

(富・観)

舟 弁

馬場 治次
鈴木 正美

平尾 学
大橋 良作

(富・観)

土 蜘蛛

宮崎 英治
加藤 七弥
三谷 哲雄

永富 正人

坂須馬杉竹村
井藤藤山林田
福土助防防

重立輝木岸中
田林地野田原
富富富防防防

佐八菊川藤
藤尾守村下
大次大本本

山磯福高藤
田部井藤田
栗大栗大本

田越上林大
辺 森 森
本四西土本

西西富水佐山
屋村岡野藤家
本五土四四四

田西西板直立
辺屋村井田林
本本本以富富

鈴西川新八安
木村輪井巻島
本本本本本本

【第二日】

開演 八時

(八・〇〇)

連 鶴

亀

(土・研)

藤山 健一郎
高代 欣也

橋 弁慶

鈴木 正三
林 峯之広

素 福

大佛 供養

村田 義文
杉山 喜好

竹林 実

(防研)

富士 太鼓

重田 卓雄
立林 鉄也

坂井 満里子

(富・観)

連 高野物狂

島森 登美代
勝又 菊枝

(富・宝)

(九・二〇)

素 福

玄 象

緑 静男
水野 学

山家 多喜男

(四日市)

通 小町

鈴木 正直
川崎 資定

田辺 博章

(本・観)

紅 葉狩

山本 治
長倉 久子

近藤 明
高橋 孝夫

(富・宝)

菊八佐衣三坂
守尾藤輪池井
大大大大富富

重中岡水立菅
田原地野林谷
富防富四富富

大藪川西西藤
森下村屋村沢
本本本本本本

藤八西新安加
田巻村井島藤
本本本本本本

山佐上水山
田藤森滝口
界界四界界

福高磯高木岸
井藤岡野田
界大大土防防

三西西川大藪
池屋村村森下
本本本本本本

菅八岡川玄藤
谷巻地輪島田
富本富本本本

宮三永上緑須
嶋台富森 藤
本本本本本本

藤加木岸中馬
沢藤野田原嶋
宇宇防防防土

連吟

七騎落 (四日也)

山上藤多 佐藤恒静 森家多喜男 茂治男

道成寺 (本・宝)

水岡森原 一英 森明 城

盛 (三・四〇)

久 (筋府)

中原博明 岸田軍二 木野邦器

桜

川 (重研)

寺西 正行 高井春樹 藤代欣也

草紙洗

高橋孝夫

吉野天人 (全・観)

齋木一枝 岡田英明 磯部武夫 近藤静男

山姥 (全・宝)

水原一瓢 富岡啓太郎 山家多喜男 近藤平尾 明学

薪之段 (大観)

八尾守藤 和悦 武三平 西村淳

碓 (五・二〇)

富岡啓太郎 新井純 西村淳

終演 六時

△ 福山佐山安田 井田善家島崎 堺堺四四本本

△ 八富西新水鈴 倉茶岡村井野木 本十本本本本

△ 河殿水高 盛治原山 研研本研

△ 木西岡齋 野村地藤 防本本本

△ 高橋治 岡崎山 本本本本

△ 寺河藤高 西盛代山井 研研研研

△ 木高磯河水 野藤部地野 研大研大

仕舞

熊野 新井純

歌占 富岡啓太郎

景清 (大観)

福山清義 史之

隅田川 (大観)

衣輪 惠子 磯部武夫 八尾和広

葛城 (富・宝)

望月美江 岡田英明 大橋良作 近藤平尾 明学

井筒 (全・観)

西村淳 富岡啓太郎 高橋孝夫 平尾学

実盛 (全・宝)

岡田英明 山家多喜男 近藤静男 明

附祝言

高橋孝夫 岡田英明 山家多喜男 近藤静男 明

終演 二時

△ 木西磯岸 野村部田 防本本本

△ 高野吉河 望月西盛 山本本本

△ 近殿水人 藤治良梅 研本本本

△ 水磯岡齋 野部地藤 防大富大

△ 島長鈴高馬蹄 森倉木橋場又 倉富富富富富

△ 水宮新西川 野岡井村崎 四土本本本

第二十四回

協和うとう会

昭和六十年十一月二日(上) 三日(日)
於 神戸須磨浦 須磨荘

番組

〔第一日〕

開演十二時三十分

(〇・三〇)

大仏供養

(大飯)

子 伊藤 保雄
ツレ 八尾 和広
立 神田 信夫
シテ 佐藤 武平

ワキ 菊守 悦三

水 齊 水 齊
上 森 上 森
縁 森 縁 森

△ 佐藤 茂
△ 渡辺 隆
△ 藤野 大

国

栖

(本・組)

子 渡辺 尚子
ツレ 岩瀬 厚実
シテ 川村 厚実

ワキ 野村 忠亮

水 永 水 永
上 宮 上 宮
縁 三 縁 三
木 谷 木 谷
下 村 下 村

△ 大森 孝
△ 川崎 孝
△ 加藤 孝

(一・三〇)

芦

刈

(富・室)

シテ 近藤 久明子
ツレ 長倉 久明子

ワキ 馬場 治次

大 藤 大 藤
勝 又 勝 又
森 登 森 登
美 子 美 子

△ 平尾 隆
△ 高橋 隆
△ 森 隆

連 吟

胡蝶

(富・室)

勝 又 菊枝
島 登 美子

二人静

(富・組)

坂 井 満里子
菅 谷 享子

藤戸

(室)

森 高 春城
岡 田 孝 夫
明 夫

木 謡

俊

寛

(東研)

シテ 寺西 正行
立 菊地 泰弘
松 本 正 弘

ワキ 河盛 幹雄

大 馬 大 馬
尾 藤 尾 藤
隆 隆
富 富

△ 高山 隆
△ 岡田 隆
△ 藤 隆

〔第二日〕

開演八時

木 謡

屋

鳥

(宇部)

ツレ 永富 正人
シテ 加藤 七弥

ワキ 宮崎 英治

水 佐藤 隆
山 口 隆
田 口 隆
塚 隆

△ 上野 隆
△ 新井 隆
△ 山崎 隆
△ 佐藤 隆

富士太鼓

(四)

子 上森 茂
シテ 山家 多喜男

ワキ 佐藤 恒治

水 永富 隆
野 村 隆
川 村 隆
若 村 隆

△ 三井 隆
△ 加藤 隆
△ 富田 隆
△ 木村 隆

敦

盛

(形)

シテ 山口 整次

ワキ 水滝 影一

水 衣藤 隆
山 田 隆
佐 藤 隆
八 尾 隆

△ 新井 隆
△ 木野 隆
△ 水野 隆

(九・三〇)

連 吟

通小町

(東研・室)

高山 健一郎
松 本 正

竹生島

(室)

山 本 正美 浩
鈴 木 正美 浩
平 尾 隆

仕 舞

高砂

松 本 正

藤戸

富岡啓太郎

△ 藤井 隆
△ 新井 隆

(一〇・二五)

木 謡

善知鳥

ツレ 須藤 忠紀
シテ 林 泰之

ワキ 渡辺 是

水 上野 隆
山 崎 隆
佐 藤 隆
山 崎 隆

△ 大森 隆
△ 任田 隆
△ 大森 隆
△ 大森 隆

吉野天人 (王・観)

フレ岡山 貞治
シテ 鈴木 広

ワキ大枝 正三

水着 山瀬井
山瀬井 大
山瀬井 大
山瀬井 大

田辺 野村
川崎 野村
山瀬井 大
山瀬井 大

(三・四〇)

独 吟

草子洗

銀治 義弘

松 風

新井 純

速 吟

融 (本・観)

鈴木 正直
川崎 資定

安島 川村
野村 野村
忠 博
亮 章

独 吟

弱法師

齊藤 弘之

狸 々

高橋 孝夫

(四・四〇)

素 謡

鉢

木 (観世合用)

フレ浅井 昇
シテ磯部 武夫

ワキ新井 純
ワキ川崎 資定

加藤 山家
山家 藤野
山家 藤野
山家 藤野

木野 野村
木野 野村
木野 野村
木野 野村

(五・四〇)

羽

衣

近藤 明

大岡田 英明
小大橋 良作

苗平尾 学

高山 山瀬井
山瀬井 大
山瀬井 大
山瀬井 大

馬場 高橋
馬場 高橋
馬場 高橋
馬場 高橋

終 演 六 時

邯

邯 (本・観)

子洗辺 尚子
シテ田 博幸

ワキ大森 大陸
ワキ下 尚

野村 野村
野村 野村
野村 野村
野村 野村

(二・二五)

独 吟

班 女

芥木 一枝

大岡田 英明
小磯部 武夫

苗平尾 学

高 砂

西村 淳

大岡田 英明
小大橋 良作

苗太近藤 静雄

野村 野村
野村 野村
野村 野村
野村 野村

野 官

野口 榮男

(二・〇〇)

香 囃子

船 弁慶 (観世合用)

子衣輪 忠子
シテ木野 邦五
ワキ浅井 昇
ワキ田辺 博幸

大岡田 啓太郎
小山村 多喜男

苗太近藤 学明

田辺 野村
野村 野村
野村 野村
野村 野村

隅 田 川

森 春城

(二・五〇)

素 謡

二 人 静

フレ衣輪 衣子
シテ芥木 一枝

ワキ洗辺 尚子

野村 野村
野村 野村
野村 野村
野村 野村

川崎 野村
野村 野村
野村 野村
野村 野村

附 祝 言

終 演 一 三 三 〇 分

第二十五回 協和うとう会番組

昭和六十一年十一月一日(土) 二日(日)
於長浜 豊 公 莊

(第一日)

素 謔

トモ小松祥夫
ツレ川崎資定

シテ藪下尚夫

ワキ大森大陸

(木・観)

ツレ山家多喜男

シテ佐藤恒治

ワキ上森茂

(四・観)

トモ吉岡征都子
ツレ藤沢佐都子

シテ永富正人

ワキ永岡重信

督

連 吟

經

政

河高山健一郎
盛山幹一

小

督

山佐山口整次
田藤義之護

大佛供養

鶉 飼

大鈴木正三
長倉孝夫
高橋孝夫

藤

(第二日)

素 謔

シテ水滝彰一

ワキ山田義之
ワキツレ佐藤護

月

(研・宝)

子綴治義一郎
ツレ高山健一郎

シテ松本正

ワキ寺西正行

手

(防・観)

ツレ池田進
シテ岸田軍二

ワキ藤井祥孝

連 吟

松

虫

佐藤武平
上藤裕之
齊藤弘三
菊守悦夫
神田信三

小

督

鈴木資直
川崎正行

三

井

寺

寺西正行
松本正行
浅井邦器
木野邦器

清

經

鳥

(木・観)

シテ川村

実

ワキ野村忠亮

善 知

千 望 藤

鞍馬天狗

(富・鯉)

子三池公惠
前シテ管谷鉄也
後シテ立林鉄也

ワキ重田卓雄

敦安

宅

(天・鯉)

同山野
子八尾藤武惠
神田信和広平
磯上裕夫
菊部悦三
守武夫

ワキ瀬島常雄

(筋・鯉)

シテ藤井祥孝

ワキ中島博明

松小鍛冶

(富・宝)

嵐小

仕山舞

岸田軍二
富岡啓太郎

シテ平尾学

ワキ鈴木正美

(全・鯉)

ツレ西村淳

シテ富岡啓太郎

ワキ川崎資定

(終了午後六時)

天

土

蜘蛛

(宇・鯉)

トモ大上哲也
胡幾田登美子
類重原広
シテ加藤七弥

ワキ古谷正勝

(土・鯉)

シテ渡辺昇

ワキ林峯之

山

天

姥

(全・宝)

居離子
高橋孝夫

(大)富岡啓太郎
(小)大橋良作
(大)近藤学
(小)平尾

鼓

(全・鯉)

舞離子
西村淳

(大)富岡啓太郎
(小)磯部武夫
(笛)平尾学

附祝言

(終了午後二時)

協和うとう会番組

昭和六十二年十一月七日(土) 八日(日)
於 播州相生 あいおい莊

(第一日)

開演十二時三十分

鶴 龜

(東研・室)

素 謡

シテ山元一弘

ワキ河盛幹雄

小 督

(富士・室)

シテ平尾 小智大橋良作
ツレ近藤 明

土 蜘蛛

(本)

連 吟

トモ八尾和広
胡蝶渡辺尚子
類光野村忠亮
シテ小松祥男

ソキ藪下尚夫

三井寺 (塙)

佐山山水 藤口田滝 整義彰 護次一

紅葉狩 (宇部)

原大重 銭花 有紀 卓哲 司也 廣

二人静 (四日市)

緑木浅木 野井谷 静正 雄学昇敦

(第二日)

開演八時十五分

鶴 龜

(助舟)

素 謡

シテ内田和子

ワキ重村節子

賀 茂

(大要)

前ツレ野坂恵子
後ツレ木佐藤容子
前シテ神田信夫
後シテ神田信夫

ワキ菊守悦三

七 落

(本)

類義子 小川村松祥男
シテ安田辺博章

ワキ八尾和広

千 手

(宇部)

ツレ藤沢佐都子
シテ幾田登美子

ワキ永岡重信

紅 葉 狩

(四日市)

シテ上森 茂

ワキ藤田良裕 郎

仕 舞

岸田軍司 若月静人 富岡啓太郎

之 明 段政寺上盛 水松本一 原一 瓢

土 蜘蛛

(東研・室)

前シテ松本正行
後シテ寺西内弘 造
ツレ藤代欣也

ワキツレ河盛幹力 雄

井 葵

筒 (大阪)

素 謡

シテ上条佑蔵

ワキ瀬島常雄

上 (宇部)

ツレ永雷正人
シテ三谷哲雄

ワキ古谷正勝
ワキツレ吉岡征一

独 吟

花 雀

須治義延
須藤惠紀

雲 雀

大橋良作

放 雀

川崎資定

松 雀

山家多紀男

賴 雀

高橋孝夫

駒 雀

森 泰城

藤 雀

若月静人

葵

融

岸田軍司

卒都婆小町 (大阪)

磯部武弘之

通小町 (富士)

長倉孝夫

独 調

上 高橋孝夫
水原一歌

素 謡

母重村節子
五中原来佐明
十加米佐吉

小袖曾我 (附府)

野 宮 (觀世合間)

シテ浅井昇

ワキ木野邦器

終演六時

山

姥 (堺)

ツレ佐藤
シテ山田義之

ワキ山口整次

春

栄

舞囃子

望月美江

(大)富岡啓太郎

(笛)平尾学

融

西村 淳

(大)岡田英明

(笛)平尾学

附 祝 言

終演一時三十分

協和うとう会番組

昭和六十三年十一月五日(土) 六日(日)
於四日市湯の山 希 望 莊

—開演 午後一時—

(第一日)

竹生島

(本)

素 謹

蕨下尚夫
大森大陸

瀬島常雄

經政

(富士・室)

平尾 学

鈴木正美

小督

(四)

トモ山家多喜男
ツレ佐藤恒治
上森 茂

藤田良輔

連 吟

鐘之段

長倉孝久
高橋孝子

通小町

佐藤悦三
菊守武平

土蜘蛛

西野邦明
三宅隆夫

富士太鼓

植木節子
野村真由美

(第二日)

賀茂

(防)

龜谷和子

加来佐吉

邯鄲

(室)

錢谷秀夫

永富正人
古谷正勝

土蜘蛛

(門)

トモ胡蝶弘中吉雄
頼光植松武博
江藤弥生子

鳥田活志

紅葉狩

(研・室)

大内弘造
高山健一郎

藤代欣也
森英郎

柏崎

(本)

八尾和広

川村信夫
神田信夫

松富士太鼓

独 吟

大橋良作

木賊鼓
新井武純

磯部武夫

敦 半

(防)

(大)

藤

(四)

砧

熊

松

桜

雨

盛

部

戸

熊紅 狸花 紅清 弱

葉 葉 葉 葉

野 狩 々 月 狩 經 師

仕

ツレ木
シテ浅谷
井正
敷

小林 濱口 小好 松本 内田 岸田 富岡 啓太郎

藤沢 佐都子

竹林 実

坂 虫 川 月

山田 野口 佐藤 川崎 鈴木 木野 岸田 勝又 島森 立三 林池 鉄公 也

中原 博明

斎藤 弘之

ワキ水野 学

(終了予定 六時)

胡蝶

舞 雛 子

望月 美江

大富 橋良 啓太郎

近藤 尾

学明

紅葉狩

木谷 芙美枝

磯部 武夫 啓太郎

平尾

学

杜若

(富士・室)

近藤

明

大橋 良作

正尊

(櫻)

子 藤 義 師 和 山 野 田 水 義 瀧 彰 之 男 護 一

山口 整次

三井寺

(全親世)

藤沢 佐都子 西村 淳

富岡 啓太郎

祝言

第二十八回

協和うとう会番組

日時 平成元年十一月四日(土) 五日(日)
場所 大和市中心林間 大和六歌能舞台

(第一日) 午後十二時三十分開演

神歌 (全題)

素 謡
シテ新井 純
千歳西村 淳

竹生島 (富、宝)

シテ近藤 明
ツレ長倉 久子
ワキ中里 宜資

草子洗小町 (木、魁)

子小松 祥男
立衆岩瀬 厚夫
貫之藪 下尚夫
シテ大森 大陸
ワキ神田 信夫

大佛供養 (研、宝)

シテ松本 正
類森 英郎
ツレ大山 元弘
従山内 一弘
ワキ渡辺 大介

東 独 吟
北 高 山 健 一 郎
八 島 寺 西 正 行
連 吟
雲 林 院
山 山 口 整 一 次
水 滝 田 彰 一

(第二日) 午前九時 開演

小督 (防)

素 謡
トモ亀谷 和子
ツレ内田 和子
シテ重村 節子
ワキ原田 博彰

井筒 (木、魁)

シテ田辺 博章
ワキ川村 実

通小町 (大)

ツレ菊守 悦三
シテ磯部 武夫
ワキ斎藤 弘之

山姥 (富、宝)

シテ平尾 学
ツレ鈴木 正美
ワキ大橋 良作

田 村キリ 山 嶺 子

鶴 龜 山 野 順 三 山 家 多 喜 男

花 筐クルイ 水 原 一 敏 磯 部 武 夫

狸 々 高 橋 孝 夫 近 藤 明

船 弁 慶 若 月 静 人 大 岡 田 武 夫 明 笛 平 尾 学

松 虫 望 月 美 江 小 大 岡 田 良 作 明 笛 平 尾 学

野善(四)

知

宮

鳥

敦 盛 西仁佐 野木藤 邦 明 卓誠
菅之段 長倉 孝久 夫子
薪之段 河鍛 盛治 幹義 雄延

ツレ山家 多喜男
シテ木谷 正敷
シテ花田 有紀子
ワキ吉岡 征一
ワキ浅井 昇

夕(五)

顔

羽班之 衣 龜谷 かりか
笠之 女 内田 和子
猩々 三池 公惠
紅葉 小 林 好美
鶴葉 小 林 好美
鐘之段 連吟 勝又 荊枝
橋弁慶 島 森 登美代
松風 原 田 博隆 彰夫
錦木 永 古 岡 谷 重正 信勝
野岡 志 村 貞 夫
口地 貞 夫

シテ山田 蕨之
ワキ水滝 彰一

俊(四)

寛

成中 原 博明
シテ竹林 邦器
ワキ若月 静人

半

花

月

昭君 仕舞 富岡 啓太郎
嵐山 松本 正
玉之段 水原 一 瓢

木谷 芙美枝 小磯 部 田 武 英 明 笛 富 岡 啓 太 郎
西村 淳 大 高 橋 孝 夫 明 笛 富 岡 啓 太 郎

玉之段

松本 正城
森一 泰
水原 英 明
平岡 尾 学 明
山家 多喜男
山田 頌 志 子
三池 公 惠
大橋 孝 夫 作

羽(全、魁)

衣

安島 将 斎藤 弘之 富岡 啓太郎 近藤 学明
素 藤 部 武 夫 平 尾 学 明

松(舞、魁)

風

ツレ天野 美智子
シテ服部 幸 ワキ西谷 澄子

道成寺(全、主)

シテ水原 一 瓢 ワキ高橋 孝夫
ワキツレ岡田 英 城 明

附祝言

終了予定 十四時頃

平成二年十一月十日(土)十一日(日)

於 奈良 薬 師 寺

第二十九回 協和うとう会番組

第一日目 開演午後一時

鶴 亀 (富、宝)

シテ島田順一 ワキ中里宜資

土 蜘蛛 (塚、観)

子高田功三
ツレ土居銳一
類光野正美
シテ佐藤護
ワキ門林末男

橋 弁慶 (本、観)

子野村忠亮
トモ岡垣克則
シテ但見靖啓

千 手 (宇、観)

ツレ吉岡征一
シテ花田有紀子
ワキ古谷正勝

連吟
丸 川鈴村正直
之 段 川加原博佐明吉

花 月 (防、観)

素 諺
シテ原田博彰
ワキ三宅隆夫

三 井 寺 (本、観)

子渡辺尚子
シテ田辺博章
ワキ大森大陸
ワキツレ八尾和広

羽 衣 (富、宝)

シテ鈴木正美
ワキ近藤明
ワキツレ長倉久子

安 達 原 (宇、観)

シテ永富正人
ワキ永岡重信
ワキツレ銭谷秀夫

葵 上 (防、観)

ツレ内田和子
シテ杉山喜好
ワキ加米佐吉
ワキツレ中原博明

仕舞
丸 花田有紀子
若 内田和子
月 三池公惠

連調
衣 三池公惠
大橋久子
長倉久子

独吟
慶 寺西正行
花 松本正延
船 銀治義延
松 治義延

第二日目 開演午前八時半

素 諺

船弁

(大観) 慶

子高田功三
前シテ仁木邦明
後シテ西野邦明

ワキ菊守悦三
ワキツレ土居銳一

雨

(四観) 月

ツレ木谷正教
シテ浅井昇

ワキ佐藤恒治

桜川

独吟

幾田登美子

三井之

三池公忠

三谷哲雄

船弁

慶寺

立林鉄也

天鼓

連吟

山上森多喜茂
山家順三

三山

高橋森登美代

高橋孝夫

放下僧

高橋孝夫

高橋孝夫

通小町

(原観)

素謡
ツレ山田義彰一
シテ水滝彰一

ワキ山口整次

咸陽宮

(研定)

ツレ渡辺元香
シテ大内弘造

ワキ藤代欣也
ワキツレ山元一弘
大臣渡辺大介

狸々

(全観)

シテ新井純

ワキ富岡啓太郎

終了予定 午後六時頃

雨之段

連吟

貞永徳之納
西本秀夫
銭谷秀夫

屋進

独吟

浅原方平
磯部武夫

船橋

仕舞

富岡啓太郎
水原圭子
水原一菰

草子洗小町

雜子

山西村多喜淳
木谷芙美子
山家啓太郎

雲雀山

岡田英明
大橋良作
西村淳

盛久

浮

富岡啓太郎
高橋孝夫
平尾学

葛城

(全観)

シテ斎藤弘之
番雜子

富岡啓太郎
磯部武夫
平尾学

附祝言

終了予定 午後二時頃

第三十回記念

協和うとう会番組

平成三年十一月九日(土)十日(日)
於 山口防府 渡辺舞台

△第一日▽

正午開演

難

波

前ツレ 素 謡
後ツレ 吉岡 征一
花田 有紀子
古谷 正勝

岸田 軍二

鞍馬天狗

防府

後子 松崎 勝正
前子 岡 佐和子
加来 佐吉

竹林 実

大佛供養

大阪・堺

子方 八尾 和卓
ツレ 仁木 直三
立衆 高田 功末
前シテ 門林 武夫
後シテ 藤井 武夫

土井 鋭一

一三・一〇

羽

衣

島田 純一

平尾 幸三
矢尾 幸三

浮

舟

浅井 昇

木谷 正敦

善

知鳥

佐藤 山口 整次

水滝 彰一

△第二日▽

開演 午前八時半

小

督

素 謡
平尾 学
登田 了

村上 静雄

玄

象

師 齊藤 弘之
ツレ 藤沢 佐都子
菊守 悦三

山田 義之

大佛供養

門司

子方 滝下 晴次
ツレ 吉村 信次
立衆 藤田 善次郎
植松 武

江頭 博

通

盛

但見 晴啓
大森 大陸

田辺 博章

紅葉狩

宇部・観

西本 徳之

貞永 慶納
中川 慶次

一〇・三五

九州

高

仕 舞
砂 浅原 方平
経キリ 永岡 重信
風 花田 有紀子
丸 伊藤 りか
慶キリ 若月 静人
柳クセ 富岡 啓太郎
西本 徳之

防府

船

舟

防府 船

宇部

遊

行

宇部 遊

富士

遊

行

富士 遊

防府

遊

行

防府 遊

宇部

遊

行

宇部 遊

一四・二五

花

独吟
月(宇部)

加藤七弥

藤

户(四日市)

山家多喜男

松

風(九州)

大坪一弥

実

盛(防府)

森脇亮

笠

之段(宇部)

征一 永富正秀
永富正秀 信人夫

通

小町(防府)

杉山喜彰
原田博彰

藤

户(富士・室)

高桥孝夫
平尾学

安

達原(宇部)

三谷哲雄
幾田登美子

蒟

葱童(四日市)

山野順三
上野恒治
佐藤明

素

中里宜資

大橋良正美
鈴木正美

鶴

一五・三五

飼

(富士・室)

大原御幸

防府

池田節子
内重和子
内田和子

沢野忠男

木野邦博
中原博明

鶴

亀

富士・室

大尾幸三

長倉人子

(終了 十七時予定)

一一・三〇

東

北(夕七富士)

独鼓

駒

之段(富士)

高尾孝夫
平橋正美

長倉久子

薪

之段(富士)

大橋良作

班

女(富士)

望月美江
舞囃子

三富池公惠

平尾学

船

弁慶(防府)

内田和子

大富岡良作

西村淳

草子洗

小町(防府)

松岡佐代子

富岡啓太郎

平尾学

玉

髪(四)

木谷芙美枝

富岡啓太郎

平尾学

追加

全員

浅井淳昇
磯部武夫
西村亮
磯部亮

(終了 十二時半の予定)

協和うとう会のあゆみ

第31回から十年の足跡

安嶋 将

第31回
平成4年
(1992)

謡曲「杜若」ゆかりの地 知立の弘法大師のお寺で謡う

前年の第30回記念大会を防府市で開いた後、三十周年記念誌「うとう」の編集に取りかかり、この第31回間近の十月に発行した。記念大会までの余韻を胸に、また協和うとう会を盛り上げていこうというわけであった。

会場は、謡曲「杜若」(かきつばた)の舞台である知立市で協和発酵の関係会社の工場長を務めておられた平尾学さんが、地元でのお付き合いを通じて弘法大師が建てられたというお寺・遍照院の大広間を借りることができた。

ご住職夫人も謡曲を嗜んだことがあるということもあって、極めて好意的であった。

名古屋支社が地元ということ、当時支社食品所属の西野邦明さんが会場設営関係の事務を一手に引き受けた。同じ食品に「能面」を彫る田中源司さんがおられ、幾つかの作品のほか制

作過程がわかるように、制作途中のものやノミなどの道具も会場に持ち込んで展示した。

参加者は、OB社員、家族を含めた六十四人。番組のように三十二曲を謡い、舞い、囃す充実した会になった。第一日の最後は全観世による素謡「杜若」でシテ新井純さん、ワキ浅井昇さんであった。第二日は服部幸さんをはじめとする在京社員の夫人グループが参加して「千手」を謡った。

今回の会社補助は特別の配慮で五十万円を受けた。そのうちの半分を記念誌印刷代にあて、残りが交通費(後に補助対象から外される)・会場費・番組印刷費などの補助であった。記念誌は二百部作り、会員に一冊千円で頒布した。

注 番組は印刷後の変更を修正してありません。

平成四年十一月七、八日 開演午後一時始

第三十一回 協和うとう会番組

於 知立弘法山 遍照院

(第一日目)

素 謡

(富・宝)

加 茂

シテ中里 宜資
ツレ鈴木 正美

ワキ近藤 明

(塚・大)

小 督

トモ武居 泰生
ツレ藤沢 依都子
シテ佐藤 護

ワキ水 滝彰一

(防府)

善 知鳥

ツレ内田 和子
シテ加来 佐吉

ワキ原 田博彰

田 村

上山野 順三
上森家 多喜男
上森家 茂

ワキ藤 枝

鉢 ノ

望島勝 又
望島勝 美登美
望島勝 美登美
望島勝 美登美

ワキ藤 枝

枕 之

森山 主一郎

ワキ藤 枝

段

三岸 哲

ワキ藤 枝

天

鼓

仁土
野居
正泰
美生

(本・観)
高野物狂

子大 森大 陸
シテ 野村 忠 亮

ワキ 但見 靖 啓

(大阪)
景 清

トモ 藤井 武夫
ツレ 翰守 悦三
シテ 斎藤 弘之

ワキ 瀬島 常雄

井

独 吟

三池 公 忠

松

筒 虫

水滝 彰一

小

段 連 吟

木谷 正 敦

(富・宝)
土 蜘蛛

シテ 矢尾 幸三
トモ 頼光 大橋 良作
トモ 胡蝶 長倉 久美
トモ 望月 美江 子

ワキ 島田 純一

(親世合同)
杜 若

シテ 新井 純

ワキ 浅井 昇

第一日目終了予定午後六時

(第二日目)

素 謡

(堺)
三 輪

シテ 山田 義之

ワキ 山口 登次

(本・観)
土 蜘蛛

トモ 安島 和将
トモ 頼光 八尾 大和
シテ 頼光 森大 陸
シテ 頼光 森大 陸

ワキ 田村 直邦

(宇部)
山 姥

ツレ 三谷 哲雄
シテ 岸田 軍二

ワキ 古谷 正勝

笠 之

独 吟

岡田 英明 学

鉢 之

高橋 孝夫
三池 公 忠

四日市 山家 多喜男

笠 之

高橋 孝夫
長倉 久子

高橋 孝夫
長倉 久子

天 鼓

高橋 孝夫
長倉 久子

高橋 孝夫
長倉 久子

花 月

水原 圭子

水原 圭子

(四日市)
船 弁 慶

子山 野順三
ツレ 上野 森 茂

ワキ 西野 邦明
ワキ 西野 邦明

(OB夫人)
千 手

ツレ 服部 幸
シテ 河盛 迪子

ワキ 小池 方子

(宝生合同)
咸 陽 宮

大臣 鍛冶 義延
ツレ 大橋 良作
シテ 寺西 正行

ワキ 松本 春正
舞 舞陽 高井 春樹

清 經

舞 舞子
木谷 芙美枝
大橋 岡 啓太郎

富岡 啓太郎
大橋 良作

吉野 天人

内田 和子

岡田 武夫
岡田 武夫

羽 衣

望月 美江

岡田 武夫
岡田 武夫

附 祝 言

磯部 武夫

磯部 武夫

(終了予定午後二時頃)

第32回
平成5年
(1993)

神前で謡い舞う
椿大社に熱演を奉納

第21回以来の神社での開催となつた。毎年の会場探しなどの世話役を務めている四日市グループが、いわばお膝元の格好の会場として椿大社(おおよし)を選んだことは自然な流れだったといえる。ところが、さらに四日市工場にこの氏子さんである辻忠和さんがおられたのである。辻さんのお骨折りもあつて会場使用については、いろいろと好意的にしていた。辻さんには夜の懇親会に清酒を差し入れていただいたうえに、会場からは「千円未満は切り捨てさせていただきます」というご配慮を頂戴するほどに「顔」がきいていた。「熱演奉納」のご利益であつた。

子と例年に変わらぬ内容であつた。第一日は全観世の素謡「野宮」(シテ西村淳さん、ワキ富岡啓太郎さん)、第二日は全宝生の素謡「三井寺」(シテ平尾學さん、子方長倉久子さん、ワキ鈴木正美さん、ワキツレ近藤明さん)で締めくくつた。二日間を総括する打ち上げは、恒例の三本締めにて代えてご神前での「二礼二拍一礼」で締めた。後日、月刊誌「観世」(檜書店発行)に、この会の写真二枚を添えて「協和とう会」の紹介記事を寄稿することになった。土浦市で開かれた謡曲の会で、富岡啓太郎さんが檜書店の方とお会いしたことがその発端であつた。その原稿の「執筆指令」が事務局の安嶋将に下り、次ページのような記事となつた。そして、この記事が翌年の能舞台でとうとう会開催へとつながつたのであつた。

平成五年十一月十三日(土)〜十四日(日)

第三十二回 協和とう会番組

於 三重県 椿大社

(第一日) 開演午後一時始

素謡

高砂 (本・観)
ツレ八尾和正直
シテ鈴木正直
子大倉佐都子
ツレ藤沢武居泰生
高砂 但見晴啓

大仏供養 (大)
独吟
葛 三池公志
虫 山田義之
花 菊守悦三
鼓 山家多喜男
段 安島将
連吟

(富・宝)
(大) 鞍馬天狗 仁木鏡一
(大) 江口 藤沢佐都子
加藤弥生子

橋弁慶 (富・宝)
子矢尾幸三
シテ島田純一
ツレ中里宜資

(四) 羽衣舞 小畑真子

『観世』誌 平成六年二月
号掲載記事

「協和とうとう会」

三十二年の歴史刻む

協和発酵工業㈱の現役社員・OB、そしてその家族の謡仲間が東は茨城、西は福岡から、毎年一回、七、八十人集う「協和とうとう会」は、平成五年で32回を重ねました。昭和35年7月に発足して以来、観世流・宝生流合同で運営してきました。

当初は一日だけの会でしたが、第12回以来二日間にわたる開催となり、これだけの規模で宿泊つきの会場探しが大変です。参加者が前記のほか東京・静岡・愛知・三重・大阪・京都・山口からきますので、特別なことがない限り中部・関西地区に会場を求めるところにしています。たとえば、奈良・薬師寺、滋賀・三井寺法泉院、静岡・可垂齋、滋賀・多賀大社、三重・椿大社などのお寺や神社、または、各地の国民宿舎で催してきました。平成元年は、会の創設者の一人である水原一瓢さん（宝生流能楽師・会社OB）が、自宅に能

舞台（大和六瓢能舞台）を造られたことから神奈川県での開催となりました。

二十周年と三十周年の記念大会時には、記念誌「うとう」を発行して、会の歴史や全会員の近況紹介を行っています。ちなみに「うとう」は、謡う、打とう、にかけたもので、謡曲「善知鳥」と同じ発音です。

会の模様は、素謡に始まり独吟・連吟・仕舞・独鼓一管・一調・連調・舞囃子・番囃子と、二日間にわたり熱演が続きます。初日の夜は、懇親会と申合せでこれまた盛り上がりです。

囃子の方も笛・鼓・大鼓（おおかわ）・太鼓と会貞の中で揃います。観世・宝生合同です。で、囃子方は二番続いたり、次に素謡の役や地頭が続くといったことも珍しくありません。

また、会員と会員以外の社員に能面を打つ人がいて、会場に完成した作品のほか制作途中のものを持ち込んで、展示してくれたりしています。しかし、残念ながら、その面をかけて舞った会員はまだおりません。

会員の中で、能舞台・能面・囃子方が揃うわけですから、これを会の一つの誇として、精進を続けています。

俊(宇)

(四) 鶴
(塚) 程
(四) 笠

寛之

上 森 茂
山 田 義 之
山 家 多 喜 男

段 古 谷 正 勝
吉 岡 征 一
岸 田 軍 二

三 谷 哲 雄

七(四)

騎 落

落

上 藤 恒 治 茂
子 佐 木 宏 一 郎
子 上 藤 恒 治 茂
子 上 藤 恒 治 茂

山 野 順 三

狸(宇)

々 々

々 々

吉 岡 征 一

浜 田 紳 一 郎

野(観世合同)

宮

西 村 洋

富 岡 啓 太 郎

土(土)
兼(本・観)

蜘蛛

平 蛛

素 謡
飯 島 重 次
松 尾 英 毅
明 彦 保 伸 篤
久 保 正 祐
木 兼 正 祐

笠 井 義 晴
笠 井 義 晴

望

大 森 大 陸
西 村 富 岡 啓 太 郎

藤 田 良 輔

(第二日)

第一日終了予定午後六時

(四) 夕

顔

(木) 鶴

シテ木谷正教
一 管 富岡啓太郎
フキ水野 学

(防) 花

独 吟 原田博彰

(富) 融

大橋良作

(四) 隅

流井昇

(大) 花

磯部武夫

(木) 屋

一 調 磯部武夫

(木) 野

島 富岡啓太郎
磯部武夫

(木) 半

華 宮 西村 洋
富岡啓太郎

(界) 玄

象

(宇) 弱

法師

(宝) 紅

葉狩

(四) 小

督

(宝) 三

井

(宝) 寺

附祝吉

第33回
平成6年
(1994)

能舞台の後は保津川下り
うとう声 紅葉の紅もさかんなり

この年四月下旬発信の開催案内に「昨年とう会の後すぐに今年の会場探しに入り、めざす醍醐荘が結婚シーズンで無理とわかり、さて」と思っているところに磯部さんが『観世』に掲載された協和とう会の記事をお話したことからトントンとお話展開し、めったに使えない会場で」とある。名前のとおり大本教の総本山であり、能舞台が二つもあって、とう会には奥まった別館の大広間の舞台を借用できた。大本教の研修生という形で舞台使用・宿泊するため、二日目の朝は全員が大講堂で毎朝行われる「お勤め」を信者の方々と一緒に終えてから朝食をとった。

外界との関係をまったく断つたような会場で、全観世の番囃子「小督」のほか、素謡十三番、舞囃子・仕舞・連吟など例年のとおりの賑わいであった。これまでの番組は活版印刷ですべて外注であったが、今回は磯部さんがワープロ自宅作業で印刷原稿を作り、その印刷だけを外注して経費節減をはかった。また、この本格造りの舞台ならではのエピソードもあった。切戸口の引き戸が長年の使用のためその敷居とともに相当に磨り減っており、開け閉めがたいへん重かった。私(安嶋)が洗面具に石鹸を入れていたのを思い出し、それを摺り込むように塗って大分軽くなった。しかし開け閉めする進行係の杉山喜好さん(防府)には「苦勞をかけた。亀岡からの帰路は、紅葉の保津川沿いにトロッコ列車で嵐山まで下った。これも磯部さんのご尽力により、この観光シーズンに希望者四十八人の指定席が確保できた。車窓から眼下の急

流を下る舟に歓声を挙げながら
「保津川下り」を楽しんだ。
見出しの「うとう声紅葉の紅
もさかんなり」は、謡仲間の望

月美江さん(富士グループ)が三
島市から打ってくださった祝電
の一節であった。

第三十三回

協和うとう会番組

(第一日目) 開演 十二時三十分
平成六年十一月十二、十三日
於 亀岡 大本 春陽殿

住吉詣

(本観)

子 素 謡
惟光 田村 直邦
光源氏 八尾 和廣
ツレシテ 但見 博章
ツレ(幸) 木暮 正祐
ツレ(五郎) 飯島 重治
シテ 松尾 英毅
子 藤沢 佐都子
シテ 武居 春生
ワキ 藪下 尚夫

小袖曾我

(土浦)

子 藤沢 佐都子
シテ 武居 春生
道 吟
征井 義晴
須藤 忠紀
菊守 悦造
藤井 武夫
安島 将
藤田 良輔
鈴木 正美
近藤 明
藤沢 佐都子
加藤 弥生子
竹林 実
板村 政雄

邯鄲

(大阪)

竹生島 (土浦)
三井寺 (大阪)
蟬丸 (本観)
鐘之段 (宝生)
大原御幸 (大阪)
融 (防府)

船橋

(四日市)

素 謡
木谷 正教
浅井 昇
ワキ 山家 多喜男

鶯之段

(富観)

三池 公忠
木野 邦器
高橋 孝夫
大橋 良作
森脇 亮

山姥

(宝生)

高橋 孝夫
大橋 良作
森脇 亮

砦

(防府)

森脇 亮

羽衣

(四日市)

山家 多喜男
浅井 昇
津崎 展子

富士太鼓

(大阪)

磯部 武夫
加藤 弥生子

蟬丸

(四日市)

浅井 昇
上森 茂
山家 多喜男

勸進帳

(一)

西村 津
磯部 武夫

雨月

(宇部)

吉岡 征一
岸田 軍二
ワキ 古谷 正勝

葵上

(本観)

八尾 和廣
藤田 良輔
ワキ 大森 大陸
ワキツレ 但見 晴啓

大江山

(本)

舞 淳
西村 淳
花田 有紀子

松虫

(宇)

永岡 重信

巻絹

(宇)

永岡 重信

笹之段 (防府) 内田 和子

玄象

素 木野 邦器 謡
ツレ 板村 政雄 勇治
ワキ 竹林 実

土蜘蛛

シテ 中里 宜資
頼光 八尾 幸三
ツレ 胡蝶 野村 博子
長倉 久子
ワキ 大橋 良作

(第二日目) 開演 午前九時予定

巻絹

素 佐藤 謹
ツレ 水滝 彰一
ワキ 山口 整次

井筒 (宝生) 連

吟 久子
長倉 孝夫
高橋 孝夫

弱法師 (宝生)

平尾 健一郎
高山 学

竹生島 (本観)

西野 邦明
巽 俊一
田村 直邦

熊野

素 内田 和子 謡
ツレ 重村 節子
ワキ 浜田 伸一郎
ワキ ツレ有本 勝

通小町 (防府)

仕 舞舞 亮
森脇 亮

頼政 (富観)

富岡 啓太郎

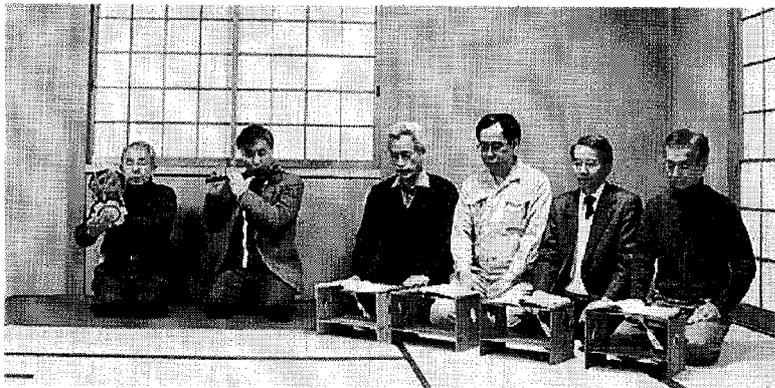
土蜘蛛 (四日市)

素 山家 多喜男 謡
トモ 津崎 辰子
胡蝶 山野 順三
頼光 網野 正美
ワキ 上森 茂

わか謡曲部 稽古風景

細く長くのびてまっせ

堺工場謡曲部



堺工場謡曲部として「協和とう会」に参加したのは、昭和四十三年の第7回からである。

その後数回の不参加があるものの、福島得先生(故人)、現在は磯部武夫先生のご指導のもと、部としての活動を続けています。

お稽古は、毎週木曜日、社員クラブ「うりの荘」で行っており、写真は、左から磯部武夫先生(小鼓)、村上静男さん(元宇部工場、現千代田開発、笛)、網野政美・水滝彰一・山田義之さん、そして藤井武夫さんである。村上さんは、笛のお稽古のために最近より参加いただいたおり、氏の笛に対する熱心さには他の一同大いに影響を受けている。写真の稽古風景は、近々こうありたいという願望が込められたものである。

磯部先生からは、情景や登場人物に合わせた謡、また謡の拍子・テンポについて何時も注意をされるが、なにせ予習復習どころか、お稽古の参加もままならない面々にとつて、ひたすら棒読みのうたいが常である。部としては、細々とした活動ではあるが、それだけ息長く、秋の「とう会」と春の「中謡会(一昨年二十周年を迎えた)」には、(たとえ練習不足ではあろうとも)参加し続けようとひそかに決意をしている次第である。(水滝彰一)

第34回
平成7年
(1995)

「養老」ゆかりの地で
故水原一瓢さんを偲ぶ

この年二月、協和うとう会の重鎮の一人である水原一瓢さんが亡くなられた。このため、今回の会場には「六瓢能舞台」も候補にあがったが、四月に交誼会(協和うとう会関東版)をここで「水原一瓢師追善」の会を開いたことほかの事情から、地理的条件などを考慮した通常の会場探しで謡曲ゆかりの「養老」

の地となった。グリーンハイツ養老は「国民年金保養センター」の一つで、年金受給者は宿泊料が割引されるといいうれしい施設であった。参加者は五十一人であった。水原一瓢さんを追悼する曲が全宝生の素謡「鶉飼」をはじめ「清経」「玉葛」「井筒」「融」などを謡い、懇親会では

舞 雛 子
草(野生) 洗 望月 美江 岡田 三池 英明 平尾 学
トモ 山田 義之 番 雛 子
ツレ 木野 邦器

小 督 (全親世)
シテ 安島 将 ワキ 水滝 彰一 富岡啓太郎 磯部 武夫 平尾 学

俊 寛 (全宝生)
シテ 平尾 学
春 近藤 正美
成 鈴木 正美

三 笑 (本親)
ツレ(海老) 富岡 啓太郎
ツレ(海老) 西村 淳
シテ 新井 純

附祝言

水原夫人の圭子さんのお話しもいただき、謡仲間であり師でもあった水原さんを偲んだ。ご当地の「養老」は、第一日の最初に本社観世グループがシテ但見靖啓さん、ツレ藤田良輔さん、ワキ八尾和廣さんで語った。よく働く孝行息子が山中で酒の泉を見つけそれを汲んで帰って酒好きの老父を養ったという伝説の「養老の滝」が会場から近く、朝の散歩がてら行つて来たという人もいた。ただし、閉会後に養老駅までのタクシー乗って「養老の滝を見たいので

回ってくれませんか」と頼んだところ、行楽シーズンとあつて滝への道路が渋滞しており「養老の滝を見たいなら平日に来なさい」と笑われ「幻の滝」となった。今回の会計報告には、「昨年

第三十四回 協和うとう会番組

(第一日目) 開演 午後一時

平成七年十一月十一、十二日
於 岐阜グリーンハイツ養老

(本親)	老	ツレ 藤田 良輔	ワキ 八尾 和廣
(防府)	清 経	ツレ 重村 節子	ワキ 内田 和子
(宝生)	玉 葛	シテ 平尾 学	ワキ 近藤 明
(大阪)	花 筐	ツレ 藤沢佐都子	ワキ 藪下 尚夫
	頰 政	シテ 加藤弥生子	ワキツレ 藤井武夫
		独 吟	木谷 正教

巖野
草子洗小町
連吟
田辺 博章
三池 公忠

鶺鴒之段
中里 宜資
矢尾 幸三

班女
古賀 勇治
竹林 実

駒之段
八尾 邦明
和廣

小督 (四日市)
トモ 浅野由更江
ツレ 津崎 展子
シテ 山野 順三

ワキ 網野 正美

紅葉狩 (宝生)
ツレ 長倉 久子
シテ 野村 博子

ワキ 矢尾 幸三
ワキツレ 中里宜資

草子洗小町
連吟
重村 節子
内田 和子
唐本佳代子
長倉 久子
高橋 孝夫
大橋 良作
近藤 明

井筒
高橋 孝夫

松風
大橋 良作
近藤 明

百万
藤井 武夫
門林 末男
平尾 学
高山健一郎

笠之段
武居 泰生
山田 義之
河瀬 馨

正尊 (全観世)
起請文
子 内田 和子
姉和 田辺 博章
義経 岸田 軍二
シテ 磯部 武夫

ワキ 安島 将

(第二日目) 開演 午前八時三十分

通小町 (四日市)
素 謡
ツレ 上森 茂
シテ 山家多喜男

ワキ 浅井 昇

紅葉狩 (土浦)
ツレ 須藤 恵紀
シテ 松尾 英毅

ワキ 笹井 義晴

屋島
独吟
藤田 良輔
富岡啓太郎

四季
舞
永岡 重信

敦衣
唐本佳代子
内田 和子
花田有紀子

羽筒
子

井院
富岡啓太郎
加藤弥生子

松風 (防府)
ツレ 古賀 勇治
シテ 瀬島 常雄
ワキ 竹林 実

山姥
高橋 孝夫
近藤 明

松虫
富岡啓太郎
磯部 武夫

五葛
水原 圭子
森脇 亮
富岡啓太郎

融羽
子 花田有紀子
シテ 岸田 軍二

三井寺 (宇部)
ワキ 永岡 重信
ワキツレ 古谷 正勝

善知鳥 (塚)
ツレ 山田 義之
シテ 山口 整次
ワキ 水滝 彰一

羽衣
大橋 良作
富岡啓太郎
三池 公忠
近藤 学
平尾 学

鶺鴒飼 (全宝生)
シテ 鍛冶 義延
ワキ 松本 正
ワキツレ 河盛 幹雄

附祝言

(終了予定午後二時三十分)

第35回
平成8年
(1996)

35年で新時代へ

初の狂言謡と親子共演が実現

会場は四日市グループのお膝元の一つで、「厚生年金ハートピア長島」が正式名称。木曾川と長良川に挟まれた立地で、いわゆる長島温泉より上流に位置するがここにも温泉が湧き神経痛・腰痛・肩こりなどに効果

があるという。名前が示すように年金受給者は割引がきくので、事前に調査したところ参加者四十九人のうち十五人が該当し、うとう会の高齢化を証明することになった。番組の編成からワープロ人力

第三十五回

協和うとう会番組

平成八年十一月十六日(土) 十七日(日)
於 三重県長島町 厚生年金ハートピア長島

(第一日目)

素 謡
子 谷崎 純子
立衆 上森 茂
草子洗小町 買之 網野 政美 展子
(四日市) シテ 津崎 展子
東 (本社) シテ 田村 直邦
鶴 (防府) シテ 木野 咲百合
連 吟
三井寺 三井寺 俊 寛
隅田川 隅田川 平尾 健一 学延
高山 高山 竹林 常治 実
瀬加藤 瀬加藤 彌生子 常治 常治
山田 山口 山口 義彰 整次
水滝 水滝 義彰 整次
景 清

まで一手にやってこられた磯部武夫さんの技術がますます向上して、印刷屋が楷書体の活字で組んだものと全く区別がつかない出来映えの番組になった。四十番を超える会の内容は番組のとおりであるが、うとう会初めての狂言謡「小舞」が西村淳さん(本社)の精進によつて演じられた。このために本社グループの面々に前もつて特訓が行われていた。

加・共演が二組もあった。富士グループの三池公恵・曜子さん母子、防府グループの木野邦器・咲百合さん父子で、これまでに何組かあった夫婦参加の幅を広げ、うたい文句の「協和の現役・OB・家族の謡仲間が集う」協和うとう会ならではのことであった。舞台は施設の一番奥の大広間であったが、一般の滞在客がその音声に誘われてお連れとともに聞き入ってくれた。

歌 占

船弁慶

子 西野 邦明 浅井 恒治
シテ 松尾 英敏
ワキ 田辺 博章
ツレ 須藤 忠紀

定家

シテ 花田 有紀子
ワキ 岸田 軍二

善知鳥

ツレ 内田 和子
シテ 島田 活志
ワキ 竹林 実

山姥

高橋 孝夫 三池 公恵
大橋 良作 中里 宜資
平尾 学

枕の段

富岡啓太郎 (大) 西村 洋

山姥

高橋・大橋 三池 曜子
近藤・矢尾 丸山 和美

羽衣

シテ 中里 博子 三池 矢尾 幸三
野村 博子

鞍馬天狗

子 野村 博子 三池 矢尾 幸三
シテ 中里 博子

松風

ツレ 浅井 昇 瓦キ 磯部 武夫
シテ 森崎 亮

仕 舞

熊 野

邯 鄲

天 鼓

居 離 子

胡 蝶

舞 離 子

紅葉狩

井 筒

百 萬

(土浦)

隅 田 川

(防府)

猩 々

(全宝生)

(土浦) 田辺 博幸

(宇部) 西本 徳之

(富士) 野村 博子

(大) 富岡啓太郎 (太) 近藤 学明
(小) 三池公恵 (笛) 平尾

(大) 富岡啓太郎 (笛) 平尾 学
(小) 加藤弥生子

(大) 富岡啓太郎 (笛) 西村 淳
(小) 磯部武夫

ワキ 須藤 忠紀

子 木野咲百合
シテ 潮島 常雄

ワキ 杉山 喜好
マツシ 浜田 紳一郎

シテ 高橋 孝夫

ワキ 平尾 学

(終了予定 十四時頃)
(解散予定 十五時頃)

第37回 平成10年 (1998)

琵琶湖を望む大津の会場
念願の竹生島詣も実現

会場の住所が「唐橋町」とおり、「瀬田の唐橋」から琵琶湖に注ぐ瀬田川のほとりという会となった。参加グループは、北は土浦から南は防府までの話仲間であったが、総勢四十人となった。

琵琶湖といえは謡曲「竹生島」とあって、富士宝生グループの素謡がトップを飾った。また「三井寺」もご当地番組で防府グループが二口目に素謡を謡った。

会場には知立市の第31回に自作の能面や面打ち道具などを持ち込んで紹介してくれた名古屋

支社の田中源司さんの遺作がいくつか掛けられた。田中さんは少し前に現役のまま病魔に倒れたのであった。

山寺があり、二日目の早朝の時間を利用して訪れたり、打ち上げ後にゆつくり楽しむグループもあった。さらに、会場にもう一泊して、翌日は船で竹生島詣でしたグループもあった。

第三十七回 協和とう会番組

平成十年十一月二十一日(土)二十三日(日)
於 滋賀県大津市唐橋町二十三番三
滋 賀 県 青 年 会 館
TEL 0775-13712753
FAX 0775-13712756
(第一日) (開演 十三時)

竹生島

素謡
シテ 矢尾 孝三(欠) 近藤明
ツレ 加藤 忠理

ワキ 森田 英基

草子洗小町

子 内田 和子
立兼 竹林 実
ツレ 浜田 紳一郎
シテ 藤井 祥孝

ワキ 加来 佐吉

善知鳥

ツレ 西野 邦明
シテ 松尾 英毅

ワキ 須藤 忠紀

放下僧

ツレ 山家多喜男
シテ 佐藤 恒治

ワキ 浅井 昇

山姥

独 富岡啓太郎
独 吟

太鼓 西村 淳

丸

独 田辺 博幸

頼政

(四日市)

山家多喜男

安島 将

野宮

(本社)

磯部 武夫

舞

起請文

(大阪)

西村 淳

田辺 博章

源氏供養

(親世)

田

田辺 博章

船舟慶

(宝生)

大 富岡啓太郎

小 三池 公惠

菊慈童

(本社)

独吟独調

西村 道子

鶴亀

(土洲)

シテ 曾田 道久

太鼓 西村 淳

巴寛

(防府)

シテ 島内田 裕徳

ワキ 須藤野穂(配)

俊寛

(全親世)

成 山田 義之

康 藤田 良輔

安達原

(四日市)

シテ 網野 政美

シテ 富岡啓太郎

景清

(堺)

トモ 藤井 武夫

ツレ 加藤弥生子

三井寺

(防府)

子 内田 和子

シテ 古賀 勇治

駒之段

(四日市)

連 吟

谷崎 純子

津野由見江

田村

(防府)

瀬島 常雄

竹生島

(防府)

加来 佐吉

通小町

(宝生)

浜田 伸一郎

獅子

(本社)

高橋 孝夫

西王母

(宝生)

平尾 孝三

巴

(親世)

西村 淳

羽衣

(親世)

舞 獅子

松風

(本社)

大 富岡啓太郎

紅葉狩

(全宝生)

小 三池 公惠

附祝言

シテ 藤田 良輔

大 富岡啓太郎

シテ 平尾 孝三

ツレ 加藤 惠理

小 加藤弥生子

シテ 内田 和子

シテ 但見 晴啓

大 富岡啓太郎

シテ 加藤 惠理

シテ 加藤 惠理

大 磯部 武夫

シテ 加藤 惠理

シテ 加藤 惠理

大 磯部 武夫

シテ 加藤 惠理

シテ 加藤 惠理

大 磯部 武夫

シテ 加藤 惠理

シテ 加藤 惠理

大 磯部 武夫

シテ 加藤 惠理

シテ 加藤 惠理

大 磯部 武夫

富士を遠望する藤枝に
門司から土浦までの謡仲間

今回の会場は上森茂さん(四日市グループ)の努力で決まった。建物は「エミナス」の名前が示すように丘の上に建つ眺望のよい近代建築で、国民年金健康センターであった。富士山が遠望できて、「羽衣」の三保の松原や次郎長の清水港などに近く、物語の多い駿河の国でのうとう会となった。

参加者は、西は門司から島田活志さん、北は土浦の松尾英毅・曾田道久・小林誠さんと、全国規模で四十五人であった。うとう会の歴史が長くなると、かつての謡仲間が全国あちこちにおられ、今回は藤沢市から高野(現永山)正子さん(元東研グループ)が家族旅行を兼ねての参

協和うとう会番組

第三十八回
平成十一年十一月十三日(土)〜十四日(日)
会場 藤枝エミナル
藤枝市南駿河台六〇一―一
TEL 0541645117 17
第一日目 (午後一時間演) 時間厳守

素謡
鶴 (宝生)
鯛 シツレ 中里 宜資
シテ 矢野 幸三
ワキ 加藤 忠理

加で、狼吟「葵上」を謡った。また今回も夫婦で参加の西村淳・道子夫妻(本社グループ)は、全観世の素謡「安宅」のシテ(辨慶)と子方(義経)を務めた。その夜の懇親会では、家庭でも「いかに淳」「御前に候」という場面があるのではないですか、などと話題にされた。毎回のことであるが、磯部武夫さん(大阪グループ)が地謡の省略箇所を詳しく記した資料を作ってください。今回もその末尾に「地謡は、地頭の謡にしっかり合わせるように心掛け……お役の稽古以上に地謡のお稽古をして……」と地謡の心得を説いてあった。

わが謡曲部
稽古風景

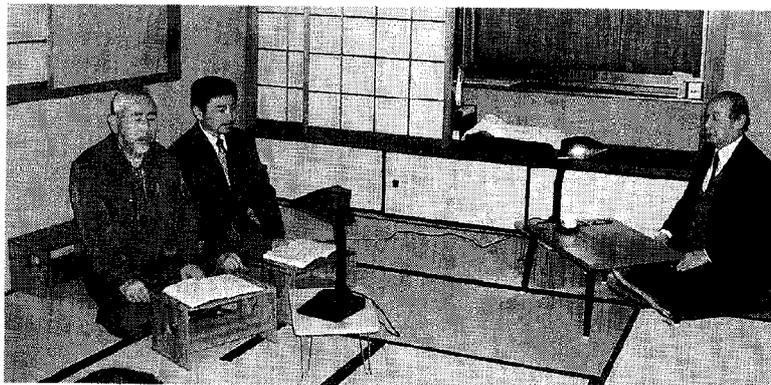
現役・OBが多彩な活動

四日市工場謡曲部

四日市グループは名古屋を含むグループであり、春の中謡会、秋のうとう会に向け各自練習に励んでいます。工場謡曲部では、それぞれの会が近づくに研究所入口会議室で練習が始まり、さ



写真左から前列山野・上森・緑、後列浅野・津崎さん



写真右から藤波先生、上森・山家さん

らに近づくに従業員クラブでの練習、浅井さん、山家さんを迎えておさらいをし、年二回の会に望むといった練習が常となっていました。ところが今回四十周年記念誌原稿依頼を期に、緑さんが練習を再開され初心謡本

実盛 (宇部) シテ 西本 徳之
ワキ 岸田 軍二
ワキツレ 古谷 正勝

恋重荷 (大阪・堺) ツレ 山田 義之
シテ 磯部 武夫
ワキ 水滝 彰一

玉鬘 (防府) シテ 重村 節子
ワキ 内田 和子

田村 仕 舞
森田 英基

雲林院 (クセ) 永富 正人
班女 (舞アト) 内田 和子
松虫 (キリ) 西本 徳之

玉之段 独吟・連吟
綱野 政美
藤井 武夫

羽衣 藤井 祥孝
加来 佐吉

小袖曾我 独鼓・連調
洪田 紳一郎

俊寛 磯部 武夫
加藤 弥生子

藤戸 高橋 孝夫
三池 公恵
三池 公恵
中里 曜子
加藤 忠理

通小町 (本社) ツレ 但見 靖啓
シテ 藤田 良輔
ワキ 八尾 和広

邯鄲 (防府) シテ 島田 活志
ワキ 竹林 実
ワキツレ 浜田 紳一郎

蝉丸 (四日市) ツレ 津崎 展子
シテ 山野 順三
ワキ 上森 茂

安宅 (全親世) ツレ 西村 道子
シテ 岸田 軍二
ワキ 水滝 彰一

終了予定午後六時

上から順番に練習しようということ、会に関係なく会議室利用率が急上昇中であり、四日市が誇る女性群(二名退職)も結婚により現在休止中。何とか新人をと考え、従業員を対象に四日市能鑑賞会を年一回企画し環境づくりを努めています。なかなか新メンバーの獲得には至っていません。

その他、名古屋の木谷芙美枝さんは坂井音重先生に師事、稽古を続けておられるとともに、名誉師範として指導もされて、昨年から中謡会にはお弟子さんとご一緒に参加いただき、

人数が減少気味であった中謡会が活気を取り戻しました。浅井・山家さん、上森は、藤波重和先生に昭和六十一年から師事、毎月一回先生の稽古と藤波清光会のメンバーとして、三重県観世流謡曲大会などに参加。山家さんは幸清流小鼓の稽古を再開され熱田能楽堂での発表会など多忙です。佐藤さんは名張で、水野さんも四日市の会に所属しそれぞれ練習に励んでおられます。OBますます元氣。工場謡曲部としては新メンバー獲得を目標に頑張っています。

第二日目 (八時三十分開始)

雲林院 (四日市) シテ 山家 多喜男
ワキ 浅井 昇

三井寺 (土浦) 子 西野 邦明
シテ 松尾 英毅
ワキ 曾田 道久
ワキツレ 小林 誠

小督 (大阪・堺) トモ 綱野 政美
ツレ 加藤 弥生子
シテ 田村 直邦

獅子 西村 淳

花篋 独吟・連吟
田辺 博幸

西行桜 藤下 尚夫

松風 安島 晋

遊行柳 浅井 昇

弱法師 高橋 孝夫

一 調
駒之段 西村 淳 磯部 武夫

胡蝶 未定 近藤 曜子
三池 公惠 三池 曜子

梅 (宇部) シテ 花田 有紀子 ワキ 水富 正人

經 (宝生) シテ 平尾 学 ワキ 中里 宜資

附祝言

終了予定正午

第39回 平成12年 (2000)

六年振りの京都に36人 次回記念大会の構想練る

会場は第33回の亀岡市以来六年ぶりの京都府になった。今回も四日市グループがアンテナを張り巡らして探した所であった。今回も宇部グループが地元の先生の会とぶつかり不参加となった。このため参加者は三十六人となり、うとう会初期のころの規模になった。

しかし、すごく熱心でタフな参加者がいた。所用のため第一日を欠席した富士グループの中里宜資さんで、夜行バスを利用して早朝に会場へ駆けつけ、こ

の日に二番目の素謡「鞍馬天狗」のワキを演じた。

番組は第一日が全観世流の素謡「玄象」、第二日は全宝生の番囃子「狸々」で締めくくった。次回が第40回の記念大会になることから、打ち上げではそれが話題の中心になった。会場を故水原一瓢さんの「六瓢能舞台」を第一候補にして、十一月二十三・二十四日に開催する、出来るだけたくさんの方の参加を呼びかける、四十周年記念誌を発行することなどを確認した。

第三十九回

協和うとう会番組

平成十二年十一月十八日(土)十九日(日)
会場 京都厚生年金休暇センター
京都府京田辺市多々羅 077-4162-1350

第一日目 (午後一時間演) 時間厳守

素謡

大仏供養 (防府) 子 浜田 紳一郎
ツレ 内田 和子
シテ 藤井 祥孝 ワキ 加来 佐吉

籠 (四日市) シテ 山野 順三 ワキ 上森 茂

班 (本社) 女 シテ 藤田 良輔 ワキ 八尾 和広
独吟・連吟 ワキ ツレ 西野 邦明

笠之段 三池 公惠

鶺鴒 浜田 紳一郎

大原柳幸 ロンギ 田辺 博章

紅葉狩 高橋 孝夫
平尾 学 加来 祥吉

船弁慶 西村 道子
前後之替 西村 啓太郎
津

薪之段 大橋 良作
中里 宜資
加藤 曜子
三池 公惠

黒塚 森田 英基

歌占 富岡 啓太郎

藤戸 (大阪・堺) シテ 瀬島 常雄
ワキ 水滝 彰一
ワキツレ 藤井 武夫

半蔀 (全宝生) シテ 岡田 英明
ワキ 平尾 学

玄象 (全観世) ツレ 山家多喜男
シテ 加藤弥生子
シテ 磯部 武夫
ワキ 四辺 博章

第一日終了予定十七時半頃

第二日目 (八時三十分開始)

経正 (土浦) シテ 小林 誠
ワキ 大森 大陸

鞍馬天狗 (富士) シテ 加藤 忠理
ワキ 中里 宜資

絹 (大阪・堺) ツレ 網野 政美
シテ 山田 義之
ワキ 田村 直邦

一管 西村 淳

独吟

願書 富岡 啓太郎

定家 浅井 昇

雨月 安島 将

独鼓

弱法師 高橋 孝夫
三池 公恵

雛子

小督 富岡啓太郎 西村 淳

野宮 磯部 武夫 平尾 学

松虫 (四日市) シテ 佐藤 恒治
ワキ 山家多喜男

融 (防府) シテ 浜田 紳一郎
ワキ 竹林 実

安達原 (本社) シテ 但見 靖啓
ワキ 藤下 尚夫
ワキツレ 大森 大陸

舞獅子

紅葉狩 内田 和子 富岡啓太郎 平尾 学

番獅子

猩々 (全宝生) 中里 宜資 森田 英基 富岡啓太郎 近藤 曜子
三池 公恵 三池 曜子

(下) 平尾 学

第40回 平成13年 (2001)

水原舞台で久々在京夫人も参加 40回記念大会盛り上がる

自ら「農学部の方が能楽師になつた変わり者」と称した故水原一瓢さんが、凝りに凝つて造つた六瓢能舞台は話しやすい。うとう会としてのこの舞台は、第28回以来十二年ぶりである。参加人数は九十人から五十人と減つたが、二日間の熱演を天国の水原さんも楽しんでご覧になられたことであろう。

番組のトップは素謡「鶴亀」で本社グループの新人、北河康

之さんがシテ、富田篤尚さんがワキでの初舞台であつた。水原夫人の圭子さんが仕舞「東北」を舞つた。

第一日を全観世の素謡「求塚」でしつかりと締めくくつた後、小田急線で町田市へ移動。宿舎のホテル町田ヴィラは、元東研グループの謡仲間で協和発酵から独立した松本正さんにお世話をいただいた。懇親パーティーを兼ねて四十周

年記念誌のための取材を参加者全員発言の形で行った。この内容を別掲の特集「うとう会40年」と「私の謡曲」にまとめた。
 第二日には在京夫人グループも久し振りに参加してください、素謡「巻絹」を謡った。全宝生の素謡「富士太鼓」で二日間を謡いおさめた後、打ち上げに入

り、前夜のパーティーで残った取材の続きを行った。
 取材の中では、思い思いに自分の謡曲への思い入れを語っていただいたが、うとう会創設から牽引車の役割を果たしてこられた方々の言葉には、長年の精進の結晶が滲んでいた。

第四十回 協和うとう会番組

平成十三年十一月二十三日(金)二十四日(土)

(第一日)

素謡

開演 十二時半
 於 大和六藝能舞台

鶴 亀

シテ 北河 康之

ワキ 富田 萬尚

胡 蝶

シテ 加藤 恵理

ワキ 森田 英基

通 盛

ツレ 山野 順三
 シテ 上森 茂

ワキ 浅井 昇

弱法師

独 吟

三池 公恵

船弁慶

中村 信郎

東 北

高山健一郎

藤 戸

田辺 博章

実 盛

(一謡)

安嶋 将

松 風

連 吟

大森 大陸
 但見 靖啓

竹生島

田辺 博章
 西野 邦明

玉 葛 独 杖
 高橋 孝夫

盤 渉 紫 一 管
 西村 淳

花 筐
 ツレ 加藤 弥生子
 シテ 磯部 武夫

ワキ 瀬島 常雄
 ツレ 田村 直邦

野 宮
 シテ 野村 忠亮

ワキ 藤田 良輔

鶴 龜 連 調
 キリ 中里 良作
 キリ 三池 公恵
 キリ 加藤 恵理

羽 衣
 加藤 恵理

田 村 (仕 唄)
 森田 英基

東 北 水原 圭子

実 盛 (キリ) 富岡啓太郎

塚 ツレ 木谷英美枝
 シテ 西村 淳

ワキ 浅井 昇

求 塚 (全親世)

(終了予定 十七時頃)

(第二日)

開演 午前九時

賀 茂

ツレ 細野 政美
 シテ 水滝 彰一

ワキ 山田 義之
 ツレ 藤井 武夫

小 督

トモ 藪下 尚夫
 シテ 渡辺 尚子
 シテ 松井 信行

ワキ 八尾 和広

熊 野

シテ 大橋 良作
 ツレ 矢尾 幸三

ワキ 中里 宜賢



↑「花筐」の加藤・磯部・瀬島・田村さん



附
祝
言

半
卷
富
士
太
鼓
(在京夫人)
(全宝生)

シテ 鍛冶 義延
高山 健一郎

ワキ 小池 方子
岡田 英明

半
部
(四日市)

シテ 木谷 英枝

ワキ 山家 多喜男

船
舟
慶

(大) 富岡啓太郎
(小) 加藤弥生子

(苗) 高田 曜子

紅
葉
狩

(大) 岡田 英明
(小) 三池 公恵

(苗) 高田 曜子

野
宮

木谷 英枝

(大) 岡田 英明
(小) 山家 多喜男

(苗) 富岡啓太郎

新
井

舞 離 子

新井 純

独 吟

(終了予定 十三時半頃)
解散予定



↑全宝生の「富士太鼓」前列左から高山・鍛冶・岡田さん
→上全親世の「求塚」役は左から木谷・西村・浅井さん
→下「大和六瓢能舞台」で記念大会を盛り上げた全参加者